かきしの！　～かわいい女の子やきれいなお姉さんが見る影もなく破壊しつくされて殺されるだけの話～

ＢＢＳ大阪

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
かきしの！　～かわいい女の子やきれいなお姉さんが見る影もなく破壊しつくされて殺されるだけの話～

【Ｎコード】
Ｎ９０８４ＥＲ

【作者名】
ＢＢＳ大阪

【あらすじ】
女の子や女の人が理不尽にひたすら破壊され殺されるだけの短編連作小説です。胸糞です。何の救いもありません。

吐いたり鬱になったりしても苦情は一切受け付けませんので、あしからず。
耐性のない方は本当に読まないでください。

繰り返しますが、救いはありません。サブタイトルに名前のある女性は全員破壊または凌辱され惨殺されます。

女性が惨殺される回に★マークを付けました。Hなシーンは今のところ全話にありますので特に印は付けておりません。

それでも読んでみたい、という豪気な方だけ、ご覧ください。

なお、タイトル長いので「かきしの！」に変更しました（２０２１．０７．０２）。

第1話　川島茉奈（★）（前書き）

今回の犠牲者は川島茉奈ちゃん１６歳。私立のお嬢様学校に通う高校一年生です。
おっとりした性格でいつも笑顔を浮かべています。
趣味は音楽鑑賞と演奏。得意なのはバイオリン。
将来は音大に進学し、プロのバイオリニストになるつもりです。
彼女の実力なら、おそらく実現可能でした。この事件に巻き込まれさえしていなかったら。

深窓の令嬢らしく性には奥手。高校になって友達になった奔放な北山裕子の影響でエッチのやり方とか、フェラチオやクンニリングス、パイズリなんて言葉を教えてもらいましたが、そんなことを自分がする日が来るとは信じられない、オナニーすらしたことがない女の子です。

でもその圧倒的な美貌とモデル体型はみんなが認める学園ナンバーワン。
街を歩くと視線を感じるのが恥ずかしくて、出来るだけ地味な格好をしているのですが、それがまたギャップ萌えでより注目されてしまうことに気が付いていないナチュラルボーンかまとと。

さて、そんな茉奈ちゃんが悪魔に捉ってしまいました。

第1話　川島茉奈（★）

（あれ、私……、ここはどこだろう？）

川島茉奈はゆっくりと目を開いた。

（痛い！）

腕がしびれるように痛い。視線を上げると、両腕が太い縄で縛られ、天井から吊り下げられていた。

（え、なに？　これなに？）

薄暗いけれど広い屋内で中腰で腕を吊られている自分に気が付いた。倉庫のように思える。

（私、どうしたんだっけ？さっきまでバイオリンのお稽古していたはずなんだけど……？）

危機意識が希薄な川島茉奈は、自分がすでに後戻りできない状況にあるとは露とも思っていなかった。

普通の女子なら、腕を縛られている時点でパニックになっているだろう。

ちゃんと制服は着たままだ。着衣の乱れはない。

（うーん、困ったなあ。手を左右に開かれてるから、縄がほどけない。あ、立ち上がればいいのかな？）

脚を立てようとするが動かない。

（あれ？）

脚は脚で膝のところで縄に縛られて、コンクリートの床に打ち込まれたフックに固定されていた。

（これでは動けませんねえ。自力では無理です）

のんびりとそんなことを考えながら、茉奈は助けを呼んでみることにした。

「すー、だーれーかーいーまーせーんーかーーー！」

案外大きな声を出せる茉奈だった。声楽も習っているので、腹から声を出すのは得意だった。

そもそも茉奈を拘束した悪意を持った相手が近くにいるはずで、来るとしたら救援よりも犯人なのだが、茉奈はそこまで考えが及ばない。

反響が止む。音の具合からみて、ここは小さな劇場くらいのスペースのようだった。

しーん。

反応はない。

中腰で腕を吊られているのは結構きつい体勢だ。茉奈は腰が痛くなってきた。

「だーれーかーいーまーせーんーかーーー！　たーすーけーてーくーだーさーーーい！」

もう一度大声を出してみる。
実は、この部屋は結構寒い。
尿意を覚えはじめた茉奈であった。

（困ったなあ。腕も痛いけど、オシッコしたくなってきちゃったなあ。お漏らししたら恥ずかしい……）

「だーれーかーー！」
「やかましいな」
「え？」

人影が現れた。

背が高い。中腰の茉奈がかなり見上げる格好になる。１９０センチくらいあるかもしれない。

「捕まえたその日にヤルのは俺のポリシーじゃないんだが、でかい声だなお前。順番が違うけど今日はお前からにするよ」

そう言った男は、緩やかなウェーブの亜麻色の髪のイケメンだった。２０歳は超えていないだろう。

「すみません、大きな声を出して。腕が痛いんです。それと、お花を摘みに行きたいんです」
「花を摘みに？　……ああ、小便か。そこでやれ」
「？？？？！、そんなの出来るはずがないじゃありませんか」
「お前が小便するのもこれで最後だ。好きなだけぶちまけとけよ」

「何をおっしゃっているのですか？」

次の瞬間、猛烈な痛みが茉奈を襲った。膝を固定されていなかったら吹っ飛んでいただろう。

茉奈の長い黒髪が弧を描いた。

同時に茉奈をスポットライトが照らした。

制服の腹の部分が千切れ飛び、茉奈の皮膚をも削いでいた。脂肪の一部も持っていかれたようで黄色い粒が飛び散った。

「ぐほっほおおおふふぉぉぉぉぉぐげっ！」

茉奈が意味のない言葉を叫ぶと同時に、ちろちろと黄色い汁が股間から垂れてきた。

失禁したのだ。

スポットライトに照らされて、尿がキラキラと光った。

「殴られる前に出しときゃもう少しは気持ちよかったのにな。残念だったな」

（殴った？　いや殴られただけでおなかの肉までえぐられるものなの？てかものすごく痛いんだけど。こんなの無理無理無理！）

「うげっ……。す、すみません……許してください……痛いです……」

「はあ？何を許すんだよ？」

（確かに。許してもらうような事をこの人にした覚えはない。何を許せと言えばいいのかしらん？）

腹からの猛烈な痛みとおしっこを漏らした羞恥もあるが、それよ

りもこの状況を何とか解決したいと思うあくまでも前向きな茉奈であった。

目の前の人も乱暴だけど、話したら分かり合えると信じていた。

残念ながら、目の前にいるのは人間ではなかったのだが、茉奈にそんなことはわからない。

「か、神は、汝の隣人を愛せとおっじゃいました。今ここで出会ったのも、運命のお導き。であれば、愛し合うべきなんです！　こんな痛いことはもうやめてください！」

「ほう？　なんだお前セックスしたいのか。さすがは人間、いつでもアタマはエロに染まってやがるな。女から誘われるとは思わなかったがなあ」

「え？」

青年が指を鳴らすと、茉奈の制服が一瞬でバラバラに吹き飛び、縄が少し伸びて膝を曲げたまま仰向けに下着姿で床に寝かされる格好になった。

「え、え？　いや、恥ずかしい！」

美しい少女らしく、レースが上品にあしらわれた、純白のブラとショーツが露になった。

ショーツが濡れて張り付いているのと、腹部の皮膚がむしられているのが痛々しい。

今助け出されたとしても、お腹には一生醜い痕が残るだろう。

素晴らしいプロポーションであるだけに、悲惨な傷だった。黄色い脂肪と赤身が裂け目から見えている。

菜奈が痛みに耐えられているのが不思議なくらいだった。おそら

く初めて身体に与えられた暴力に対しアドレナリンやエンドルフィンが防衛的に分泌されているのだろう。

腕の縄は上から吊られていたはずだが、何故か今は床に平行になっている。

そのことをいぶかる余裕は菜奈にはなかった。

下着姿でスポットに照らされ、羞恥に頬がピンクに染まっていた。

「見、見ないで。見ないでください……」

「へん、えらくしおらしくなったな。でももうおせーよ」

脚の縄がジリジリと開き始めた。菜奈は抵抗するが、ショーツのクロッチの横に見える股の筋がぷるぷる震えるだけで、すぐに大きく開いた。M字開脚だ。

「こ、こんなの、こんなのイヤー！」

「キタねー女だなぁ。小便まみれじゃないか。気持ち悪いだろ」

青年が空中で指をスッと上下に降ると、菜奈のショーツが切れてはらりと落ちた。

（え、えーーー！）

青年がもう一度指を降ると、今度はブラジャーがフロントですっぱり切れて、左右に分かれた。

菜奈はスポットライトの真ん中で、M字開脚で全裸となった。薄い恥毛に飾られたスリットも、形の良い胸も恥ずかしいほど丸出しになった。

「いやー！　見、見ないで、ああっ、駄目です、こんなの、やめて、やめてー！」
「やかましいぞ。喉切ってやろうか」
菜奈はハッとした。超能力か何かわからないけれど、この人は離れたところから物を切れる。
本当に殺される。
「し、静かに、静かに……します……」
「それていいんだよ。じゃあ身体よく見せろよ。これで最後なんだし」
（これで最後……？　大人しくセックスしたら、開放してくれるのかしら？　でもこんなのが私の初体験なんて、ひどいなあ……。まだ恋もしたことがないのに……）
それは幸せな勘違いだった。
「聞こえないのか？　身体よく見せろよ」
「よく見せるって……。もう脱ぐ物がありません……。これ以上どうやれば……」
「ああ、腕引っ張り上げたままだったな。段取り狂ったからなんか調子おかしいな」
腕の縄が大きく緩んだ。無意識にさっと乳房と股間を隠す。
「コノヤロー隠してどうすんだよ。よく見せろって言ってるだろ」
「あ、すみません……」
一旦隠したものをまた晒すのはかえって恥ずかしい。でもこの人

を怒らせちゃダメだ。
茉奈はゆっくりと腕をどけた。

「じゃあ今度こそ身体をよく見せろよ。奥の奥までな」
「どうしたら、いいんですか？」
「マンコのビラビラを摘んで開いて奥まで晒すんだよ」
「マンコってなんですか？」
「カマトトかよ！　性器だよ性器！」
「えええっ、そ、そんなこと……出来ま……」

（いや、怒らせたら本気で殺される）

「いえ、や、やります……」

両手でピンク色の小陰唇を摘む。茉奈は心臓がバクバクとして今にも飛び出しそうに感じた。

（えいっ）

茉奈は意を決して性器を開いて見せた。
ヌルリとしたシミ一つない桜色の肉がスポットライトに照らされて露わになった。
大きく開いたにもかかわらず、膣口は固くギュッと閉じており、未通であることが男の目にも明らかだった。
恥毛も申し訳程度にしか生えておらず、性器の全容が隠すものなく晒されていた。

（恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしい……）

羞恥で涙が滲んできた。

「クリの皮めくって剥き出しにしろ」

（クリって何？　……あ、あ、きっとクリトリスのことね。皮なんてめくれるのかしら？）

オナニーすらしたことがない菜奈は、小陰唇をつまんだまま器用に右手の人差し指だけで性器のはじまりにある皮をそっとめくった。生まれて初めてクリトリスが外気に触れ、菜奈はゾクッとした。

（なにこれ？　なんだか背筋が痺れるのだけれど。クリトリスは快感に特化した器官だって習ったけれど、これが快感なのかしら？）

「ふむ、スッキリしすぎていてお前のマンコはエロさが足らんな。マンコはもういいや。次は乳首を勃てろ」

（え、え、私の性器変なのかな。でも他の人の性器なんて見たことないもの、わからないわ。こんなことなら裕子ちゃんに見せ合いっこしようって誘われたとき、断らなきゃよかったわ）

変どころか美しすぎる性器なのだが、茉奈は不安になった。

（あ、胸を尖らせなきゃ）

さすがに乳首は寒かったり擦れたりして時々尖るのは知っているので両手で乳首を摘んでみる。

茉奈の胸は大きすぎず小さすぎず、ハリがあり仰向けになっても形が崩れなかった。乳輪は少し盛り上がったピンクだ。その先端にある乳首は小さめだった。

少しの刺激で固く尖ってきた。

「硬そうな胸だなあ。もう少し柔らかくて垂れた感じのほうがいい味なのに」

（ええ……）

密かに胸には自信があったのでショックを隠せない茉奈であった。

「だいたい分かった。じゃ、そろそろ頂くとするか」

遂に来る。茉奈はまた少し涙を流した。

なんでこんなことになったんだろう。教室から家まですぐなのに。誰かと一緒に帰ればよかった……。

後悔するが、もう遅い。

「じゃあ、入れてやるよ。ただし一発でお前のあそこは二度と使い物にならなくなるがな」

青年はそう言いながら下半身を丸出しにした。

（う……そ……）

青年の股間から生えていたものは、びっしりと返しのとげがついた直径１５センチ、長さは５０センチはあろうかという肉の槍だった。

しかも亀頭には粒粒が四方八方に生え、カリは3センチは肉棒から張り出していた。

そしてえげつなく勃起して天を向いている。へそに付きそうだった。

肉棒どころか、かっちかちのそれは鬼の金棒か棘付き金属バットに近いモノだった。

（男の人のおちんちんって、こんななの？　裕子ちゃんから聞いたのと全然違うんですけど！　あんなの入るの？　無理でしょどう見ても！）

「ええと、汝の隣人を愛せってそういう男女の営みのことではないのですけれど……」

「そうだな。俺もお前を愛してるわけじゃない。同じだな」

精一杯の抵抗を口にするが、簡単にスルーされた。

（えと、えと、やめてもらう方法、他になにかないかしら？早く、早く考えないと。えーとえーと）

「じゃあ処女にサヨナラしろ。確かに痛いが、今からそれ以上の地獄の苦しみを味わうんだ。マンコやケツ穴の痛みなど大したことはないからな」

「え？　え？」

青年は凶悪なチンポをパニックになりかけている茉奈のきゅっと閉じた膣口に当てた。

何のためらいもなく、腰を進める。

ぶちぶちぶちっ！

「ぐえああがーーーーーーーーぎゃがやがやーーーーーーーぎゃぎゃあああああーーーーーーっ！」

「はい、貫通。てか人間の女は同じような悲鳴を上げるなあ」

処女膜どころか膣括約筋がブチ切れた茉奈は泣き叫ぶしかない。
青年が凶悪チンポを前後に動かすたびに膣粘膜がごっそりえぐられ、どぼどぼと大量に出血する。肉片も交じっているようだ。

「処女のくせに括約筋が切れちまったからただの穴になったな。まあ毎回そうなんだがな」
「うげえーうげえええええーーーーうえええええぇぇぇぇぐえええええーーーー」

青年は凶悪チンポを抜いた。
膣だったものは赤黒い血肉の穴になってぽっかりと口を開いている。小陰唇やクリトリスもえぐり取られたようだ。恥骨も砕けたのか、白い骨片すら穴のなかに見えていた。子宮も半分くらいすりおろされた様になっていた。

青年は大声で呻き続けている茉奈をひっくり返した。縄はその分伸びている。自由自在なようだ。

「さて、次はケツだ。うんこ駄々洩れになるから覚悟しとけよ。人間社会なら人工肛門だ。ま、今日で終わりだからどうでもいいか」

青年は茉奈の性器を破壊しつくした凶悪な肉棒を、今度は形よく盛り上がった二つの肉尻の奥になる、針で突いた穴のような美しい肛門に当てた。

「これはなかなかのケツ穴だな。こんなきれいなケツ穴もただの穴になるから面白い」

ぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎちぎち！

「マンコと違ってケツ穴は括約筋の抵抗がつえーな。でも、無駄無駄無駄無駄無駄！！！！」

「うぎゃあああああああぎゃあぎゃあああああうぎゃあぎゃあぎゃあああああうぎゃあぎゃがが！」

青年の巨大な肉棒は肛門括約筋すら裂断し茉奈の直腸から大腸まで犯しぬいた。

「おお、なかなか気持ちいいぞ。茉奈の最初で最後のセックスだから、精液出しといてやるぜ。ありがたく呑み込め」

青年は射精を自由にコントロールできるのか、さほどピストンもせず茉奈の腸に精液をぶちまけた。

ずるずると凶悪チンポを抜き取る。膣同様腸の組織もえぐられ肉片がずるずると出てきた。

太いカリが抜けるとき、ぶちっとひときわ大きな音がした。

会陰部が裂け、膣と肛門がひとつながりになってしまった。

「うげえええええええうげげぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ、はあ、はあ、はあ、はあ、うげえええぇぇぇぇ」

茉奈は息も絶え絶えの様子でコンクリートの床に這いつくばっている。

ぽっかりと一つの大きな穴になった膣と肛門から血がどくどくと流れ出していた。

茉奈の口からも、泡交じりの血が出ている。

血を噴きながら、茉奈は呻いていた。

彼女が今ここで助かっても、もう一生普通の生活はできない。

（イタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイイタイ…）

茉奈の思考は苦痛に埋め尽くされた。もはや何も考えられなかった。

「さて、もう縄はいいかな」

青年が指を鳴らすと、縄が消えた。茉奈を仰向けに反して、上半身を抱く。

茉奈の体温が下がってきていた。

「じゃあ、次はここをいただこう」

青年は茉奈の右乳房を片手で握った。愛撫ではなく、ギュッと縊りだすような握り方だ。

茉奈の形の良い乳房がひょうたん形にへしゃげた。

ぶちっ。

さほど力を込めたようには見えなかったが、茉奈の右乳房がちぎり取られた。

茉奈が跳ねた。

「ぐわーぐげげげぐえあーがあぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぎぇー！！！」

青年は乳房肉を口に持っていき、

食べた。

「ふむ、予想通り脂肪分が足りないな。乳腺も発達しきってないから甘さもいまいちだな。まあ子どものおっぱいとしてはこんなもんか」

あっという間に咀嚼する。

当然のように残った左乳房もむしり、食べた。

茉奈は乳房を失い、胸筋や肋骨までむき出しにされあえいでいた。もう大きな声を出す気力もなかった。

「メインに行く前におやつを食うか」

茉奈の白魚のような指を一本つまむと、手の甲側へバキンと折った。

「ぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

骨を折って、むしりとり、それも食べた。

そして次の指も同じようにむしり、数分後には茉奈の十本の指はすべて青年によって折られ、ちぎられ、食べられた。

「そういえば茉奈はバイオリン習ってたな。もう無理だな」

茉奈はそれどころではない。重ね掛けされる苦痛で意識が飛びそうだった。

「なんだ。もう反応がなくなってきたな。つまんないからさっさと

メインいくか」

青年は茉奈の右の二の腕をつかむと、肩関節をばきっと折った。左も同じく折る。

一本ずつが面倒になったのか、両足は同時に抱え込み、無残な穴になっている股間に足をかけ、ごりっと股関節を外した。

そしてそのまま両足を引き抜き、残った両腕もずぼっと抜いた。

茉奈は胴体と頭だけの姿で転がされた。悲鳴を上げることはもうなかった。

すーはーすーはーという弱い息だけが、茉奈がまだ生きている印だった。

青年は両手両足も食った。一瞬青年の腹が膨れるが、すぐに元に戻った。

「肉もいいけど、やっぱモツかな」

青年はそういうと、四肢を失った茉奈の腹に手刀を入れた。すっぱり腹筋が切れ、どうと茉奈の内蔵がこぼれだした。

茉奈の口や鼻からでる出血が増えた。

青年は茉奈の腹腔内に顔を突っ込み、そそるように内臓を食べ始めた。大きな肝臓も一口でペロリといった。長い腸は麺でもすするようにチューっと飲み込んだ。ふっとしかめっ面をしたのは、さっき自分が出した精液を飲んでしまったからだろう。

胃腸の内容物は平気で食うのに。

心臓を一噛みにすると、茉奈の顔が蒼白になった。

内臓をあらかた食べ終えると、茉奈の死体を上下逆にし胴体を尻から食べ始めた。背骨や骨盤も平気でバキバキと顎で砕きながらどんどん食べる。

しばらくすると、うつろな表情を浮かべている首から上だけになった。

青年はひょいと茉奈の頭を持ち上げた。

長いきれいな黒髪を右手でひとつかみにすると、左手でこめかみを押さえてぎゅーっと引っ張った。

べりべりと茉奈の額あたりから皮膚が裂け、髪の毛を含めた後ろ半分の皮膚がめくれて剥けた。

満足げに茉奈の顔を持ち上げると、顔面に食らいついた。

一瞬で茉奈の顔は醜く食い破られ、その美貌は地上から消滅した。

頭蓋骨もバキバキと齧り、脳をすすり、食い尽くした。

茉奈だったもので残ったのは、皮膚ごとむしられた黒髪だけとなった。

髪の毛は食べてもうまくないようだ。

「ごちそうさまっと。若いのもそれなりにいいけど、やっぱ俺は脂の乗った方がいいな。次はあいつにしよう」

早くも次のターゲットを決めた青年であった。

それから数時間後。

悪魔の消化は早い。

青年は、くっさいくっさい見事な一本糞をひりだした。

それが川島茉奈という美少女の末路だった。

第1話　川島茉奈（★）（後書き）

今回は1話完結の短編集ですので、今回の亜麻色の髪のイケメンが主人公というわけではありません。
いずれ再登場することもあるかもしれませんが。

第2話の1　石川弥生・白川桜子（前書き）

石川弥生と白川桜子は同じ中学に通う3年生。ふたりは幼なじみで、弥生のいとこで近所に住む「おにい」こと、二つ年上の佐伯健太郎に幼稚園の頃から遊んでもらっていました。

高校2年生の健太郎はぐんぐんと大人びた背格好になってきて、元から端正な顔立ちでしたが、今や学力優秀スポーツ万能という絵に描いたようなイケメンに育ち、高校内に健太郎ファンクラブがあるとかないとか。

弥生も桜子もいつしか健太郎を男性として意識しており、女子から（実は男子からもなのですが）人気の「おにい」が誰かに取られないかと気が気ではありません。

ふたりは正直に自分の気持ちを打ち明けあいました。そしてどちらかが彼女になるなら納得なのですが、ほかの女に健太郎を取られてはならじと同盟を結びました。

おにい包囲網。

高校と中学という学校の違いはいかんともしがたいですが、いざ放課後となると二人で迎えに行き、或いはお迎えされて、健太郎にぶら下がるように遊び、勉強を教えてもらい、夕食を共にしていました。

弥生も桜子も「おにい」と同じ高校に進学希望ですが、地域随一の高偏差値校。桜子は合格圏内ですが、学業が苦手の弥生はかなり焦っています。

「おにい」の教え方が上手なのもあって、弥生は一所懸命質問し、必死に問題を解いています。

努力は必ず報われるよ。
健太郎は口には出しませんが、そんな弥生を優しい目で見つめています。
もちろん、桜子に対しても同様です。

健太郎ももちろん弥生と桜子の自分への想いを知っていますが、いくらなんでもまだ中学生なので、もう少し大人になってから考えればいいや、と気づかないふりをしています。

それにしても二人ともきれいになったよな、と健太郎は思います。

いとこの弥生は端正な顔立ちにスリムな体がいかにも日本人形的な和風美人。
かといっておとなしいわけではなく、中学ではバスケットボール部に所属し、その中心選手として活躍しています。軽いフットワークとジャンプ力で相手を翻弄します。
ひそかに同級生から「姫」と呼ばれていますが、本人もまんざらではない様子。

桜子はロシアとのクォーターで、白く抜けるような肌にグレーの瞳、そして薄い色の髪。そのせいで学校に毎年地毛である旨の届け出をしないといけないので面倒だとブー垂れるのも可愛い、中学生でありながらFカップの爆乳美人。
運動は苦手ですが、学力はトップクラス。特に英語と数学は毎回ほぼ満点という、グラマー才女。
おっぱいのでかさと知能が正比例した珍しい例かもしれません。
桜子のおっぱいはM〇GIシステムよろしく二個のサブ脳が詰まっているとうわさを流す口の悪い同級生もいます。

そんな二人からあからさまに好意を寄せられて、健太郎は充実し

た、幸せな日々を送っていました。

この事件が起きるまでは。

第2話の1　石川弥生・白川桜子

（あれ……？）

佐伯健太郎はようやく目を覚ました。

真っ暗だ。

ひんやりとした感触が背中にある。

危険を察して起き上がろうとするが、両手両足が動かない。

唯一動く顔でぐるりを見渡し、暗闇ではあったが自分が全裸大の字で、コンクリートの床に鎖で縛られていることを知った。

（なんだよこれ。なにが起こってるんだ？）

健太郎は記憶を紐解く。確かさっきまで弥生と桜子と毎年恒例のクリスマスパーティーをしていたはずだ。

それぞれの両親も含め、三家族がうちの家に集まって、チキンやケーキを食べてプレゼント交換。

弥生からは三田みやびの最新刊小説、桜子からは手編みのミトンもらったっけ。

弥生がずっるーぃ！　反則ーとか言ってたな。

俺は弥生に穴をあけずに装着できるマグネット式のピアス、桜子にはスケッチ用のマーカーセットをあげた。

どっちも欲しがってたヤツだ。

両親ズはシャンパンやワインを飲んで盛り上がってた。

あっそういえば、弥生のお父さんは俺のところに嫁に行くなら納得とか、桜子のお父さんもそれは聞き捨てならないとか言ってたな。
俺っていつか弥生か桜子か選ばないといけないのかな。
どっちも正直同じくらい好きなんだけど。日本じゃ重婚は罪だしなあ…。

両親ズが結構飲んで深夜までゴーゴーな勢いになってきたので、中学生の弥生と桜子を遅くなる前に家まで送り届ける役を仰せつかったんだった。

……それで、どうなったんだっけ？

ってのんびり回想してる場合じゃない。これはかなりやばい状況だ。どうしたらいい？
考えろ、俺。
裸で寝かされているのは屈辱的だったが、それ以上に弥生と桜子が心配だった。
俺とおんなじ目にあっていたら、と思うとギリギリと不安と怒りが黒く渦巻いてきた。

（そんなことになっていたら、俺は絶対犯人を許さない！！）

「やー、健太郎君。ようやく目が覚めたね。あれから２０時間は経ってるよ。よく寝てたねえ」

突然声が降ってきた。粘っこいとしか言いようがない男の声だ。

同時にスポットライトが健太郎を照らした。まぶしくて反射的に

目を閉じる。

薄目を開けるとスポットライトは一本ではなかった。
自分を照らす以外に、足の方向に二つのスポットライトが点り、小さな体が二つ、シルエットで浮かんだ。
寝たままなので首を持ち上げて凝視する。結構つらい姿勢だ。

悪い予感がする。

目が慣れてきた。

「弥生！、桜子！」

スポットライトに照らされていたのは、やはり鎖でつながれた弥生と桜子の姿があった。
自分と違って立った状態で大の字に縛られている。
そして自分と同じく裸だった。

胸も、股間も剥き出しになっていた。

小学生の頃は一緒にお風呂に入ったりしていたが、健太郎が中学に進むとそんなこともなくなった。
だから、二人の裸を見るのは健太郎も数年ぶりだった。

弥生は胸のふくらみは慎ましく、乳輪も乳頭も薄いピンク色だった。だが、股間の陰りは深く黒く、白い肌に淫猥なコントラストを浮かべていた。
手足は細く長く、けれどしなやかな筋肉がついていた。
アスリートにもかかわらず、その肌に日焼け跡はまったくない。
つややかで張りのある素肌だ。

バスケは室内競技でもトラックでランニングや柔軟体操を行っている。体質的に日焼けしにくいのかもしれないし、もう暮れだから焼けてもすぐ色が抜けるのかもしれない。

桜子は着衣の上からもわかっていたが、中学生にあるまじき爆乳だった。去年Ｆって恥ずかしそうに告白してたがこりゃＧぐらいあるかもしれない。さすがにその大きさゆえやや垂れ気味だが、プルンと丸い柔らかそうなおっぱいだった。乳輪も大きく乳首もくっきりと膨らんでいた。

桜子は弥生と逆に夏の水着の跡がまだ残っていた。スクール水着の型に白くなっているので、桜子の恥ずかしい部分がいっそう強調されていた。

恥毛は薄く、前から見てもスリットが股をくっきりと割っているのがわかった。

よく見ると、二人とも顔は上気し、股間から透明な汁をとろりとろりと垂らしながら、ぶるぶる震えていた。

がんと頭を殴られたようなショックとともに、ちんこが堅くなるのを感じ（ちょ、やべ、それどころじゃないだろ！）と素数を数えだす健太郎だった。

「へっへっへ。今回は契約者の趣向でね、「おにい」こと健太郎君の前で二人の膜をぶち破る契約なんだ。だからまだ二人は、マンコは清いままだよ。マンコはね」

やけにマンコを強調しながら、声の主が現れた。

銀色の髪の美少年。

その眼は金色に輝き、人にあらざる者のようだった。

「へっへーっ、まあそんなわけで、マンコは新品のままだけど、二人には君が寝ている間にじっくりエッチーなことを叩き込んだからね。肩をチョンとつつかれただけでも淫汁をブッシュードバドバッて噴き出すよ。全身が性感帯になっちゃったからね。ブッシュードバドバだよ。面白いだろ。すぐに見せてやるから期待して待っててね」

けらけらと笑う。顔は美形なのに、物言いは下種（げす）だった。

「貴様二人に何をした！」

健太郎は二人が何らかの薬物を投与されて精神支配を受けたと解釈した。中学生を薬漬けにするなど悪魔の所業だ。

怒りが爆発した。

「この野郎！　許さない！　許さないぞ！！！！」

裸で床に大の字に縛られている健太郎は、そう叫んで鎖のたるみの範囲でじたばたした。

じたばたというか、がちゃがちゃというか。

でもそれが精いっぱいだった。

しばらくもぞもぞ動いていたが、鎖はどうにもならなかった。縛られたところが痛くなっただけだった。

「……え、そんで終わり？」

銀髪の美少年があきれたように言った。

「まあ君の役目は二人に調教を納得させるためだけだったから、もうどうでもいいんだけど。君を殺すって言ったら二人とも調教メニューをレベル１から１０まで受け入れてくれたよ。おかげで処女のくせにド淫乱なメス豚が出来上がったよ。ありがとね。契約者も大喜びさ。

最後の仕上げは健太郎君の目の前でといわれているので、そろそろ主役にご登場願おうかな。

では、最高の舞台にいたしたく。おいでくださいませ、契約者」

美少年が芝居がかった声を出すと、新たなスポットライトに照らされてハゲデブチビのおっさんが裸で現れた。

醜い。醜すぎる。

こいつ知ってる。用務員の川崎だ！

そう、その男は弥生と桜子の通う、そして健太郎も通っていた中学校の用務員川崎だった。

淫猥なうわさが絶えない中年男だ。

いわく、女子トイレを盗撮した。いわく、更衣室からセーラー服を盗んだ。いわく、生徒と援交していた。エトセトラ、エトセトラ。

それだけ噂になっているのに、今も用務員を務めているのは証拠がないからだ。

健太郎は基本性善説なので、そんな話は気持ち悪い目で女子をいつも見ているせいで、ただの噂だと思っていた。

今日の今日までは。

健太郎は知らないが、川崎が用務員を続けているのは校長を脅しているからだ。

生徒と援交しているのは校長で、その証拠写真を川崎が握っていた。

いくら金を積まれても、川崎のような醜い男とセックスする女子はいなかった。

なんせ風俗ですら指名拒否されたことがある逆チェンジ男である。それが川崎だった。

ある意味伝説級の醜さといえよう。

「川崎ー！　弥生と桜子に手出したらてめえただでは済まさんぞ！」

「は、ちんぽまるだしで縛られて粋がっても怖くねえよ。大人なめんな、佐伯」

そういう川崎もちんぽ丸出しなんだが。しかも包茎で短い。

川崎は健太郎の名前を憶えていた。というより憎き敵（にっくきかたき）だった。弥生と桜子という二大美少女をはべらすイケメン。

川崎は弥生と桜子が入学してきた日の衝撃を忘れない。当時もずば抜けて美しい少女たちだったが、時がたつにつれその美しさにさらに磨きがかかり、川崎にとっては神々しい天女な二人だった。

その神々しい二人の姿を瞼に焼き付け、脳内で裸に剥き、妄想で犯しつくした。それをおかずに用務員室で自慰に及んだこともある。

それなのに、ある日の放課後、校門前で人目もはばからず、犬がじゃれるかのように健太郎に抱きつく二人を目撃して嫉妬に狂った。

天女へのあこがれは、憎悪にまみれた殺意に変わった。

「あ、そうそう、縛ってんのは演出だから。それと」

美少年がそういうと、弥生と桜子を拘束している鎖が消えた。
二人は同時に片手で乳房を揉みしだき、もう片手でクリトリスを擦り始めた。
ブッシャードバドバ！
ブッシャードバドバ！
二人の股間からマン汁が噴いた。美少年の言ったことは本当だった。
「あああああぁぁぁっああああああぁぁぁあああああああああっぁぁぁぁあああああああああああ」
「うふっうふっうっうふっううふぅぶっぶっぶっうふうふっうふっうふっうっうふっううふぅぶっぶっうっ」
二人が獣のような大きな声をあげる。イッた。あの弥生と桜子が絶頂を迎えた。
しかも、人前で全裸自慰で。盛大に。
弥生は「あ」で桜子は「う」か……。
などと冷静に聞いてはいられなかった。
エロすぎる。
普段の二人からは想像もできない嬌態だった。
思わず、健太郎のちんぽがびーんと勃起した。普通サイズだった。きちんと剥けている。
未使用ちんぽだが。
川崎のちんぽも勃起していた。ポークビッツだった。勃起しても皮をかぶったままだ。

素人童貞だが。

「あははははは！　おもしれー！　ケッサクー！！　てなわけで、縛っとかないとこのメス豚どもすぐに自慰はじめちゃうからって理由もあったのさ。君が起きるほんの１０分前まで嬲ってやってたのに。セックスしたくてしたくてしょうがないんだ。健太郎君が起きたら生本番してもらえると、それだけを楽しみにしてるんだぜ。どの淫乱だよなこのメス豚」

二人は一度の絶頂では物足りないのか、またクリトリスを擦り乳房を鷲掴みにした。

ブッシャードバドバ！
ブッシャードバドバ！

「あああああぁぁぁっあああああああぁぁぁあああああああああああああああああああっぁぁぁぁぁ」
「ぶっぶっうふうふっうふっうっうううふっうふっうっうふっうふっううふぅふっうううふぅぶっぶっうっ」

また盛大にマン汁を噴いた。床が水たまりを作っている。
脱水症状にならないか、不安なくらいだ。
美少年は涙を流して大笑いしている。

二人はまた自慰を再開した。
４回目の噴出あたりで、美少年が真顔になった。
「飽きた。てかこれじゃいつまでたっても話が進まないよね。調教レベル１０はやりすぎだったかな？ちょっと下げるね。レベル３くらいで、いってみよーっ」

ぱちんと指を鳴らすと同時に、弥生と桜子は慌ててしゃがみ込み、体を隠すように後ろを向いた。

「おにい、ごめんごめんごめん。そして見ないで見ないで見ないで。お願いお願いお願い！」

自我を取り戻した弥生が泣きながら叫ぶ。形の良い尻が丸出しのまま。

「おにい、今までのこと忘れてください。お願いします……。私もう生きていけません……」

桜子もしくしくと泣きながら懇願する。大きめのお尻が丸出しのまま。

「弥生、桜子、あきらめるな！　三人揃ってるんだ。こいつらぶちのめして家に帰ろう！」

健太郎は勇ましいことは言うものの、鎖はがっちりと固定され、どうやって抜け出したらいいのかわからない。

そしてちんぽは相変わらず勃起していて、健太郎が身をよじるたびにプラプラと揺れていた。

健太郎視点では、自分の足元方向で話が展開しているので、どうしても勃起してプラプラしてる自分のちんぽ越しに見ることになる。

情けないアングルであった。

ようやく俺の出番というかのように川崎がのしのしと近づく。

弥生の肩に手をかけると、無理やり振りむかせ、唇を奪った。

健太郎の脳が沸騰した。

弥生の唇がよりにもよって川崎なんぞに奪われた！

なぜだなぜだなぜだ！

ありえない！

弥生は一瞬目を見開くが、すぐにとろんとした表情になった。

川崎はべろんべろんと長い舌で弥生の口腔内を舐めたおす。

くっさいくっさい口臭がぶわわっと広がった。

「川崎ー！　貴様ー！」

「今頃怒っても遅いよ。マンコは新品だけどその他はもう契約者と僕とでがっつり開発済みだからね。レベル3だからブッシャードバドバとはいかないけど、ほら、マン汁がたらたら垂れてきたよ」

そのとおり、ひきしまった尻の間からつーとマン汁が滴った。

ぶぼっと音を立てて川崎が口を話した。よだれのアーチがかかり、そして切れて弥生のつつましい胸に垂れた。

魚が腐ったようなにおいが漂う。おおむね川崎のよだれと思われた。

「あ、あ、おにいの前で……おにいの前で……。ひ、ひどい……」

あの強気な弥生がさめざめと泣いた。なぜそこまでされて抵抗しないのかと健太郎は思った。

川崎は当たり前のように今度は桜子の顔をつかんで自分に向けると、「いや、いや……」と小さくつぶやくのを無視してかわいい唇を蹂躙した。口腔内をベロ舐めされ、尻の間からマン汁を垂らし、よだれのアーチが胸に垂れるところまで同じだった。

「そろそろやっちゃう？」
美少年が川崎に聞いた。
「いや、マンコはまだ先だ。佐伯が絶望する顔がもっと見たい。弥生と桜子がどこまで開発されたのか見せつけてやる。げへへへへ！」
「ですよねー」

抱いたままの桜子を健太郎の方に正面を向かせた。再び、日焼け跡のせいでよりエロさが強調された桜子の胸や下半身が露になる。
健太郎のチンポがさらにガッチガチになる。
川崎が桜子のぷっくりした乳頭に吸いついた。

「あはっ！」

ハートマークがつきそうな嬌声を桜子が上げた。そしてすぐに
「ご、ごめんなさい、おにい」
と慌ててつけたした。

川崎が洗車ブラシのようにベロを高速回転させて桜子の乳首を舐めたおす。

「ぶっぶっうふうぶっぶっうふうふっうふっうふっうっうふっうっうふっうふぅふっうふぅ！」

桜子は丸見えの股からぼとぼとと愛液を溢れ出した。
悲鳴は甘さを含んでいた。
喜んでいる。
川崎に高速乳首舐めされて喜んでいる。

川崎はさらに乳首を噛んで、そのまま自分の顔を持ち上げた。桜

子のたっぷりしたおっぱいが引っ張り上げられる。かなり強く乳首を噛まれているはずだが、桜子はとろけた表情をしていた。
パと川崎が口を開くと、桜子のおっぱいがぽよんぽよんと跳ねた。

それを二三度繰り返す。
桜子の垂らすマン汁が増量１５０％になった。

健太郎は涙を流した。ちんぽは勃起したままだった。

「桜子、俺におっぱいいじられるのが大好きなんだぜ。よく分かっただろう。そうそう桜子だけじゃないぞ。弥生もだ」

川崎は片手で桜子を抱きながら、弥生の美しい髪をぐいと引っ張って自分に寄せた。

「堪忍して堪忍して堪忍して……」
弥生が小声で川崎に懇願する。

「桜子だけ気持ちよくなったら可哀そうだからな。お前も気持ちよくしてやる。飛べや」

川崎は弥生の慎ましい胸をべろりと舐め乳首をチューっと吸った。

「あはーーーーっ！」

弥生は電撃を浴びたように、眼をこれ以上開けないぐらい見開き舌を突きだしてぶるぶると痺れた。
じゅわーじゃばばば。
愛液なのか尿なのかよくわからないが、茂みの奥から大量の液体を噴射した。

「なっ、弥生もいい感じにこなれてるだろ。でも、まだまだこんなもんじゃないぜ」

川崎は桜子に何か小声で指示した。桜子はいやいやと首を振ったが、もう一度川崎に何か言われて立ち上がった。

「おにい、これから川崎様のおちんぽで愛していただきます。特等席で、じっくり、よく、見てね……。その前に……」

桜子はそう言ってにこっと笑った。ボロボロと涙を流しながら。そのまま健太郎に近づき、彼の頭をまたいで立った。

健太郎の上に、だらだらと愛液を流す桜子のマンコがあった。一本筋にしか見えないきれいなマンコだった。

栗色の恥毛は薄く生え、ぷっくりと膨らんだモリマンだった。

健太郎は見ちゃダメだと思いつつも、目を桜子のマンコから離せなかった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……」

小声でつぶやきながら、桜子は腰を沈めた。

桜子のびしょびしょに濡れた性器が健太郎の顔に押し付けられた。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

そう言いながら桜子が腰を前後左右ににグラインドさせた。健太

郎の顔がマン汁でべとべとになる。
顔を濡れた肉でブラッシングされながら、桜子を守りたいという気持ちより、性器を、陰唇を、クリを、膣口を、肛門を舐めたい！という欲望が勝った。

健太郎も限界だった。

舌を長く突き出す。

「うびっふぶっふぶううううぶぶぶぶぶぶうぶううううっぶぶぶっふぶぶぶぶぶぶうぶううううっぶぶっ」

桜子がまた盛大にイった。
桜子が腰をグラインドさせているので舌を出してるだけで股間のすべてを舐められた。
桜子の愛液は甘く、性器の肉はどこまでも柔らかかった。

年下の幼馴染、自身が保護しようとしていた美少女の一人を汚してしまった後悔は、健太郎の胸の深いところに刺さったが、もうやめられなかった。

健太郎はひょっとこのように口を突き出し、舌先でべろべろした。
桜子の嬌声がひときわ大きくなった。

「桜子、こっちを向け」

いつの間にか川崎が頭の上にいた。桜子が体を入れ替え、健太郎と反対向きになり、尻を突きだす。

「おにい、ごめんね……ごめんね。……しっかり見ててね。私が川崎様のオナホ奴隷になったところを」

オナホ奴隷……。桜子、なに言ってんだよ。

桜子のマンコを舐め倒したことで、健太郎の心も半ば壊れていた。

桜子のその言葉が合図のように、川崎が桜子の腰を引き寄せ一気にちんぽを差し込んだ。

一瞬、処女が散らされたのかと思った健太郎だが、そうではなかった。

川崎の包茎ポークビッツは、桜子の肛門を貫いていた。

ミニミニサイズとはいえ、何の抵抗もなく肛門に呑み込まれた。

桜子のアナルはしっかり開発されていた。

その光景を、下から覗き込む形で健太郎は見せつけられた。

「あっはーん！　きたー！　きたきたきたきたきたきたきた～～～！」

ブッシュー！　ブッシュー！　ブッシュー！

川崎のピストンに合わせて、桜子の潮が断続的に健太郎に降りかかる。

マン汁の間欠泉だった。

第2話の1　石川弥生・白川桜子（後書き）

女の子二人にしたら長くなってしまったので、分割掲載します。
作者のスマホ古い機種だから処理が追いつかないのか、８千字前後でエラーで読みこめなくなっちゃうんです。
すみませんｍ（＿＿）ｍ

第2話の2　石川弥生・白川桜子（★）（前書き）

ＮＴＲ（偽）展開書いてたらなんか楽しくなって長くなっちゃって、二話に分割しました。

今回で弥生ちゃんも桜子ちゃんもきっちり死にますので、ご安心ください。

１話でうんこにしちゃったので、オチ考えるのちょっと大変でしたが、このパターンだと色々バリエーションが出来そうです。えへへ。

第2話の2　石川弥生・白川桜子（★）

桜子の肛門にぐっちゃぐっちゃと川崎の極小ちんぽが出し入れされている。

それを目の前１０センチぐらいで見せつけられて、健太郎はボロボロ泣くしかなかった。

涙には本当に血が混じっている。

怒りがピークになると血の涙が出るというが、本当だった。目の毛細血管が切れたのだろう。

「お前のケツはぐりんぐりんと締まって気持ちいぞ。特に今は佐伯に見られながらだからより締まるな。佐伯にケツ穴掘られてる妄想でもしてるんだろ。ドスケベなメス豚だな」

「うえううえええええうえええうえほっすみまうほっせんうほっおにいにうほっケツ穴うううえほっ掘られたらもううほっ」

「下品なメス豚め。そらそら出すぞ」

「えええええええぇっぇぇぇぇ無理無理無理うほっほっうほおおおおウホッほっほっほっうううううほっ」

川崎の腰振りに合わせてエロい悲鳴を上げていた桜子の腸に、川崎は精液を注いだ。

ちょろ。

川崎の精液は、チンポ同様ごく少量だった。

その直後。

ぶりっぶりぶりぶりぶぼっ。ぼっ。
茶色いドロドロしたものが、桜子のケツ穴からぶぼぶぼと出て健太郎の顔に垂れた。
うんこだ。
軟便なので、鼻の穴や耳の穴に入ってきた。いくら美少女と言ってもうんこは臭い。
健太郎は屈辱で脳がスパークしそうだ。

「ああ！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」
桜子が狂ったように謝るが、それより顔に垂れたうんこが健太郎には大問題だった。桜子自身もケツから太ももにかけてうんこが飛び散っていた。

「わはははは！　いいざまだな佐伯。うんこまみれじゃイケメンも台無しだな」
「契約者ー、さすがに僕うんこは嫌いなんだよ。ケツ掘るなら浣腸してからにしてくれよー」
「まあそういうな。次弥生のケツ掘ったら洗い流していいから、もう少しこのままやらしてくれ」
「えー、まあいいけどさ。僕ちょっとあっち行ってるよ」

美少年の姿が消えた。
弥生。そうだ弥生は何をしてるんだ？　今なら川崎をぶちのめせるじゃないか。弥生ならそれができる！

うんこまみれになりながら、ちんぽ方向を見た。
弥生はへたり込んでオナニーしながら腰をびくびくさせて盛大にマン汁を噴いていた。
ダメだこりゃ。

川崎が桜子の美しい髪をつかんで弥生のそばに引きずっていった。
入れ替わりに弥生の腕をつかんで健太郎のそばにやってくる。

「弥生、健太郎の顔をきれいにしてやれ」

なん……だと……

弥生は何のためらいもなく桜子のうんこを健太郎の顔から舐めとり始めた。

（う、うんこ食ってる！　弥生が、桜子のうんこ食ってる！）

もはや訳が分からなくなりつつある健太郎だった。
しかもうんこ食ってる弥生は明らかに嬉しげだ。健太郎の顔を舐めているからか、桜子の始末をしているからか、はたまた川崎の命令を実行しているからか。
鼻の穴や耳の穴にもぐりこんだうんこもあらかた奇麗にした。

「口開けろ」

川崎がそういうと、弥生が口腔内を見せた。どっちに見せたらいいのかよくわからなかったようで、川崎に見せ、健太郎にも見せる。
うんこの大半は飲み込んだようだが、歯茎や舌奥にまだかなりこびりついていた。

「健太郎とキスしてやれ」

飛びつくように健太郎に張り付くと、濃厚な接吻をした。

やられた健太郎はたまったもんじゃない。うんこが口の中を侵食した。臭いキモイ。

吐いた。キスしたまま。

弥生の鼻の穴からゲロが噴出した。

それでも弥生は口を離さなかった。そしてごくりと飲み込んだ。健太郎のゲロを。

「あーはっはっ！　すごいだろ、こいつら俺のうんこもしょんべんも、長年積もったチンカスもべろべろ喰ったんだぜ。美少女のうんこやイケメンのゲロならむしろご褒美って思ってるんじゃないか。わかっただろ、こいつらがすべて開発済みって意味が」

わからん……。

俺の知らない世界に二人は行ってしまった……。

自分が寝ている間に、弥生と桜子に行われたことを思って、泣いた。

うんことゲロのにおいのする弥生の唇に口をふさがれたまま。

「弥生、キスしたままでいいから、ケツを上げろ」

川崎が命令すると、弥生が腰を持ち上げた。臭いキスをしたまま。

「ほれ」

「ぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁぁぁっぁぁぁぁっぁぁぁっぁぁぁっぁぁぁぁぁ」

キスしたままなので健太郎にはよく見えないが、弥生がびくびくと震え、喉の奥であえいだ。
アナルにポークビッツをぶち込まれ一瞬で絶頂を迎えた。

「弥生のケツ穴は筋肉が発達していて奥までぎゅっと握りしめられる極上アナルだ。残念だな、健太郎。お前が味わうことは絶対にない。こいつらは一生俺のオナホ奴隷だからな」

と解説しつつピストンする。

「ぁぁぁぁっ、あっ」

弥生がイった。川崎が射精したからだ。

「ふう」

と言って弥生から離れる。
と同時に弥生の肛門からぶりぶりぶりっとうんこが垂れた。川崎の精液は浣腸剤なのか？
精液もやけに黄色くて臭いから、大腸が拒否反応を起こすのかもしれない。
今回は少し横なので健太郎にはかからなかった。でも臭い。

川崎は放心状態の弥生を蹴飛ばしてころがし、引きずってきた桜子にそのくっさいうんこを食わせ、また健太郎にキスをさせた。
健太郎はもう吐くものもなかった。
何の抵抗もなく、いやむしろ嬉しそうにうんこを食う幼馴染の美少女二人。
うんこ臭い接吻をされながら、ただ泣くだけだった。

「終わったー？」

美少年が再び現れた。

「終わった終わった。洗い流してくれ」

「おーけー」

次の瞬間、部屋に充満していた臭気がなくなり、うんこはもちろん弥生が鼻から垂らしている健太郎のゲロ、美少女二人の胸にこびりついた臭いよだれ、床に溜まったマン汁などがすべて消えた。

「奇麗にしたよ。そろそろ本番？」

「おお、あれやってくれよ。ケツ穴二発でもう限界だ」

「はいはい」

川崎のポークビッツが、じゅぽっと一瞬で日本刀になった。

２０センチはあろうかという長さに反り返った雄姿。カリは見事に張り出し、硬く勃起した黒光りするちんぽ。川崎の膨らんだ下腹にくっつく急角度の刀身。

えぐい。

「じゃあ桜子からな。さっきみたいに健太郎の顔をまたげ」

桜子は従順に健太郎に近づき、顔をまたいだ。洗浄され本来のきらめく美しさを取り戻した裸体が健太郎にすべてを晒された。

「おにい、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい……私のことは忘れてください……」

微笑みながら泣いている。

川崎が背後から近寄った。

「マンコ開け」

桜子は躊躇なく、両手で小陰唇を引っ張りマンコの全貌を晒した。
完璧な左右対称。小陰唇のくすみ一つない、名前の通り桜色の色白な性器。
尿道がぷつっと見えるが、かんじんの膣は襞に埋もれて隠れていた。
だが、硬く勃起しているクリトリスと、見る間にあんをかけたようにあふれてくるマン汁が、受け入れ準備オーケーを示していた。

川崎が日本刀ちんぽを美形マンコに当てた。

「んじゃ、これでオーナー登録な」

すぼっと日本刀ちんぽをマンコの奥までぶち込んだ。

「うほおおおおうううううぅぅぅぅぅっぅぅぅぅっぅおおおおおうぼぼぼうううううぅぅぅぅぅっぅぅぼぼぼお！」

桜子が絶叫し、白目をむいた。

川崎は日本刀ちんぽを容赦なくピストンした。桜子の膣口から、血が掻きだされた。

処女喪失。

健太郎は何が何だか分からなくなっていた。これは悪い夢だ。そう、夢なんだ。明日の朝目が覚めれば、なんでもないんだ。

現実逃避も起こっていた。

すでにこの時に心が折れていたのかもしれない。

いつか結婚するかもしれないと思っていた幼馴染。

自分を愛し、いつも一緒にいる美少女。

目の前であえぎながら人前処女喪失している女と記憶の中の桜子が合致しなくなっていた。

すでに１０分以上川崎はピストンを続けている。すごい持続力だが、それもあの美少年の謎の力だろう。

「桜子のマンコ、すごいぞ、ぐりんぐりんねじ切るように膣肉が動くぞ。男を絞りあげるためだけのマンコだな。さすがはオナホ奴隷。このマンコ、一生もんだ！」

若干意味の分からないことを言いながら、そろそろ川崎も限界のようだった。

「出すぞ出すぞ出すぞ！　孕め孕め孕め！」

「うほおおおおおおおおおおうううううほっぼっぼっぼっイヤ中はイヤ孕みたくうないぼっぼっうううううぅぅぅぅぅぅぅっぅぅぼぼぼお！」

どっぱー！

ダムが決壊するような音が桜子の股間からして、ぶしゅるるるーと桜子が小便を噴いた。
ちょうど健太郎の股間に向かう角度だったので、健太郎の勃起ちんぽが桜子の小便まみれになった。

川崎が日本刀ちんぽをずるーーーと抜いた。

どばどばどばべしゃ！

健太郎の腹に大量の精液が降ってきた。白い。臭くもない。
元気がいい精子がぴちぴちしているようだった。
本当に桜子はこの一発で妊娠してしまうかもしれない。そんな勢いがあった。

日本刀ちんぽは全く萎えていなかった。桜子の破瓜の血がこびりついていたので、桜子自身に命じて舐めとらせた。

当たり前のように次は弥生を健太郎にまたがらせ、マンコを開かせた。

弥生のマンコはロシアとのクォーターである桜子に比べれば、くすんでいた。陰毛も扇形にびっしりと生え、マンコを黒々と彩っていた。肛門周りにも毛が生えていた。
しかしその分生々しい、性のためにある器官というにふさわしいマンコだった。
左の小陰唇にほくろがあるのがまたやらしかった。
クリトリスは丸く、ぷっくりとして宝石のようだった。
そしてそのすべてが粘性の高いマン汁で覆われていた。

準備万端（レディゴー）。

川崎が日本刀ちんぽを弥生のエロマンコに沈めた。ずるずると押し込んでいく。

「あああああああああああああああああああああああああああああああああ！」

弥生がストレートな絶叫をした。

ちんぽ入れられただけで絶頂した。

あっという間の処女喪失だった。

桜子は胎内に余裕があったが、弥生はアスリートだけにぜい肉というものがないから、膣奥の広がりも大きくないのだろう。

桜子は日本刀ちんぽを全部飲み込んでいたが、弥生は最奥まで突かれても数センチ川崎の下半身と離れていた。

逆に言えば、膣ホースのすべてを蹂躙されていた。

健太郎は弥生の痴態を見ながら、自分の意識が闇に沈んでいくのを感じるだけだった。

これは夢だ。夢だ。現実であるはずがない。弥生も桜子も、明日の朝起きたらすべては元通り。

いつものように「おにい」って言いながら俺を起こしに来るんだ。

健太郎は泣きながら、今見ている現実をなかったことにしようと自己防衛していた。

川崎が射精した。

破瓜の血と精液が混じったものがぼとぼとと健太郎の下腹部に落

ちてきた。

健太郎はうつろな目でそれを見つめた。

「今思いついたんだけど……」

「……ああ、それは面白いかも。契約者、アイデアマンだね！」

「じゃあ、やってくれるか？」

「おっけー、目をつむっててね。認識がずれると思うから」

健太郎は川崎と美少年が何か打ち合わせをしているのをぼんやり聞いていた。

次の瞬間、体が重くだるくなった。肩や腰も痛い。

「？」

体を見ると、腹がだらしなく垂れていた。ちんぽもポークビッツと化していた。

「なんだこれ！」

叫んだ声は川崎のおっさん声だった。しかも自分でわかるくらい口臭が臭かった。

「よう、川崎」

素っ裸の健太郎（じぶん）が立っていた。

「は？　川崎、お前！」

健太郎と川崎の体が入れ替わっていた。
美少年の不思議な力によるものだろう。

「弥生、桜子、もう大丈夫だ。川崎は捉えた。好きなだけ復讐するといい」

健太郎の姿の川崎がそう命令した。
筋肉のしっかりついた肉体は健太郎そのものだったが、ちんぽは日本刀ちんぽだった。

イケメン＋日本刀ちんぽ。
川崎は地上最強の存在に生まれ変わった気がした。

「川崎―！　てめー！」
「川崎―！　許しません！」

弥生にドロップキックを決められ肋骨が全部折れた。
桜子に右の眼球をむしられた。
弥生に両方の睾丸を握りつぶされた。
桜子にケツの穴蹴り飛ばされ括約筋が切れた。
弥生に両耳をちぎられた。
桜子に陰毛ぶちぶち抜かれた。
弥生に両手両足をへし折られた。

ちょっと休憩があった。
弥生と桜子が健太郎の姿の川崎の日本刀ちんぽで犯されていた。
やってる最中はマン汁が、終わったら精液がドバドバ結合部から出ていた。
喘ぎ声も轟いた。

川崎の姿になった健太郎は、生きてる方が不思議なくらいボロボロになっていた。

「よし、処刑タイムだ。やっちゃえ、弥生、桜子」

ふたりは川崎の姿をした健太郎にまたがると、桜子がポークビッツちんぽを噛み千切った。

そして弥生が、すでに折れて呼吸も怪しい胸を押しつぶした。

心臓が圧壊した。

健太郎の意識は遠のいていったが、自分を殺した弥生と桜子が涙を流しているのが分かった。

ああ、二人とも本当は俺が本物の健太郎とわかってたんだな。

ごめんよ、守れなくて……

健太郎は川崎の姿で醜く死んだ。

「わはははは！　やった、やったぞ、佐伯は死んだ。オナホ奴隷の二人もいる。そして俺が今日から佐伯健太郎になるんだ。わはははははは！　俺の天下が今から始まるんだ！」

「始まらないよ」

美少年がぼそっと言った。

「え？」

美少年が健太郎の姿の川崎に手をかざすと、川崎（健太郎）の体が燃え上がった。

「うげえええええけっけえええええええええええええええ・・ひいひいひいひひ・・・・・・・・・・・・・・・」

肺をやられて後半は悲鳴にならなかったが、健太郎の姿をした川崎は燃え尽き灰となって消えた。

「え……」

「う……そ……」

弥生と桜子は何が起こったのか理解できなかった。

「男の肉は食べられないからね。だからあれも処分しちゃうね」

床に縛られたままの川崎の姿をした健太郎の死体も、一瞬で焼き尽くし灰にした。

「あああああああああああああああああああああああああああああ！」

「おにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにいおにい！」

灰を集めるように健太郎がいたあたりで二人は腕をかき回す。

「契約者って言ってたけど、本当は契約なんてしてないんだ。それっぽいイベントはやったけど、嘘をついたのさ。

これから使えそうなきれいな女の子を二人も紹介してもらったから、その分は楽しんでもらってもいいかって思っただけさ。

僕だってそれなりの美意識はあるんだよ。うんこ食える君たちにはわからないかもしれないけど、あんな汚いおっさんと契約なんてするはずがない」

悪魔にも拒絶される川崎。さすがはレジェンドであった。

「じゃ、ここからは僕の番ね」

美少年は桜子の美しいマンコにすっと指を入れた。

そのまま、腕を上げる。

さくーと皮膚が全身タイツを脱ぐように裏返りながら捲れていった。

「あぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃぎゃーーーー！！！！！！！」

桜子が獣のような悲鳴を上げる。

「ああ、レベル3に下げていたね。ごめんよ。レベル１０！」

「あぎゃぎゃぎゃぎゃ…うひゃひゃうほうほうほうほうおおおおおおおおおおおおお！」

悲鳴が嬌声に変わった。皮を削がれることさえ、快楽に直結した。

レベル１０は身体に与えられるすべての刺激が性的快楽に変換される。

性器を中心に上下に皮をめくられていった桜子は頭頂と足先でベロンと剥けた。

裏返しになった桜子の皮を美少年はもう一度裏返し、息を吹き込んだ。
皮を膨らませると、桜子の姿をしたものが立ち上がった。
隠微な笑みを浮かべている。

「よしよし、いい感じだな。じゃあ弥生も」

弥生もおなじように皮をめくられ、筋肉の剥き身になった。

ふっと膨らませて、弥生の姿をしたモノを生み出す。

「いいね、この二人なら獲物をどんどん送ってくれるだろう。健太郎は僕自身が演じようかな」

そういうと、美少年は健太郎の姿になった。

「これでいいや、ん？」

皮膚をすべて捲られ、筋肉と脂肪と腱がむき出しになってごろごろしている弥生と桜子を、本当に忘れていたように見る。
いや、実際問題美少年にとってはどうでもよかったのだ。

「あー、僕少食だから二人もいっぺんに食えないんだよね。
それに君たちゲロやうんこも食ってたから、臭いしなあ。
食べたくなったら、今作った眷属が連れてきてくれるだろうし。
別に君たちはいいや。
その姿で生きてていいよ。
じゃ、さよならね」

と言いながら、ふと思いついて、黄色い脂肪と肉の塊になった桜

子の乳房をべりっと剥がした。
「やっぱり、サブ脳なんてないね」
得心すると、レベル０に下げた。
「ぎゃあああ！」
「うぎゃああ」
人体標本模型のようにすべてをめくられた弥生と桜子は、絶叫した。

「じゃね、バイバイ――」
健太郎の姿をした美少年は偽の弥生と桜子を連れて闇に消えた。
激痛にのたうち回る弥生と桜子は、しかし翌日救出された。
匿名の通報があったのだ。
皮膚をすべてはがされた二人の身元はわからなかった。
症状が治まったときに尋ねても、意味不明のうめき声を上げるだけだった。

皮膚をすべてはがされた二人を元に戻すことは現代医学でも不可能だった。

数週間後、同じ日に病室で首をくくって死んでいる二人が発見された。

同じ日だったのは、二人で何らかの意思疎通をしたのか、偶然だったのかはわからなかった。

それが石川弥生、白川桜子という美少女の末路だった。

第2話の2　石川弥生・白川桜子（★）（後書き）

不可逆的変化で放置して自死パターンでした。
これもありかなあと。

ＮＴＲタグ付けましたが、付き合ってた訳じゃないので厳密にはＮＴＲとは言えないかも。
（ので、ＮＴＲ（偽））
相思相愛をぶち壊してはいますが。

その分スカトロはがっつりやりました。
気分悪くなったらごめんなさい。

第3話の1　新垣彗葉（前書き）

1話のラストで亜麻色の髪の青年がつぶやいていた数日置いた肉の話です。

新垣彗葉　２８歳。

彼女は、某有名私立女子高校在学時、伝説的存在でした。

村神（旧姓）彗葉は超絶美少女。当時誰しもが彗葉をそう呼びました。

金に近い薄い栗色の、軽くウェーブした長い髪。
抜けるように白い肌。
ブルーグリーンに輝く瞳。
いつも微笑みを絶やさない、ジ・アルカイックな唇。
有象無象の芸能人などと比較するのも恐れ多い完璧な顔立ち。

しかもGカップの爆乳。にもかかわらず腰は折れそうなぐらい細く、尻は丸くきゅっと盛り上がっています。そこから延びる長い脚は身長の6割はあるのでないかと思われました。

外見だけではありません。彗葉は知能、体力ともに超高校生級でした。

いわく、某有名進学校とのディベートで相手を完膚なきまで叩き潰した。

インターハイで、陸上部の幽霊部員だったのに１００メートルから１０００メートルまで総嘗めにした。

飛行機野郎コンテストで身分を偽って出場し人力飛行機部門で（

当時）前人未到の折り返し４０キロを成し遂げた。
英語検定で千点満点をたたき出した。
現代美術のオークションに匿名で出品した絵画が、イギリスのギャラリー主に５０万ドルで落札された。
エトセトラエトセトラ。

さらに彼女の家系が伝説を彩ります。
曽祖父は明治から大正にかけ海軍大将を務めた春山茂紀伯爵。
祖父は第二次大戦後日本復興に尽力し影の総理と言われた田中大作。
そして父は電気・通信業界の覇者といわれるジンソングループ総帥村神大悟。

彼女は、大悟の一人娘でした。

しかしそんな彗葉は担任の新垣雄二３６歳を生涯の伴侶として愛し、新垣も彗葉の愛を受け入れ、紆余曲折はあったもののついに両親を説得することに成功し、世間公認で高校生＋教師という身で結婚式を挙げました。一時大手マスコミが、ジンソングループの一人娘の２０歳もの年の差カップルとスキャンダラスに報じましたが、ジンソンがスポンサーから降りる旨の通知をした途端沈静化しました。

彗葉は、誰しも東〇大学に進学するものと思っていましたが、進学をやめ、新垣の妻であることを優先しました。

親戚縁者からは翻意を促すさまざまな確執があったのですが、すべて大悟がブロックしました。

行け、彗葉よ。お前の望むままに生きよ！

大悟はそう言い、まだ17歳だった彗葉を新垣に預けました。

ただ、子宝には恵まれませんでした。

村神大悟も娘が一人だけだったので、子供が出来にくい血筋なのかもしれません。

それから11年。彗葉は表舞台から姿を消し、穏やかな日々を送っていました。

この事件に遭うまでは。

第3話の1　新垣彗葉

新垣彗葉（あらがきすいは）は、目を覚ました。

遠くで、女の子の声が聞こえる。だーれーかーいーまーせーんーかーと言っているようだ。

多分本人は大きな声で叫んでるのだろうけれど、彗葉のいる場所からは背景雑音に消えかけていた。

拉致されてきてすぐの子なんだわ。

彗葉は、残酷な笑みを浮かべた。

あの方の愛撫を知ったなら、今までの世界なんて糞喰らえ、だわ。

叫んでいるあの子もあの方の愛を受けたら、甘い声を上げるのでしょうね。

彗葉はそう思い、まだ大した愛を受けていないであろう声の主をあざけるように笑った。

糞喰らえどころかまもなく自分が糞になるのだが、まだ彗葉は知らない。

私はあの方に愛されている。

そう思うだけでマンコがしっとり濡れてくる。

彗葉はわずか2日でそんな馬鹿女に堕ちていた。

彗葉は縛られていない。ベッドを与えられ、裸でシーツにくるまって眠っていた。

拉致された最初期こそ、縄で拘束されていたが、あの方の愛撫を

知った今は「逃げる」という選択肢は消滅していた。
亜麻色の髪の美青年。
まだ直接の肉の交わりはおあずけだが、指や舌を使った責めは的確に彗葉の弱点を捉えて離さなかった。
何度もイッた。信じられない量のマン汁を噴いた。
夫・雄二とのセックスでは感じたことのない、天を貫くような素晴らしいアクメだった。

快楽堕ち。
第三者が見れば、そう呼ぶだろう。
今の彗葉は、ど淫乱なメス豚だった。

伝説の超美少女と呼ばれたのは１１年前。
だが、その美貌と輝くような肉体は、決して衰えてはいなかった。
かつての刃物のようにシャープでエッジが効いていた肢体には人妻らしくむっちりと脂肪が乗り、Ｇカップの爆乳や細いウエストはそのままだが、柔らかさが加味され触りごこちが実によさげだった。
おっぱいがやや左右に開いてわずかに垂れているのも、熟した果実のようにうまそうだ。
尻から太ももにかけてのラインもふっくらとして、バックからぶち込む妄想を掻き立てる。
こんな女を抱けたら死んでもいい。
彗葉を見た男は誰しもそう思った。

けれど、夫は淡白だった。
彗葉という超絶美人妻であっても、さすがに毎日は飽きる。特上の黒毛和牛のステーキ、あるいは本マグロの大トロを連日食べ続けるようなものだ。

それに年齢による衰えも重なった。雄二ももう４７歳。勃ちにくくなっていた。

彗葉はパイズリやひょっとこフェラ、前立腺エステ、マット洗い、あるいは全身網タイツや警官やナースのコスプレしてみたり、毎日その国宝級の知能を無駄に使いながら変化をつけるものの、ここ数年、よくて月１、２回。悪ければ数か月に１度というセックス頻度だった。

高校生時代の制服を持ち出してコスプレをしたときには割と反応が良かった。女子校生時代とサイズが変わっていないのはさすが彗葉であり、年齢不詳の美貌のおかげで本物の女子生徒に見えないこともなかったが、隠しきれない妖艶なオーラは１０代の少女にはないものだった。

学校にこんな女子が実際にいたら男子から毎日集団暴行されそうだった。

が、それも数回で効果が尽きた。

エロスの女神が凝縮したような新垣彗葉２８歳の肉体は、実のところ欲求不満を抱えていた。

拉致後気が付いた彗葉は、室内を徹底的に観察し、脱出方法を３６の選択肢に絞って多面的に検討した。

そもそもなんで捕まったか記憶にない。しかし拉致され縛られて比較的広い殺風景な、倉庫のような場所にいるのは確定した事実だ。

わからないことをあれこれ思い悩んでも仕方がない。彗葉は無駄なことはしない主義だった。だからどうして捕まったかは考えず、どうやって逃げ出すかを考えた。

犯人像も絞り込んだ。プロファイリングだ。

空気の流れから、天井にあるいくつかの点検口のうちの一つが外部まで繋がっていることが分かった。

手足を拘束している縄の長さが調整できることも知った。

これらを組み合わせるのが最も成功確率が高いと判断した。

犯人は車、たぶんワンボックスカーを所持している。

縛っただけで見張ってもいないということは、新たな犯行に及んでいるのかもしれないが、捕まっている女性が複数いる可能性の方が高かった。

服は着たままだが、手足の縛り方は、性的拷問が簡単にできるよう体の前面を大きく開いた形だ。両手はそれぞれ左右に吊られ、足はそれぞれ腿と脛をひとまとめに縛られこちらも左右に引っ張られている。よって彗葉は中腰で万歳しているという姿だ。

ノースリーブのブラウスから見える脇が色っぽい。毛穴ひとつないすべすべした脇だ。彗葉は体毛が薄い体質だった。

が、胴体には一切縄がかけられていない。服を切り裂かれたら簡単に全裸になる。

この姿勢で裸になれば、乳房も性器も、尻も唇も嬲られ放題だった。

しかも暗くてわかりづらいが、縄は滑車を通っている。つまり、角度や長さが調整できる。

M字開脚や宙吊り、逆さ吊りも可能と思われた。

縄の縛り方もきつ過ぎずゆる過ぎず、拉致誘拐に慣れた男の単独犯行と彗葉は推理した。

女に屈辱を与えるのが好きなのだろう。

自分の技術に自信がある特殊性癖者は、共同作業を嫌う。

さて、複数の女性が捕まっているとすればこんな部屋がいくつも

ある建物ということになる。空腹度合いから見て拉致されて2時間も経っていない。縄で縛る時間も含め、彗葉の家から遠くても15キロ圏の場所であろう。

彗葉の記憶ではその範囲だとA地区港湾部に廃棄された倉庫ビル群がある。海浜公園として再整備される予定だが、土壌から有害物質が見つかり、その後入札に疑義が見つかり市長の進退問題に発展、計画が凍結されていた。

大胆な犯人だ。一時は連日ニュースに取り上げられた廃ビル群だ。いつ頃から犯行を重ねているのかわからないが、今彗葉を拘束している縄システムだけでも作り上げるのに1、2週間はかかるだろう。それが複数ある（はず）。

今でも時々マスコミが現場から中継をしている。

もしかしたら、そのマスコミ関係者を装って出入りしているのかもしれない。

それらを総合的に判断すると、一見紳士的なスーツ姿の中年男性。髪は七三、顔は平凡で印象に残りにくいが、体は相当鍛えている。そんな犯人像が浮かび上がった。

それからさらにしばらく放置され、空腹を感じ始めたころ、あの方が姿を現した。

彗葉のプロファイリングはかなり外れた。

犯人が人外であるという要素が欠けていては、超絶知能の彗葉であっても誤った結論になるのは仕方がなかった。

細マッチョの亜麻色の髪の野獣系超絶美青年。エネルギーに満ち溢れたオーラをまとっていた。

彗葉は、驚いた。こんなにきれいな男性を見たことがない。芸能

人にもいないだろう。
まあ、アイドルが裸足で逃げ出すのは彗葉も同じなのだが。

「よお、待たせたな。おめえの番だ」

粗野な物言いだが、彗葉は嫌いではなかった。美辞麗句を重ねるよりずっといい。
シンプル・イズ・ベスト。

頭を持ち上げられ、唇を奪われた。彗葉は逃げなかった。処女でもあるまいし、キスで慌てる年齢でもない。
むしろこの美青年が自分の肉体をどう扱うのか興味があった。
相当なテクニシャンのはずだ。好敵手の挑戦を受けるような気持ちになっていた。

舌が侵入し彗葉の舌をからめとった。さらに歯の裏側や頬の裏などをべろんべろんと蹂躙される。
長くよく動く舌だ。
彗葉は口の中のすべてが美青年の舌で埋まったような気がした。
よだれが甘い。
舌が絡まるたびに背中に電気が走った。

美青年は離れた。彗葉の唇の端からよだれが一筋垂れた。あごの感覚が痺れてなくなっていた。すごいキスだった。
彗葉のブラウスのボタンがいつの間にか外されていた。キスをしながら片手で外したのだろう。両手は吊られたままだから抜き去ることはできない。左右に分かれブラに包まれた爆乳が露わになった。
ブラはノンカップの紫のシースルーで、蝶のようなレース刺繍がブラトップ部分以外にふんだんにあしらわれたセクシーランジェリーだった。乳首から五合目ぐらいまでは紫の透明な膜が密着したよ

うに、ブラをしていてもスケスケのためバストトップが丸見えだ。
夫・雄二がいつやる気になっても大丈夫なように、毎日全力勝負下着だった。

「デカいな。喰いごたえがありそうだ」

この人にとっては女は喰われるもの。確かにそうかもしれない。
まさに野獣ね、と彗葉は思った。

幸せな勘違いだが。

薄いブラが難なく外され、頭をくぐって背中側に回された。
彗葉の柔らかい胸がぽよんぽよんと弾んだ。紫の膜が取り去られ本来の色白な全貌を晒した。乳肉の先端は少しだけ他よりも濃くなっていたが、乳輪の境目ははっきりしていなかった。最も先端部にある乳首も小さく、ほとんど胸の丸みと一体化しており尖ったり硬くなったりはしていなかった。
美青年がベロンと長い舌で乳肉全体を下から押し上げるように、舐めた。乳は舌の動きに合わせて波打ち、舌が離れるとぽよんと元に戻った。

「ああっ！」

彗葉があえいだ。

なにこれ!?　どうなってるの？　このイケメンの唾液は媚薬なの？
乳肉の下半分ほどをひと舐めされただけなのに、嬌声を我慢できなかった。
敏感な個所を舐められたら、どうなるかわからない。彗葉の脳内

に警報が鳴った。
万能美女の彗葉も、性に関しては経験値が低すぎた。なにせ、夫・雄二との性交しか知らないのである。
彗葉は生まれて初めて超えられない壁を感じた。
このイケメンには勝てないのではないか。
彗葉は恐れを感じ始めていた。

と、0．1秒ほど考えている間に、美青年は彗葉の乳肉の先端部を口に含んだ。
含んだまま舌で乳首をタッチするように舐めまわす。

「うほほほほほおほほおおおおほほおほほほおほほほほおほほほおおおおっほおおおおおおおーーーーーーーーーーおおおおおほほほほほほほーーーーーーーーうほほほほほほーーーーーおっおっ！」

彗葉はあられもない声を上げた。
脳が沸騰するような快感だった。脊髄の全てに電気が走り、腰がスパークした。
ショーツを履いたまま、びしゃーっと失禁した。

嘘今の私の声？　というかオシッコ漏らしてしまったわビックリだわ恥ずかしいわいやそれよりこの刺激ちょっとまずいわよヤバイヤバイヤバイああああどうしましょう完全屈服だわまいったわ……。

脳のどこかでそんなことを考えながら、彗葉は淫猥に吠え続けた。

反対側の乳首も舐められた。
舐められた方の乳首は乳輪ごと盛り上がり、乳首も1センチほど立ち上がってよだれにまみれていた。
今舐められている方も固く勃ち上っているだろう。

彗葉は両乳房を好きなように舐められながら、顔を真っ赤にして吠え続けた。涙が伝った。絶頂快楽のうれし泣きだ。

いつの間にか、彗葉の拘束は解かれていた。ブラウスもブラも取り去られ、スカートも脱がされた。

彗葉はショーツ一枚の姿で床に転がされた。ブラとお揃いのシースルーな紫色のレースショーツはおしっことマン汁でぼとぼとになっていた。

青年はショーツをめくると足から抜いた。

彗葉の両足を開く。

彗葉のマンコが丸出しにされた。美青年の指で大きく開かれる。

「あっ……」

彗葉が恥じらうような声を上げたが、抵抗はしなかった。

シミひとつないマンコは充血して濃いピンク色になっていた。もともとは色白マンコであるのは、小陰唇のビラビラが桜色をしていることから明らかだった。興奮でクリトリスもびこんと立っていた。

マン汁の白い泡が柔らかい小陰唇の内側にべっとりついていた。粘性の高い液体が開いた膣口からどくどくと垂れていた。

陰毛は薄く、ハート形に整えられていた。もちろん夫・雄二を誘うためだ。

肛門は縦長で、きれいな放射状の短いしわが周囲を彩っていた。色素沈着はない。

その全体が彗葉の呼吸に合わせて蠢いていた。

捧げた男性は一人だが、きっちり性の年輪を重ねた、きれいで複雑なマンコだった。

「ふむ、なかなかエロいマンコだな。さらにエロくしてやるぜ」

美青年はそうつぶやくと、彗葉のマンコに指を二本突っ込んだ。
濡れ濡れの膣は抵抗なく奥まで呑み込んだ。
奥まで。
そう、美青年の指は長い。
というか、あきらかににゅーっと長くなった。膣の奥壁、子宮頚部まで、入り口から奥の奥まで二本の指でえぐられた。

「うぎゃぎゃがががっがががががっがっがおがいがーがっぎゃはははっうぎゃはいはっうがががががぎゃぎゃぎゃぎゃいやーーーうほっぎゃぎゃそんなぎゃほっほぅほうほおうおうおうおぅぎゃがあああああああああああぶぶぶぶぶぶはははっはははははほほほほほほほがががぎゃーんんんんん!!!!!」

彗葉は瞬時にイッた。意識が吹っ飛んだ。
手マンされながら、盛大にマン汁を噴いた。ジェット水流だった。

そのあとは訳がわからなかった。

指で膣をくじられながら、クリトリスを吸われた。
小陰唇を甘噛みされた。
肛門を舐められた。
乳を寄せられ両乳首を一口にされた。
尻をベロンベロン舐められた。
眼球を舐められた。
キスしながら肛門を指で犯された。
足と手の指の股を全部しゃぶられた。

なぜかチンポで犯されることはなかった。というより、終始美青年は服を脱がなかった。

フェラチオすら要求しなかった。
なぜ？　といぶかる余裕は彗葉にはもうなかった。

信じられない世界だった。夫・雄二との営みなど幼稚園のお遊戯レベルにもならない。
雄二との生活。
雄二との愛。
つまらないことにこだわっていた。
夫など、もうどうでもよかった。

彗葉の具合を確かめるようなペッティングが終わると、美青年は食事を運んでくれた。
サンドウィッチとトマトジュースというシンプルなものだったが、信じられないくらい美味しかった。
特にカツサンドが、豚肉とは思えない甘くジューシーな味わいで、彗葉は感動した。

美青年はシャワーも風呂もないこの部屋で、お湯で絞ったタオルで体を拭いてくれた。
彗葉はされるがままだった。
お湯はミントのようなハーブが漬けこんであり、さわやかな匂いがした。髪もそれで拭いてもらった。
その後、美青年は全身をマッサージした。筋肉や腱に沿ってすべてをほぐすように。

気持ちが良かった。

おっぱいやマンコも触ってほしかったが、エッチとケアはきっちり分けるようで決してマッサージ中に性的な行為はしなかった。
粗野で野蛮だが、自分を完璧に律している美青年。彗葉は名前も

知らぬあの方の虜になった。
全身が温かくとろけるようだった。

彗葉は、自分がとんでもなくダメな方向に改造されつつあることに、全く気が付いていなかった。

排泄は、ブリキバケツにしろと言われた。
それ自体は軍隊での訓練経験もある彗葉は平気だったが、あの方がそのバケツを処理するのは恥ずかしかった。
でも部屋から出ることを禁じられているので仕方がない。
それに、排泄後の局部をぬれタオルであの方に拭いていただくのは得も言われぬ快感だった。

縛られてもいないし、縄システムもそのままあるので最初に考えた脱出計画は楽勝で実行できたが、もはや彗葉にここから逃げ出す気はなかった。
むしろ一生ここであの方に所有されたかった。

愛撫の時に何度もチンポお恵みくださいと懇願したが、まだ肉がほぐれていないと拒否された。
何度も泣いた。
あの方のチンポをマンコに入れてほしかった。
生きている意味はそれしかないとまで思いつめた。

悪魔の精神汚染のせいなのだが、そんなことは彗葉にはわからない。

女の子の声が途絶えた。
しばらくして悲鳴のようなものが聞こえた。

また静かになった。

（処女だったのかしら。しかしなんてこと。この私ですらあの方のおチンポを戴けていないというのに。うらやましいというか妬ましいというか）

彗葉の推察は当たっていたが、真実を知れば逃げ出したろう。この時、別の部屋で行われていたことの詳細は第1話のとおりである。

ああああ、あの方。チンポお恵みください。精液お恵みください。私はあなたの子を孕みたい。あなたの子を産んでみたい！

彗葉は美青年に犯される自分を想像しながらオナニーしていた。指4本も膣に突っ込んで。

拉致される前は2本でも痛かったのに、4本でも楽勝なくらい膣は柔らかく伸びた。フィストファックすら出来そうになってしまっていることを、彗葉は意識していなかった。ただ膣肉に充実感が欲しかっただけで、自分が4本いっぺんに出し入れしていることに深い考えはなかった。

彗葉の天才的知性は、融けかけていた。

「よお、いいかんじにほぐれてるな」

あの方がやってきた。主人を見る犬のような目で彗葉は喜びの表情を浮かべた。目にハートマークが浮かびあがってそうだった。

「なんかやかましいのがいてさ、すぐ食ってみたけど青臭くて堅くて失敗したぜ。やっぱ俺若いのはだめだわ。しっとり脂がのった２０代３０代が一番旨いよなあ」

（そうでしょそうでしょ！）

彗葉は目を輝かせて美青年を見つめた。私を食べてオーラ全開で。

「まあ消化は早くてさ、さっきでっかいうんこが出たんよ。で、うんこしながら、そういやお前赤ちゃん欲しがってたよな、って思い出して。

子ども作ってひりだしたらちょっと面白いかなと思ってさ。そのためにじゃなかったけど、お前の肉かなり柔らかくなってるし、出来るかなーって」

ところどころ何を言ってるのかよくわからなかったが、目の前の美青年との子どもを産むのはとても魅力的な提案だった。

「出来ますとも！　ぜひお願いします！」

「そか、じゃあさっそく」

一瞬で青年は衣服を脱いだ。どうやったのか彗葉には分らなかった。脱いだというより消えたという方が正しい。どこにも脱いだはずの服はなかった。

それより青年の股間から生えているモノの方が問題だった。

全長３０センチ、直径５センチはありそうな肉の棒。カリはさらに１センチははみだし、てかっていた。

さらに、尿道口から小さな触手が何本も出てチロチロと蠢いていた。

えぐい。

棘付き金属バットではなかった。さすがにあれは膣はおろか子宮までがごっそり削られるので孕ませることが出来ない。

というわけで今は美青年チンポ・バージョンBだった。

彗葉はそのえぐいチンポを見た瞬間に目にハートマークが3重に浮かんだ。マンコからだらしなく汁をバシャバシャとこぼした。

我慢できなかった。早く入れてほしかった。

初めて見るあの方のチンポだ。

女を屈服させるためのエロパワーが結集したような見事なチンポだった。

若干人間のモノではないような箇所もあるが、それとて素晴らしいアクセントだった。

さすがはあの方の持ち物だと感心すらした。

彗葉の脳はとうにまともな思考が出来なくなっていた。

第3話の1　新垣彗葉（後書き）

今回も長くなってしまったので2分割します。
後半部の「その2」はこれまでにも増してグロ的方向に超えぐいので耐性のない方はホンマに読んではいけません。
耐性のある方でもトラウマ必至かも。

気分が悪くなったら、すみません。
あくまでも、自己責任でお願いします。作者に苦情を言わないでください。てへへ。

覚悟してくださいね。

第3話の2　新垣彗葉（★）（前書き）

続きです。その1の後書きにも書きましたが、いつにも増してグロいです。
耐性のない方はホンマに読まないでください。

気分が悪くなっても作者は一切責任を取りません、ちゅーか取れません。
作者が言うのもなんですが、えげつないです。
第4話以降どうしようかと悩んでいます。ここまでやったら次はどうしたらいいのかしら？レベル。

警告はしました。
引き返した方がいいですよ。

それでもという方のみ、自己責任で、以下どうぞ。

第3話の2　新垣彗葉（★）

彗葉のヌレヌレボトボトダラダラマンコに美青年の剛棒チンポがぐちゅるるるるると無慈悲に挿し込まれた。

膣肉が剛棒の侵入で入口からカリでえぐられる広がり、膣内にたまりにたまっていたマン汁が膣穴とチンポの隙間から水鉄砲のようにぶっちゅーーーーーっと噴き出した。

「あはーーーーあはあああああはあはっはははははっはははっはっやんやんはあはあはっはははっはははっーーーーうううううううーーーあぎゃあぎゃがががっがっがっがっがっがおがいがーーーーあふーっうごおおおおおおおおおおおおああああおおおおおおおおおおおーふふふふふぶぶぶぶぶふふふふーーーーーーーーー！！！！！！！！！っ」

彗葉が絶叫した。挿入されただけで盛大にイった。

剛棒チンポは彗葉の膣ホースの終点までごりごり肉をこじ開け、しかしまだまだというかのように内臓を犯す勢いでぐぐっと押し入ってきた。それでもチンポの3分の2は外にあった。

奥の奥まで犯し切り、チンポの形に膣が広がったころ合いをみて、ゆっくりピストンを始めた。

膣汁を掻き出すようにぐにゅにゅにゅと腰を引く。開いたカリが膣肉を半ばベロンとめくりながら現れる。掻き出された膣液がぼとぼとぼとと溢れる。

また押し込まれる。

掻き出される。
押し込まれる。
掻き出される。

「うびょーいいいいいいいいあああああいいいいいあああいあいあ
いあいあいあいああああああいいあいあいあいあいいいあいいいいいいいい
いうびょびょびょびょびょあああああああうふうふうふうふうふあがががががが
がががいいいいいいいいいいいい」

彗葉は痙攣しながら剛棒チンポを味わった。彗葉の膣の全てがパーフェクトチンポ奴隷に堕ちた。
しかし美青年とのセックスの快楽はまだまだ序の口だった。
チンポの先からにょろにょろ出ている触手はカリに蹂躙されてゴリゴリ削られる彗葉の膣壁をしばらくいたわるように優しく撫でていたが、マンコがある程度ほぐれて来たのをみてギアを変えた。

高速ピストンに移行した。
杭打機のようにチンポがドドドドドドドドドと膣をえぐる。

と同時にマンコの中では触手がびゅしゅるるるるると伸び、半分は膣内でスパイラル蠕動、残り半分は子宮口から子宮内に侵入した。さらにうち2本が卵管へと伸びる。
チンポのピストンに合わせて触手も高速で動いた。膣の襞を一枚一枚丁寧にめくるように擦り、子宮内膜をグリングリンとえぐる。
卵管の中も触手で高速ピストンされた。普通なら苦痛でしかないはずだが、触手から出る粘液が痛覚を快楽に変えた。

「ずぼららっらっらっらっらずぼらっうひゃひゃひゃはやあ
ああずずずうううううおおおおおおおおががががっ

ががががっががららららっららあああああああうごおおおおおおおおおおおおうふふふふふうううううううぼぼぼぼぼぼぼぼっ！」

内性器を蹂躙されて彗葉は泡を吹いてイキまくった。

時折両乳首や脇、指などを美青年が舐めるのが超気持ちいいスパイスとなった。

剛棒高速ピストンがさらにさらに速くなった。

彗葉のあえぎ声、いや絶叫もそれに合わせテンポが速くなりトーンが上がる。

「あはっあはあはっ、はっ、はらみっ、あはっ、ま、あはっ、す、あはあああああはははあっぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！！」

「よーし、今すぐ赤ちゃん孕ませてやるからな」

「おーし、いっくぞー！」

ぶしゃどばーっ！

触手の1本1本から精液が噴いた。

彗葉の膣も、子宮も精液で溢れた。卵管からこんにちはした2本の触手は左右の卵巣にぶっ刺さり、排卵前の幼い卵細胞全部に精液を直接どっぱあとぶっかけた。

「うごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

獣の声だった。彗葉の脳が焼け切れた。信じられない快感だった。

青年はチンポをしばらくマンコに埋めたままにした。

卵巣にぶっ刺さった触手は精液まみれの卵子をじっとにらむようにしていたが、すべてが受精し分裂が始まったことを確認すると、一つずつ選別するようにじっくり見ては、ぱくりと食べはじめた。がつがつと２０万個ほど食べ続け、やがて一つを残した。その一つをそっと抱き、するすると子宮まで運び、着床させた。

彗葉の卵巣は空になった。卵子は新たに作られることはない。彗葉の母としての機能は、今着床した１個を除いて終了した。

子宮内ではみるみる胎盤が出来上がり、受精卵の細胞分裂が活性化して大きくなってきた。

そこまで確認すると、触手たちは短くなって亀頭内に収まった。

美青年はチンポを抜いた。どぼんと牛乳瓶１本分くらいの精液が膣から掻き出された。

彗葉は息も絶え絶えに横たわっていた。体力には自信のある方だったが、腰が抜けてしまっていた。

「よかったな、出来たぞ赤ちゃん」

「え？」

美青年がそう言った途端、おなかの中から蹴られた。

彗葉は自分の腹を見た。驚くことにもう大きく盛り上がっていた。

「えええええ？」

彗葉の腹部はみるみる膨張し、元の３倍くらいになった。

が、皮膚のひび割れも起きず、子宮の痛みも感じなかった。

美青年がまめにマッサージしていたのは、柔らかい霜降りにして美味しく食べるためだったのだが、高速妊娠にも役立った。

彗葉の爆乳はさらに膨らみ、超乳というべき大きさになった。色白な乳輪が黒く焦げていき、股間も色素沈着が深まりドス黒マンコになった。

彗葉はあり得ないことが起きているとは薄く認識していたが、美青年との子供が出来たのは間違いないことだった。

ちょっと成長が速すぎるくらい、どうということはない。

すぐにも二人の愛の結晶が生まれる。彗葉は単純にうれしかった。

異常な出来事を深い考えもなく受け入れているのは、脳細胞の大半が毒され機能を失っているせいなのだが。

そしてわずか１０分足らずで破水し、胎児の頭が膣口を大きく割って現れた。

美青年が膣と頭の間に指を入れ、ずるっと取り出した。

ぶしゃーっとマン汁を噴いた。うんこもぶりぶりと漏らした。

彗葉は出産でも絶頂を迎えてしまった。

美青年が胎児を抱えながら、へその緒を摘みあたかも果物のヘタでも取るかのようにぽろっと赤ちゃんから捥(も)いだ。

残ったへその緒を引っ張って、紫色の胎盤をずるりと引き出した。

彗葉の腹がベコンとへこんだ。

が、いったん伸びた皮膚はもう戻らなかった。

余った皮が腰巻のようにだらりと垂れさがった。

彗葉は黒乳首同様気にもしなかった。

二人の愛の結晶が産まれたことに心底打ち震えていた。

胎盤は美青年がぱくっと一呑みにしていたが、多幸感でいっぱいの彗葉の目には映らなかった。

「ほら」

美青年が彗葉の上半身を起こし、股間をぬれタオルで拭き、彗葉が漏らした様々なものをきれいにして赤ちゃんを抱かせた。
彗葉は赤ちゃんの顔に見覚えがあった。

（これは私、生まれたばかりの私！）

赤ちゃんはビデオや写真で見た、生まれたばかりの頃の自分にそっくりの可愛い女の子だった。
彗葉の目から涙がこぼれた。

赤ちゃんはだあだあ言いながら彗葉の超巨大な胸に貼り付くと、黒乳首をかぷんと加えた。チューチューと吸う。

（はあああああああああ）

快感と母性本能がないまぜになって、彗葉の脳は幸せのハートマークに染まった。
初乳を通り越しこってりした母乳がたっぷり出た。
赤ちゃんがごくごく飲む。

（あああ、これが母になるということなのね…私の赤ちゃん…）

赤ちゃんはチューチュー彗葉の乳を飲みながら、貼り付いていると息が苦しいのかだんだん顔を胸から離していった。
その分、彗葉の黒乳首がにゅーと伸びていた。

（……？　あれ？）

彗葉も胸の異常に気が付いた。気が付けば、乳首は２０センチ近く伸ばされていた。

赤ちゃんは反対の乳首にも吸い付き、同じように伸ばした。

彗葉は超乳の先に黒いホースのような乳首をブラブラぶら下げていた。

（え、え？）

「ははははっ、さすがはハーフ悪魔。俺もここまで柔らかくはしてない。ピンポイントで肉を伸ばす悪魔力か。こいつは面白い」

美青年が笑いながら、赤ちゃんを彗葉から取り上げ、黒マンコに当てた。

赤ちゃんは意図を察したのか、彗葉の赤黒くなったクリトリスをチューと吸った。

びくうぅぅぅぅっとアへる彗葉をよそに、青年が赤ちゃんを抱えたまま後ろに下がる。

チューと吸われたクリトリスは、その分にゅーっと伸びた。

「これ、どこまで伸ばせるんだ？」

興が乗った美青年は、赤ちゃんとの共同作業を続け、彗葉の黒乳首とクリトリスを１メートル以上も伸ばした。

三本の長い肉の紐となった彗葉の敏感な部分を、束にして青年がちゅぱちゅぱ舐めた。

「あぎょぎょぎょぐおおおぐおぎょぎょぎょぎょごおおおおおおおぎょぐおおおぐおぎょぎょぎょごおおああああああぎょぎょぎょぐおおおぐおぎょぎょぎょぎょぎょごああああああああ！！！！」

まとめて固結びして口の中で転がすと、彗葉は白目をむいた。

もう本当に何が何だかわからなかった。脳の中は
「キモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイキモチイイ」
で埋まった。

「こりゃ面白い。どこでも伸ばせそうだな」

美青年は赤ちゃんと彗葉をキスさせた。赤ちゃんを抱いたままバックして、唇をにゅーーーーっと伸ばした。
ハスの花茎かなにかのように、肉の茎が伸び、宙に唇が浮かんだ。

次は瞳を伸ばした。
鼻も伸ばした。
耳も伸ばした。

ふざけた作業の末出来上がったものは、形の良い頭部から肉の茎が６本伸び、空中に両目・両耳・鼻・唇がぶらぶら浮かんだ化け物だった。
一つ一つのパーツ自体は彗葉の美しかったそのもののままであるのが、余計に化け物ぶりに拍車をかけた。

二次元と三次元の違いははあるが、盛大に失敗した福笑いのようだった。

彗葉はぼんやりした意識の中で、困惑していた。目のピントが合わないし、なんだかやたら揺れて気持ち悪い。

でも美青年と赤ちゃんがげらげらきゃきゃと笑っている。自分も自然にほほ笑んだ。

ほほと口の場所はかなりずれていたが。

笑いながら美青年が化け物頭部に手刀を振り下ろした。

べぎょん！　と彗葉の頭部が肩にめり込み、首から目鼻が触手のように伸びただけの顔なし人間になった。

首のない肩から生えるふさふさとした栗色の髪。髪の間から伸びる6本の肉の茎。その先っぽでゆらゆら揺れている2つの目と2との耳と鼻と口。

体の真ん中でY字に固く結ばれた超長い黒乳首と赤黒クリトリス。エプロンのように垂れた腹の皮。

既に彗葉は、普通の人間が遭遇したら失神するかゲロを吐く、最低の面容の化け物と化していた。

だが、彗葉はさらにおぞましい姿にされる。

「伸ばすのも面白いが、食べにくいから、今度は縮めるぜ」

美青年は彗葉の両腕を持ち、ぐっと押し込んだ。肩から手首から先だけが外に出た。押し込まれた腕の分おなかがぼこんと膨らんで

エプロン腹がまた風船腹になった。固結びされた乳首とクリは腹が膨らんだ分引き伸ばされた。

両足も持ってはみたが、長い脚は胴に収まらなかった。美青年はひざ下を太ももに押し込むことにした。

ばこん。

脚を押し込まれると太ももは倍に膨れ、膝からすぐ足首になった。超短足。

彗葉はよちよち歩く丸いタンクになった。丸い肩から小さい羽のように手首がパタパタし、太く短い脚でよたよたしていた。目鼻は首のあった辺りから花のように生え、乳首とクリトリスはY字に結ばれたままだ。

赤ちゃんがまーままーまといいながらケタケタ笑っていた。

「なかなか面白いオブジェになったな。うむ、芸術！あはははは！せっかく作ったのにモデル本人が理解できないのは可哀そうだ。ちょっと意識を戻してやるよ」

美青年は彗葉自身が見えるように片方の茎目をクイと曲げると、蕩けた脳をクリアにした。

「うぃいいい！！！！！！！！！！」

彗葉は絶叫した（つもりだった）が、頭を押し込まれた際に声帯も裏返ったので大きな声は出なかった。

己の姿を見て、茎口からげーげー吐いた。

慌ててこの場から逃げ出だそうとしたが、膝関節がなくなっているので盛大にこけた。

Y字の肉紐が床と擦れ、痛さと気持ちよさにまみれて泣いた。

無様な彗葉の姿を見て、赤ちゃんがきゃっきゃきゃっきゃと喜んだ。

意識が遠のき始めている彗葉に赤ちゃんがハイハイしてにじり寄った。

固結びされてる乳首とクリトリスに吸い付いた。

ちゅーぱ。

彗葉は醜い姿のまま絶頂した。ぶぼぼぼとマン汁が噴射される。

「あー、せっかく意識をクリアしたのにまた蕩けたな。このクソ肉はしょうがないな。まあさっさと取り掛かるか。とりあえずそのミルク臭い乳はお前が喰え」

美青年は固結びした乳首とクリをほどいた。そして赤ちゃんに1メートル乳首を吸わせる。

ちゅうううううううううううっ！

彗葉の超乳は赤ちゃんに吸われ乳首側にぼきゅんっと移動した。

バルーンアートで膨らんだ風船をぎゅっと移動するかのように。

今まで乳房だった部分は平たい胸から伸びる白い茎になり、真っ黒乳輪が直径1メートルはありそうな黒い球体に膨らんだ。そこからぴょこっと出ている短い黒乳首。

もう一つの乳房も同じように吸って中身を移動させた。
首からブラブラ伸びている目鼻と同様、爆乳も胸から伸びた茎の先に膨らんでいる黒ボールと化した。
デカい水風船を胸からぶら下げているようだった。

赤ちゃんが一周回ってノーマルな長さに戻った乳首に今一度吸い付いた。

じゅじゅじゅじゅじゅじゅばーっ。

ボールが急速に萎びた。母乳だけではなく、乳腺も脂肪も全部吸い尽くされた。

もう片方もじゅじゅじゅじゅじゅじゅばーっと吸い出した。

彗葉の美しかった乳房は、白黒の細長いただの紐になった。
本人はおっぱいの中身を吸われきって、マン汁を噴いて失神していた。

もはや彗葉の体でまだまともな姿を残しているのはマンコぐらいだった。クリトリスが1メートルぐらい伸びているのとドス黒いのを除けば。

「まだアへるか。マンコもきっちりトドメさしとくか」

美青年のチンポがめきめきと膨れ上がり、陰茎には返しの棘、亀頭はスパイクのような突起がぎっしり生えた。
棘付き金属バットのバージョンAチンポだ。

ハンプティダンプティのように丸く膨らんだ彗葉をひっくり返し、短い両足を持ってマンコ全開で逆さにした。
金属バットチンポを上からぶち込んだ。

「あぁぁぁぁぁぁぁあああぁぁぁっぁぁぁあっぁぁぁあっぁぁぁぁぁぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁああああぁぁぁぁぁ！！！！！」

声帯がつぶれているので小さな悲鳴だが、彗葉のドス黒マンコは限界突破してブチ切れた。
出産直後だし、二日間かけ肉を柔らかくされていたので、川島茉奈（第1話の女の子）よりはましだったが、それでもとどげとげに膣肉をごっそり削られた。
長いクリトリスはギリ削り取られなかったのでぽっかり開いた肉穴の端っこでブランブランと揺れていた。

「油！」

美青年がそう言うと、ぐつぐつ煮えた油を張った巨大な寸胴鍋が現れた。
肉穴と肛門に指をかけ、彗葉を美青年が鍋まで運んだ。
ボーリングの玉のようだった。

「じゃあな、あっ痛みを快感に変える悪魔力も無効にしたからな。死を実感できなきゃ、イヤだろ。あ、そうそうお前が美味しい美味しいって食べてた食事な、もうわかってると思うけどあれ人間の肉な。あはははは！」

美青年は笑いながら油が煮えたぎる鍋に長く伸びたクリトリスを浸けた。

２００度の高温でクリが素揚げになった。
肩から伸びた唇が絶叫した。声帯がつぶれて大きな声が出ないはずなのに。

「へえ、人間ってやっぱり限界超えられるんだな。さすが悪魔の天敵。気を付けてないとダメだな」

クリが芯まで揚がり、続いて萎びた乳紐を素揚げにする。また彗葉ボールが絶叫を放った。

「おっぱいは脂肪が多すぎるから却って揚げにくいんだけど、乳紐にしたらちょうどいいな。次からこれを定番にするかな」

揚がったクリ紐と乳紐をぽきんと折る。
クリ紐と片方の乳紐の素揚げは美青年が、残った乳紐の素揚げは赤ちゃんがポリポリ食べた。
いや、もう赤ちゃんではなかった。４、５歳の女児に成長していた。彗葉にそっくりな幼女だった。

「旨いな。子供産んだ女は臭味が出ると思っていたが、悪魔との子なら問題ないようだ」

乳もクリも失い手も足も短くめり込んで転がって呻いている彗葉ボールを美青年は見つめた。

「お前、今生きている人間の中では一番賢いと聞いていたが、大して違いはなかったな」

美青年にしみじみ言われたが、乳とクリトリスを揚げて捥がれた苦痛でそれどころではなかった。

呻いているうちに体が持ち上げられ、全身をどぷんと油に漬けられた。

「あぎゃはぎゃぎゃあやあああぎゃがやがやぎゃがやがやがやあぎゃがやぎゃぎゃがやあああ！！！」

油には肩辺りでぷかっと浮かび、そこから下はみるみるうちに皮膚が焼けて縮まり肉が真っ赤に爆ぜていくが、茎目鼻は油面から出ていた。脚の分重心が下になるのだ。

茎目はくわっと見開き号泣し、茎鼻から鼻水を垂らし、茎口から出ないはずの絶叫を上げ続けた。

やがて内臓が深刻なダメージを受け、茎鼻と茎口から血を吐いた。声も小さくなって消えていく。

美青年がでかい肉団子をくるっと回した。目鼻も油に浸かってジュっと揚がった。

彗葉はもう痙攣すら起こさなかった。

美青年の苦手な髪の毛も油で焼けて炭になった。

彗葉は死んだ。

肉団子に程よく火が通った。

能力で油から空中に持ち上げると、油を切っていつの間にか用意されたでかいまな板の上に置いた。

茎状の目鼻は幼女がバキンと折ってもぐもぐ食べた。揚げお菓子だ。

美青年は指をシュッと振って5センチ厚ぐらいずつに順に上からスライスした。

腰から下はドーナツのように穴が開いていた。金属バットでえぐられた膣の痕（あと）だった。

美青年は胴の真ん中の最大部分からぱっくり食べはじめる。骨も内臓もお構いなしに。

幼女は口が大きくないので太ももものスライスをぱくぱく食べた。食べながら、また少し成長する。

早くも美青年に妖艶な笑みを浮かべながら。

美青年は、こいつを使って獲物を捕まえたら楽ができるな、と思った。

数時間後、美青年と美少女はくっさいくっさい一本糞を同時にひり出した。

それが新垣彗葉という絶世の美女の末路だった。

第3話の2　新垣彗葉（★）（後書き）

ね。

第４話の１　武龍千比呂（前書き）

警視庁公安部第九課・武龍千比呂。村上水軍を祖とする武龍家は戦前は国事警察を経て治安部特別高等警察、戦後は公安警察の要職を代々務めています。武龍千比呂の父は前公安部長現外事部長武龍岳敏。千比呂は弱冠２６歳にして公安九課の警視正にて潜入捜査官の異名をとる実質ナンバーワン隊員です。これまで九課が係わったカルト教団に偽装したテロ組織のボス逮捕、反社会勢力不動産会社によるマネーロンダリングの真相究明、仮想通貨コンサルティング詐欺の主犯逮捕、バイオ燃料の環境評価改ざん事件の摘発、働き方改革助成金詐欺事件の主犯逮捕等々、その成果は主として武龍千比呂の功績によるものでした。

現在武龍千比呂が係わっているのは連続猟奇殺人事件。

公安九課。異常犯罪専門部署は一連の異常犯罪に対し、精鋭である武龍千比呂の潜入捜査を命じました。

発端はジンソングループ総帥村神大吾の自宅に届いた2個の細長い桐箱でした。

村神家の女中が空けたところ、中にはそれぞれ糞が入っていました。質の悪いいたずらだとすぐに捨てようとした女中を止めたのは村神大吾本人でした。

ＤＮＡ鑑定の結果、その2本の糞は大吾の一人娘彗葉の細胞で出来ていることが分かりました。

つまり、彗葉は喰われ、消化され、この人糞になった事実が科学的に証明されたのです。

大吾は慟哭しました。

同じころ、少し離れた川島雄三宅にも同様の桐箱が送られていました。川島雄三は本当にいたずらだと思い生ごみとして捨てたのですが、村神家の、いやジンソングループの愛娘の末路が悲劇的にマスコミに報道されたのを知り、まさかと思って警察に届け出ました。すでに川島家に届いた桐箱は焼却されていましたが、焼却場の灰を念入りに調べた結果、混入することがありえない人間のＤＮＡが発見されました。

おそらく、届いた人糞は行方不明になっている川島家の娘・茉奈のものと考えられました。

そう、恐ろしいことにそれは野犬や熊などの肉食動物の糞ではなく、明らかに人糞でした。

彼女たちは、人に喰われたのです。

千比呂は同世代の女性として村神彗葉を尊敬していました。面識はありませんが、高校生の頃は日本を代表する美女として、また日本を代表する知性として世界から注目される憧れの存在でした。教師と学生結婚して卒業と同時に家庭に入った潔さも高く評価されていました。

そんな素晴らしい女性である村神彗葉がうんこになるとは。

あってはならないことでした。

川島茉奈については千比呂の捜査で遺留品が見つかりました。Ａ地区の廃倉庫で女性のものと思われる髪の毛が生えたままの頭皮が見つかりました。

ＤＮＡ鑑定の結果、その皮は川島茉奈のものと同定されました。

その一方人糞事件とは別に、新たな猟奇事件が発生していました。

ある病院に担ぎ込まれたけが人二人は、全身の皮膚がありませんでした。

まぶたを失いぎょろりとした眼球、穴だけになった鼻、歯がむき出しになった骸骨に近い頭部からは本来の顔は不明でしたが、脂肪と筋肉がむき出しになった体は１０代半ばの均整の取れた少女だったことがうかがえました。それだけに皮膚を失った顔や体は正視に耐えられないほどおぞましいものでした。一人の少女は片方の乳房すら失っていました。

しばらくして二人が自殺したと聞いて、千比呂はむしろ安堵しました。あの状態で生きることは人として、女性として耐えられませんでした。そしてそんな弱い気持ちになった自分を叱責しました。

警察関係者としては失格でした。

武龍千比呂は必ず犯人を捕まえ法をもって裁くという強い意志で追い詰めていきました。そしてついにそのアジトに潜ることに成功しました。

絶対に逃がさない！

心の芯の闘志を燃やす千比呂でした。

で、ま、あっさり逆襲されて捕まっちゃったんですけど。

てへぺろ。

第４話の１　武龍千比呂

武龍千比呂（ぶりゅうちひろ）は目を覚ました。

体が動かない。

眼球は動く。すばやく可能な限り周囲を見渡す。体の拘束はない。だが動かない。筋弛緩剤でも投与されたのだろうか。処方を誤ると肺呼吸が止まって死に至る危険な薬だ。相手は医学の知識があるのだろう。

寝ている場所はコンクリート打ちっぱなしの広い部屋だ。暗くて周囲がよく見えないが、倉庫のようだ。川島茉奈の頭皮を見つけた場所に似ているが、違う。磯の香りがしない。

深呼吸も出来ない。気を練らないといけないのに。とはいえ目は覚めた。体の感覚を取り戻すのも時間の問題だろう。

不覚を取ったが、まだまだ逆転の機会はある。

と、人の気配はないが、小さな機械音を感じた。聴覚も戻ってきつつあるのだろう。扇風機のような羽音だ。眼をめぐらすと、音の出所を見つけた。

ドローンだ。小さなローターで浮いているドローンが数機。カメラを下部に搭載している。監視されているということか。

「レディースアーンドジェントルメン！」

突然声がし、千比呂はスポットライトを浴びた。千比呂は素早く

目を慣らした。触覚が麻痺しているので初めて気が付いたが、着ていたはずのスーツはなく、ブルーのブラとショーツ姿に剥かれていた。しかしながら、ショルダーホルスターはブラの上から巻かれている。中身のH&K（ハンドガン）USPもそのままだ。コンバットナイフも右足首に巻いた鞘に収まっていた。

得物はそのままか。よっぽど自信があるってことね。舐められたものだわ。

「約束の24時間がたった今過ぎたね。美人捜査官、武龍千比呂ちゃんの処刑を始めよう。このインターネット中継は千比呂ちゃんの命があるうちは続けるから、その間に公安さんが場所を特定できれば千比呂ちゃんを救い出しに来てもいいよ。じわじわと人間終了させるし必ずしも五体満足とはいかないだろうけど。そもそも死ぬまでに間に合うかなあ？　あはははは！」

インターネット中継？ふざけた奴だ。武龍千比呂はそう思った。体は回復しつつある。連続猟奇殺人事件の重要参考人だ。物言いからして主犯格だろう。絶対に捕まえてやる！それに公安のサイバー部隊は優秀だ。いくら偽装してもサーバーの場所は特定される。応援部隊は必ず来る。

「いいねえいいねえ、体が動かなくてもその殺気。大したもんだよ千比呂ちゃん。ご褒美に体の感覚を戻してあげよう」

声がそう言った途端、全身の感覚が戻ってきた。跳ね起きてすり足で周囲を警戒する。声はすれども姿は見えず。

肉体の制御を自在にオンオフできるということは単純な薬物投与ではない。深層催眠の一種か？　再度制御を奪われる可能性は十分にある。面倒な敵だ。

だが、甘く見たな。

千比呂は声のする方向と反対にダッシュした。

声はスピーカー音だ。そっちにはいない。

鉄フレームとトタン壁がすぐに見えた。鉄フレームを固定している斜めワイヤに飛びつき、フレームやワイヤを飛び移りながらボルダリングのように天井へ上る。天井付近の太い梁のフレームの上に寝そべった。

天井に換気口か明り取りの窓があるはずと思ったが、残念ながらこの倉庫は何もない、ただウレタンに覆われた屋根があるだけの場所だった。壁面にも窓は一切ないようだ。

「さすが驚きの身体能力だねえ。いいよいいよ千比呂ちゃん！」

スポットライトとドローンが千比呂を追尾していた。中継のためか。

スポットをこう浴びせられると、暗がりに目が慣れない。

梁と天井が近いため、腰を大きく落として千比呂は倉庫を一周するようにフレームの上を走った。

追尾してくるスポットをサーチライトとして利用し、倉庫内を確認する。がらんとしており、ほぼなにもない四角い空間だ。

一瞬、人影が映った。

素早くフレームを蹴り、空中からタックルした。しっかりとした手ごたえ。そのままホールドして寝技に持ち込もうとした。

が、ひょいと返された。今の空中タックルが全然効いていない！？

「これでおしまい？　千比呂ちゃん」

スポットが追尾してきたのでその姿がはっきりとわかった。薄い栗色の長い髪。ぴちぴちのレザースーツに包まれた細長い手足。背はそれほど高くはないので一見華奢な女性にも見えるが、とんでもない美形の男子だった。

正直、千比呂の予想していた犯人像とはかなり異なる。だが、ネット中継で面が割れた。これだけ目立つ容姿の犯人だ。個人情報の特定もすぐだ。

「ああ、顔バレしたと思ってるんだろうけど無駄だよ。ドローンからのライブはサーバーのＡＩでリアルタイム処理され僕の情報は隠蔽されるようになっている。このドローン自体もＡＩにより自動で最適なカメラアングルで撮っているからね。千比呂ちゃんが死ぬまで微に入り細に入り中継しちゃうよ。あはっ！」

狂っている。見た目に騙されてはいけない。異常性愛者で猟奇殺人鬼なのだこいつは！

こいつが今のようにふざけながら村神彗葉を、川島茉奈を殺し、喰ったのだ。

二人の少女の皮をはぎ、その後の人生を奪ったのだ。

銃はある。だが、丸腰の相手を撃つわけにはいかない。ネット中継もされている。私は逮捕するために潜入したのであって、私怨を晴らすためではない。

千比呂は知らないが、国内外の複数のライブチャンネルで中継されているこの映像をすでに数千人が見ていた。「エロ惨殺→千年に一度の美人潜入捜査官・武龍千比呂ちゃん２６歳生処刑！！ポロリもあるよ」というあおりに誘導されて。

「ライブ視聴のみんな～。まずは千比呂ちゃんの強さを確認してね～。ただいまより、千比呂ちゃんが雄のヒグマと対戦しまーす！」

なに！？

美形がすっと影に溶け込むと、かわりにのそりと巨大な影が起きあがった。

「う、そ……」

体長３メートルはあろうかという巨体。それは確かにヒグマだった。

ごおおおおと爆音のような鳴き声をあげながら張り手が迫った。千比呂は本能で飛び退く。

ヒグマの股間には巨大なペニスがそそり立っていた。半ばから剥け長い亀頭が反り返っていた。

馬のペニスを見たことがあるが、それよりも太く長かった。

発情してる！？

ヒグマは速い。千比呂の跳躍速度よりも素早く距離を詰めた。間一髪、鋭い爪は身をかがめた千比呂の頭の上を薙いだ。髪が何本か切り飛ばされたが、かわせた。

が、かがめた顔の前に凶悪ペニスがあった。

頬をヒグマチンポで強打され、千比呂は吹っ飛んだ。

身を丸めて柱を蹴る。激突は避けた。打たれたのがペニスでまだましだった。後ろ足で蹴られでもしたら肉塊と化していただろう。

それでも鼻血が垂れてきた。

と、はらりとブラがフロントから左右に開いた。
乳房の間に斜めに浅い切り傷が走り、わずかに出血していた。爪がかすったのだろう。
ブラはホルスターのベルトで押さえられているのでカップ部分がひらひらとぶら下がっていた。
千比呂の濃いピンクの乳頭が露わになった。
ネット中継のことが頭をよぎるが、羞恥を感じている場合じゃない。

発情ペニスを突き出しながらヒグマが千比呂に向かって突進してくる。後ろは壁。

千比呂は壁に向かってステップを踏みジャンプした。壁を蹴り、さらに柱を蹴って跳びあがる。
梁のフレームに手が届く直前、腰に痛みが走った。ヒグマの爪にひっ掻かれたのだ。
そのまま落ちた。無理に上に向えば爪が喰いこみ骨盤が砕ける。
ヒグマの腕の動きとシンクロして落ち、床に着いた瞬間転げて二撃目を避けた。千比呂がいた場所をヒグマがチョップし、床のコンクリがはつられた。

転がった後にブルーの端切れが残っていた。爪で裂かれたショーツの残骸だった。陰毛の濃い千比呂の股間が露わになった。
オールヌードがネットで中継されていることより、腰に喰いこんだ爪のけがの方が問題だった。お尻の上に穴が開いてかなり出血している。

千比呂はヒグマの胸に向かって跳躍した。3メートルの壁に吸い込まれる。ヒグマは飛び込んでくる千比呂を羽交い絞めにしようとした。

千比呂はヒグマの亀頭を踏み台にした。

ぎゃっと言う雄叫び。海綿体の弾性を利用してヒグマの腕の間を抜けて跳び上がり、肩を台にして再度蹴る。天井の梁に手が届いた。くるりと逆上がりしてフレームの上に身をかがめる。

H&K　USPを取り出す。

猛獣相手なら銃が使える。が、9ミリパラベラムではヒグマ相手じゃ厳しい。頭蓋骨にはじかれるのが関の山だろう。

ヒグマは一瞬千比呂を見失ったが、天井のフレームに隠れてるのを見つけて吠えて迫ってきた。ジャンプしてフレームをガンガンガン殴り続ける。チンポ踏まれたのがよっぽど痛かったのだろう。

千比呂はハンドガンを構えたままフレーム上を中腰で走って逃げた。

ヒグマの体重５００キロ。その程度の重量がぶつかってもフレームが曲がることはないが、フレームを固定しているワイヤやボルトはその限りではない。ヒグマがガンガン殴るうちにだんだん緩んでぐらついてきた。千比呂はすばやく位置関係を計算し、１本のワイヤに向かって発砲した。

ワイヤは見事に切れ、千比呂が乗っている鉄フレームが斜めにずり落ちる。千比呂を追うヒグマに向かって落ちてきた鉄骨の先端が相対する。慌ててヒグマは止まろうとするが慣性の法則がそれを許さない。

ヒグマは頭からフレームに突っ込んだ。

千比呂は衝撃で飛ばされるが、空中で姿勢を操り五体投地で前転し床に立ちあがった。腰に激痛が走る。

ヒグマの頭がい骨は鈍い音を立ててへしゃげた。頭の半ばまでフレームが食い込んでいた。

千比呂はＨ＆Ｋ　ＵＳＰを油断なく構えて様子を見た。

ヒグマはフレームから頭を無理やり抜くと、くぐもった鳴き声をながら両手を振り回しつつ千比呂に迫った。

頭の上半分が潰れていた。両目とも眼球が破裂し視神経が垂れていた。前頭部の骨が割れ、脳が見えていた。

ヒグマは狂戦士（バーサーカー）と化していた。臭覚を頼りに千比呂に牙、爪、蹴りで連続攻撃してくる。どれも必殺のパワーだ。食らったら即死だ。

千比呂は優れた跳躍力と敏捷性で立体機動で避け続けるが、けがをした腰が重い。

もう何分も逃げ切れない。

また壁際に追い込まれた。壁を蹴ってワイヤフレームに飛びつき、梁のフレームによじ登る。一瞬背中を見せた時にヒグマの手が千比呂の左足を捉えた。

そのままぐいと引き寄せられた。股間にヒグマのペニスがぶつかった。その瞬間ヒグマは射精した。ペニスの先端からゲル状の精液がどぶどぶと噴出し千比呂の股間を汚す。死に瀕して子孫を残そうという本能なのかもしれない。

ヒグマが射精で脱力した瞬間、自由な右足で左足を掴んでいる手を蹴り飛ばし、逃げて距離を取った。ヒグマの精液まみれの股間がひりひりする。素股のような格好になり挿入はされなかったものの、ペニスの先端のかぎ状の部分が千比呂の膣をえぐっていた。

千比呂は男を知らなかった。２６年物の処女膜がヒグマのチンポに傷つけられ、出血していた。

（さきっちょだけ！　さきっちょだけ！　セーフ！　セーフ！）

千比呂は自身に言い聞かせながら、心で泣いた。初体験が熊って……。

精神の痛みをこらえて梁へとジャンプし、強姦犯人ヒグマのむき出しの脳を上から狙う。

パン、パン、パン。

恨みを込めて三連射（トリプルタップ）し、しばし待った。

ぐうと一声呻いて、ヒグマは倒れた。

勝った。

千比呂はそう思ったが、腰からの出血がひどくなってきた。フレームから床にぼたぼた血の塊が落ちる。

「さーすが千比呂ちゃん。ヒグマを倒しちゃったよ大したもんだねえ。ま、僕の予想通りだったけどねー。ヒグマに生きたまま喰われるコースは回避したねー」

姿を現さず声だけがする。

くそっ、舐めた奴だ。でもどうやってヒグマをここまで連れて来たんだろうか？猛獣の気配などなかったはずだ。それにこいつは私が死ぬまで中継すると言った。次は何をする？

梁のフレームにうつぶせに寝そべり体力の回復を待つ。腰の傷は我慢するしかない。

「じゃあ次ね次ね～。次何すると思う～。……これっ！」

美形がそういったとたん、シャカシャカシャカという不快な音があちこちから聞こえてきた。

大量のゴキブリが天井からも床からも千比呂に迫ってきた。

虫を操るだと！　しかもこれ何万？　何十万？　嘘、イヤ、やめ

てぇっ！！！

千比呂はパニックを起こしかけた。が、鉄の理性が本能を押しとどめる。。

ヒグマの死骸に向かって飛んだ。腹をクッションにして転がり、踵を返すと鉢のように開いた頭蓋骨に腕を突っ込み、脳みそをこそぎ取った。

無茶な動きのせいで腰に火であぶられるような痛みが走るが、かまっている余裕はない。ヒグマの脳をフレームからざわざわと降りてくるゴキブリの大群の中に放り投げた。

ゴキブリは降ってわいたごちそうにたかって団子になった。その間にナイフでヒグマの腹を裂こうとした。だが、対人用のコンバットナイフでは歯が立たなかった。

ただちに方針を変え勃起したままのペニスを根元から切り取った。睾丸も取り出す。

恨み半分でざくざく切れ目を入れ、これもゴキブリのそばに放り投げる。肉団子が分かれ、ペニスと睾丸にもたかり始める。

脳はすでに半ば食い荒らされていた。一瞬遅かったら自分がああなっていた。

だが、まだゴキブリを撃退したわけではない。

向かいの壁に分電盤があった。

それを確認すると、千比呂はヒグマの首にナイフを突き立て頸動脈を切った。ヒグマの血が大量に、だが心臓が止まっているのでゆっくり床を流れていく。ゴキブリは血のタンパクも好みなのか、血液にもたかりはじめる。床にゴキブリの川が出来たようになった。脳やチンポにたかっている集団も血で染まった。向かいの壁までヒグマの大量の血が届いた。

千比呂は分電盤をH&K　USPで狙った。
確実を期すなら分電盤を開けたいところだが、ゴキブリに阻まれてたどり着けない。
自分の足が血の川から十分離れていることを確認し、トリガーを引いた。

ボン！　と分電盤がスパークし、スポットライトが消えた。同時にちぎれた高圧線が血の海に落ちた。

血液は電気を通す。

ゴキブリどもは高圧電流で焼かれた。吐き気を催しそうな油臭があたりを覆った。

再びライトが点いた。

ゴキブリの大半が焦げてひっくり返っていた。ヒグマの死体にも黒い線が走っていた。電気が通った跡だった。

「千比呂ちゃん～いいねいいね～。でもそろそろ本気出さないと視聴者減っちゃうよね～次は僕が行くよ～」

それが、千比呂に死が宣告された瞬間だった。

第４話の１　武龍千比呂（後書き）

あまりエロくない！
すみません！
しかも一括投稿じゃありません。５月投稿出来なかったので、書いてますよーの証明に。
続きはｗｅｂで！（当たり前や）

第４話の２　武龍千比呂（前書き）

サブタイトルに（★）がないです。ということでまだ続きます。
今回はエロ責め精神責め回となりました。

第４話の２　武龍千比呂

中性的美形がスポットライトに姿を現した。

確かにこの美形は強い。初手であっさり技を返された。だが、ヒグマやゴキブリじゃない。人間だ。腰の痛みがひどいがこの程度の傷ならば遅れは取らない。千比呂は自分の体術に自信と誇りを持っていた。

Ｈ＆Ｋ　ＵＳＰとコンバットナイフをホルスターに納める。剥き出しにされた胸や股間が恥ずかしくないわけではないが、今はこいつを確保ことが先決だ。絶対倒す！

「それはどうかな～？」

舐めたような物言いに、千比呂は先制攻撃を仕掛けた。ステップしながら接近し正拳突きを左右に繰り出す。ハードパンチのラッシュだ。だが美形は軽く左右に揺れながら躱す。

さらに回転蹴りからローキック、回し蹴り、ハイキック、踵落としと連続蹴りでラッシュをかける。

だが、ことごとく空を切った。当たらない。

「はあああああああ！」

側転しつつ脚を揃え全身のばねを使ってあごを狙い蹴り上げる。すっと避けられたが、これはフェイント。腕の力で回転の方向をねじり、逆さになったまま脚を開いて後頭部へ膝蹴りを叩き込んだ。

見事に延髄に決まった！

だが美形は倒れることもなく、ぐいと背中に手を回して千比呂の足首を掴んだ。
そのままブンと振り下ろした。
脚を掴まれたままの千比呂は、美形の背中から前に半周して床にたたきつけられた。
ごぎんっと嫌な音がした。息が苦しい。

「ぐ、ぼっ」

千比呂の口や鼻から血があふれてきた。肺を損傷したのかもしれない。
必殺の蹴りだった。なぜこの美形は倒れない！？

「なかなかいい動きだね～。僕には効かないけど～。へへへへっ。さて、そろそろ画面を見ているみなさんもお待ちかね、千比呂ちゃん大公開の時間です～。おい、熊三郎」

死んだはずのヒグマがのそりと立ち上った。
頭の鉢が開き脳も目もなく、首からの出血や高圧感電の黒い筋も残り、股間はえぐられ血まみれのヒグマが、千比呂にのしのしと近づいてくる。

生きているはずはない。これではまるでゾンビだ。

千比呂は逃げられなかった。腰が動かない。けがのせいだけではない。恐怖で竦んでいたのだった。

ゾンビヒグマに腕を掴まれ、前向きに立たされた。ヒグマの毛が背中を擦る。傷つけられたばかりの肋骨が悲鳴を上げ、腰の傷に固

い毛が当たって痛いが、それどころではなかった。ありえないことが起きている。催眠術による幻覚？　そうじゃない、この痛みは本物だ。逃げなきゃ、逃げなきゃ！

「じたばたしても無駄無駄。熊三郎はその気になればそのまま千比呂ちゃん圧殺出来ちゃうからね～。べしゃんこになりたくなかったらおとなしくしててね～。はーい、カメラ千比呂ちゃんの顔アップー」

一機のドローンが顔の真正面で空中静止する。
半ば怖気づいていた千比呂だが、カメラをキッと睨む。

「お、いいねいいね今の表情。この状況でその強気、さすがは武龍千比呂ちゃんだね～。でも顔血だらけで美人が台無しだね～。きれいにしてあげるね～。ゴキカブリども！」

美形がそういった瞬間、千比呂の顔がぶりっとゴキブリで埋まった。
この時中継を見ていた連中のうち何人かが心臓麻痺を起こした。
ゴキブリパックされた千比呂は反射的に絶叫しそうになった。だが口を開けたらゴキブリが入ってくる。必死で抑えた。涙が出そうになるがぎゅーと目をつむってこらえる。ヒグマはがっちり千比呂を固定しており腕や体はピクリとも動かせない
顔の上をかさかさごそごそ這い回られ顔の皮膚を舐めまわされた。触覚がさわさわするのが吐きそうなくらい気持ち悪い。最低だ。

「ようし、きれいになったね～」

美形の言葉でゴキブリが瞬時に消えた。顔に付いた血はきれいに消えていた。それ以上に千比呂の顔は血の気がなかった。顔面蒼白

とはまさにこれ。
涙目にはなっているが、涙を漏らさず、悲鳴も上げなかったのはただひたすらのド根性だった。

「うるうるしてても千比呂ちゃんは美人だね～。あっ、ゴキカブリどもはさっき電気で焼かれて消毒されたから雑菌ついてないよ～。食べても大丈夫だから安心してね。でもよい子はマネしちゃダメだよ！　あはっ」

誰に向かって言っているのが分からないが、嬲りモノにして遊んでいることはよくわかった。
こんな奴に負けちゃだめだ！　私は武龍千比呂！　その名に恥じぬ戦いをするのだ！

「はーい、次はみんな大好きおっぱいをじっくり見せるね～」

ドローンが下がって胸に相対した。ご丁寧に2機が左右それぞれを捉える。
美形がホルスターに挟まっているブラの残骸を取り除いた。そして下からすくうように胸を持ち上げる。Cカップの大きすぎず、小さすぎずの美乳がぽよぽよと揺れる。

「胸筋がすごいからもっと固く絞まってるかと思ったけど、柔らかいおっぱいだね～。乳首の色は濃い目だね。ああ、傷だらけだね～。ちー」

といいながら胸の谷間を斜めに走る傷をなぞる。美形の爪が薄く喰いこんでまた薄く出血してきた。

「ありゃりゃ、めんごめんご傷が開いちゃったね～。お詫びに引っ

張ってあげるね～」

両手で二つの濃いピンクの先端を摘んで引っ張る。おっぱいがぎゅーと伸ばされたが、千比呂は表情を変えなかった。

なにがお詫びだ。ふざけやがって。

体をいじられるたびに闘志が沸き立つ。そうだ、私はまだあきらめてはいない。心は折れていない！

「はーい、じゃみんなの一番のご期待、マンコでーす。やったね千比呂ちゃん全世界にマンコ公開タイムだよ～。きっと視聴率跳ねあがるよ～」

性器を公開されるくらいなんだ！　ＡＶ女優ならあたりまえだ！

ＡＶ女優にできて私にできないはずがない！

と、自分を勇気づけるが、性に関しては全く奥手の千比呂は正直泣きそうだった。

「熊三郎、手足拘束Ｍ字開脚よろ」

ゾンビヒグマがぐいと腕と膝を纏めて抱えた。子供にオシッコさせるようなポーズで、千比呂は宙に浮いた。腰は高く上げられ、性器は無論肛門まで天井を向いていた。頭はヒグマの胸にもたれて正面を向いたままだった。己のおっぴろげられた股間が眼前にあった。

「ありゃりゃ、熊三郎の精液がべっとりだねえ。ゴキカブリ！」

それだけはやめてと思った瞬間、股間が大量のゴキブリで埋まった。かさかさと蠢きながら性器にこびりついたヒグマの精液を舐める。触角がクリトリスや陰唇にひらひらと当たる度に奈落の底に落ちる思いがした。

「はーい、顔とマンコ同時にフレームインするね。マンコは二画面でアップもサービスサービスっと。皆さーんゴキカブリ……ゴキブリにマンコを舐められている、人間として終わっている美女、武龍千比呂２６歳、武龍千比呂２６歳でーす」

一機のドローンが怒りと羞恥と絶望との間で揺れる千比呂の表情を股間越しにズームしていた。くそっ、くそっ！

「おし、きれいに取れたね。はい、熊三郎、M字開脚」

ヒグマゾンビがぐいと千比呂の股を広げた。そしてゴキブリが瞬時に消える。

手入れをしていないナチュラル伸び放題の濃い陰毛に覆われた千比呂のマンコが全開になった。

陰毛は肛門までびっしり生えていた。

が、マンコ自体は少女のようにかわいい性器だった。小陰唇は襞のほとんどないぷっくりしたピンク色で、クリトリスも慎ましく小さな先端だけが覗いていた。

膣も襞が寄った処女然としたものだったが、右下の一部が裂けて襞がめくれていた。

マンコの全パーツを丸見えにされた姿でしばらく放置される。

美形も軽口を言わない。

インターネット中継……

晒しものにしているのか。一体何人がこれを見ている？

サイバーチームがブロッキング掛けてくれていればいいのだが、まだ部隊が到着してないところを見ると望み薄だった。

特定はまだなのか。
千比呂の頬が赤く染まる。
くそっ！　くそっ！

「はーい、じっくり見たかな～？　みんな気がついたよね。千比呂ちゃん残念ながらもう処女じゃないでーす。でもねでもねでもね、ついさっきまではおかたーい処女だったんだよー。どうしてだと思う？　どうしてだと思う？　そー、その通り！　さっき熊三郎にマンコ擦られたとき破れちゃったんだ。そう、大切な純潔を捧げたのはヒグマの極悪チンポなのさ～。終わってるよね～。しかもさその時千比呂ちゃん、さきっぽだけだからセーフセーフと自分に言い聞かせていたんだよ～。痴漢オヤジの思考だよね～うける～」

くっ、こいつ何でそれを！

「それにしても千比呂ちゃんの毛、濃いねえ。ケツの穴の回りもびっしりだね～。うんこした後毛に付いてない？見苦しいからちょっと剃るね～」

美形が脚のコンバットナイフを奪った。それで剃るのか？ちょ、やめて！
ヒグマの血や脂が付いたままのナイフをぞりぞり小さく動かして、千比呂のケツ穴やマンコ周りの陰毛を器用に剃り落としていく。
しばらくすると、恥丘にハートマークが出来た。そのほかの毛はすべて剃られた。ところどころ毛穴が赤くなっていた。カミソリ負けならぬコンバットナイフ負けだ。

「ほーら、可愛くなったじゃん。ヒグマで処女喪失したマンコだけど、こうすりゃすっきり見えるよね～」

こいつはいちいち心をえぐってくる。負けちゃだめだ、これがこいつの手口なんだ。こうして精神的に追い込んでくるんだ。

負けてたまるか！　裸を見られようが、辱められようが、最後まで負けなければ勝ちだ！

蓄積した精神ダメージで、若干思考がおかしくなってきている千比呂だった。

「ケツ穴の処女の相手はこいつでいいかな？」

美形がコンバットナイフの切っ先で肛門をつつく。放射状の皺がすぼまった。おいやめろ。括約筋を切られたらもとに戻らない！

「あはっ、冗談だよ。こっちね」

グリグリっとケツ穴に硬いものを押し込まれた。冗談と言いつつナイフでやられた！と一瞬思ったが違った。

どういう手品か、コンバットナイフはＨ＆Ｋ　ＵＳＰに変わっていた。短い銃身がねじ込まれていた。

美形がホルスターに触れたのを感知できなかった。

ねじ込まれた肛門が痛い。尖った照星が腸壁を削る。

「この状態で撃ったら千比呂ちゃんどうなるのかなあ？　どうなるのかなあ？　実験してみていい？　実験してみていい？　えへへへへ～」

千比呂は真っ赤な顔で美形を睨みつけた。やってみろ、と言わんばかりに。

「冗談。これも冗談さ。簡単に殺しちゃったら視聴者の皆さんに申し訳ないよ。じわじわ人間終了させるんだからね。まだまだこれからじっくり壊してあげる」

美形はH&K　USPを抜いた。

千比呂のケツ穴は少し血が滲んでいた。

千比呂の眼前で、美形の手からH&K　USPが消えた。消えたとしか表現できなかった。コンバットナイフもどこにもない。

「きれいな千比呂ちゃんの姿、みんな見てくれたかな?これで見納めだからもうちょっと映しておくね。こんなにきれいで強ーい千比呂ちゃんが終わっていくの、面白いよね~。3分後に最終ラウンド始めるね~。ドローン、しっかり舐め回すように撮れ」

ゾンビヒグマによる空中拘束全裸M字姿をたっぷり3分全世界放送された。

顔もおっぱいもマンコもケツ穴もたっぷりと。

ハートマークに揃えられた陰毛がアホっぽい。

この時ライブ視聴者数は全世界で1千万人を超えた。社会的な意味ではすでに人間終了している千比呂であった。

第４話の２　武龍千比呂（後書き）

次回は（★）付きです。武龍千比呂完結編です。物理的に人間終了します。お楽しみに。

第４話の３　武龍千比呂（★）（前書き）

武龍千比呂編最終回です。思いのほか長くなっちゃいました。すみません。

第４話の３　武龍千比呂（★）

「ハイ３分経ったー。最終ラウンド始めるよー。どうやら公安さん間に合いそうもないねー。ざーんねん」

美形がそう言うと、千比呂はだらりと脱力した。ヒグマがそっと床に下した。

身体制御をまた奪われたのだ。しかし表情は怒りに燃えていた。首から下はぴくりとも動かせないけれど、意識ははっきりしていた。美形をにらみつける。

「熊三郎、拘束して引き上げろ」

どこからか現れた金属鎖の付いた手枷・足枷をヒグマが器用に取り付ける。鎖は梁から伸びているようだ。さっきまでそんなものはなかったはずだが、死んでるヒグマが動いていたり、ゴキブリが人間の命令に従ったりする異常な世界に囚われている。考えるのは無駄だ。事実に対処するしかない。

鎖が引き上げられ、千比呂は逆さになった。両足、両手は大きく開かれている。

逆さ開脚開腕斜め十字。両足は天井の梁から、両手は左右の柱に引っ張られ、Ｘの形に大きく体を開いた逆さ吊りだ。

肩までのセミロングの髪が、床に垂れた。

吊りに使用されているのは太い金属の鎖。線径は２０ミリ近くある。猛獣、それこそヒグマでも無力化可能だろう。そして体は壊れた人形のように力が抜けたまま動かない。革バンドでがっちり拘束

され、バンド自体も施錠されていた。脱出の術（すべ）がなかった。
最後に身に着けていたホルスターとナイフベルトは外されていた。
完全な全裸拘束だった。
美形の目の高さに千比呂の股倉があった。開脚されているためマンコとケツ穴もぱっくり口を開けていた。ハートマークに刈り込まれた恥毛がふるふると揺れた。

「準備完了」

美形の言葉と同時に体の制御が戻った。無駄なあがきだとは思うものの、身をよじってチェーンを引っ張る。革ベルトをまかれた足首や手首、傷を負った腰が悲鳴を上げるが、かまわず手足を動かせるだけ動かす。

「しぶといねー、まあそのくらい強気じゃないと心ベキベキへし折るのが楽しくないからね～。最後まで頑張ってね、千比呂ちゃん。あはっ！」

くそっ！こいつ絶対許さない！

と、カサカサカサという音が四方から迫ってきた。ぎょっとして周囲を見ると、電撃で全滅したはずのゴキブリが押し寄せてきていた。
そういえば、顔パックされたときにこいつは言った。電撃で消毒されたから大丈夫って。さっきから私を嬲っていたゴキブリも、ヒグマ同様ゾンビゴキブリだったのか！？
あの何万、何十万というゴキブリが襲ってくる！
けど身動きが、身動きができないーっ！

千比呂は悲鳴を上げたかったが、プライドがそれを許さなかった。

ゾンビゴキブリは柱を上って上からチェーンをたどって降りるもの、床から直接チェーンを登るものとに分かれた。左右にも均等に分かれる。さらに垂れた髪を伝って頭部へ登ってくる一団もいた。

「何をする気なのよっ！」

「聞きたい？聞きたい？ざーんねん、もう始まるからがっつりその体で味わってね。がんばれー」

肘から先、膝から先が何千何万ものゴキブリで埋まった。そこで動きが止まった。

髪を登ってきた一団は耳やあごに何匹か取りつき、さらに胴を登っておっぱいの上（千比呂主観では下だが）やへそ、さらに股間にも数十匹が上がってきた。

マンコを囲むように8匹ほどが円陣を組んだ。肛門の周囲にも4匹。

「はーい、じゃ、やれゴキカブリども！」

マンコを囲んでいたゴキブリが3匹一組が片方ずつ小陰唇をがちっと噛み、そのまま後ずさりして全開にする。上を向いた膣が引っ張られて中を晒す。余った2匹は1匹がクリトリスフードを噛んで引っ張り、残り1匹が剥けて出てきたクリトリスそのものを齧った。

肛門の周囲の4匹は、肛門の皺に四方から噛みつき、これも後ずさりして広げた。中の赤い部分がめくれて見えた。

「き！」

千比呂は短い悲鳴を上げたがくいしばる。噛まれた恥肉が痛い。涙が滲んだ。

だが、そんなことは序の口だった。

膝まで取りつき待機していたゴキブリたちが雪崩のように一斉に千比呂の股間に襲い掛かった。

膣や肛門に頭から次ぎ次ぎ潜り込んでいく。

挿入を許したことのない膣肉が奥へ奥へとぎっしりゴキブリで埋まった。脚や体の節、周囲に生えた枝条突起が胎内を浅く傷つける。どんどん押し込まれ、未使用の子宮頚部までぎゅうぎゅう詰めになった。出口を求めてほぼ処女の子宮口にゴキブリたちが頭を突っ込む。

マンコの外側を嬲っているゴキブリも増えた。小陰唇には片方１０匹がぶら下がり、クリトリスを齧るのも８匹に増えていた。尿道口にも４匹が取りつき頭をもぐりこませようとしていた。

直腸からＳ字結腸を逆行し大腸内へ侵入したゴキブリは腸壁にへばりついた便を食い漁りながら奥へ奥へと塊になって侵入していく。何匹かは腸壁の襞の間に潜り込み、腸内菌のコロニーを舐めとっていた。さらに奥へと回り込み、長い大腸をぐるっと一周して盲腸まで届きつつあった。

「あ、あああ、あああっ！　いいいいっイタイ、イタイ、イタイ！」

千比呂の腹は膣と腸に侵入した膨大なゴキブリで膨張していた。内臓を無理矢理押し広げられ犯される痛みは我慢出来なかった。

と、胎内のゴキブリたちの動きが止まった。

入れ替わりに髪の毛を伝ってまた数十匹が登ってきた。そのまま乳房へ取りつき、噛み始めた。濃いピンク色の乳首には片側４匹が十字状に取りつき、噛んだ。乳房のふもとにもぐるりと噛り付いた。

「さあーて、千比呂ちゃん、痛いよね。痛いよね～。でももっと痛くしてあげる。今ゴキカブリたちは命令待ちだよ。どこからダメにするか選ばせてあげてもいいけどー、きっと千比呂ちゃん戦いに関係ないおっぱいとかマンコからって言うと思うんだ。それ最初に潰しちゃうと視聴者さん見るのやめちゃうからー、それは最後のお楽しみねー。とゆーことで、まずは右手！」

右手の肘まで覆って停止していたゴキブリたちが、一斉に動き出し千比呂の肉を齧りだした。皮膚が裂け、そこから筋肉に潜り込み、腱を食い破り、血をすすり、肉を引き千切った。ぷぷぷぷと黒いゴマのようなものが周囲に飛び散った。ゴキブリの糞だった。千比呂の右腕は生きながら何万というゴキブリに食われ、即座に糞と化していった。

「ぎゃあああああああああああああああああぁっぁぁあぁぁあああぁぁぁぁあぎえええええええええええええええっ！！！！！！！！！」

身も世もなかった。皮膚を、皮下脂肪を、血管を、神経を、筋肉を、腱を、軟骨を齧られていく。

脳が発火するような激痛だった。

千比呂は頭を振って泣き叫んだ。よだれが、鼻水が飛び散った。小便が漏れた。ゴキブリがそれらを舐めた。千比呂の顔にも何匹ものゴキブリが移動して体液を舐めとっていった。

「うでー、あたしのうでーやめうげぇえええギャアアぐえええええええぇぇぇぇえイタイイタイイタイやめてやめていたいいたいぎゃあああああぁぁぁっぁぁっぁぁっぁぁああああぁぁぁぁぁぁいたいいやいやぐえええええぇぇぇぇぇ！」

「何言ってんのかわかんないよ。あー、骨が見えてきたね。ほらほら、とりあえずもうすぐいったん終了だよ。がーんばーれちーひーろ、ちーひーろ、あそれちーひーろ！」

数分後ゴキブリがほかの部分へと散ると、千比呂の右腕が無残な姿をさらした。手首からひじの関節までが骨になっていた。繊維のように骨から垂れているのは筋肉や血管の残骸だった。手首の革ベルトから先は喰われてはおらず、掌や指はそのままだったのが無残さに拍車をかけていた。

とはいえ神経も血管も繋がりを失ったので、形が残っているものの血の気を失い力なく骨にぶらさがっているだけだった。

千比呂は逆さに吊られながらひくひくと痙攣していた。口から泡を引いていたが、それも唇に取りついた数匹のゴキブリが舐めていた。

「なーんだ、右手1本で戦意喪失かあ。つまんないなあ。両手両足骨にされても這ってでも反撃してくると思ったのになー。買いかぶりすぎたかなー」

心底残念そうに言うと、膨張した千比呂の腹を軽く殴った。

「ぐばあああああぁぁっぁっぁっぁあああああああうげえええぁぁっぁぁっぁぁ！」

見た目は軽く殴ったようだったが、とてつもなく重いパンチだった。千比呂の腹筋が断裂した。

同時に肛門とマンコから大量のゴキブリが天に向かって噴射された。

ぶばばばばばばばば！

千比呂のおしっこやうんこも混じって噴出した。内臓がパンチの衝撃で圧縮され、中身を全部ぶちまけたのだった。膨大な量のゴキブリが噴水のように周囲にばらまかれ、体液も飛び散る。最後に膣と肛門からピンク色の物体がぼこんと飛び出した。

それは裏返しになった膣と子宮、および脱肛した直腸だった。股の間に角のようにはみ出した内臓が二本にょきっとそそり立った。

「お、いいねいいねさすが千比呂ちゃん天性のエンターティナーだね視聴者を飽きさせないね～。あーでも膣も腸もめちゃ傷だらけだね～。ゴキブリ突っ込むだけでも結構痛むもんだね～」

股間の二本の肉棒をちょんちょんと突く。千比呂がびくぴくっと動いた。

「あれ？」

美形が飛び出したピンク色の子宮を握りしめた。子宮口からぽぽぽぽんと数十匹のゴキブリが飛び出してきた。膣に押し込められたゴキブリは固い子宮口に潜り込み千比呂のほぼ処女の子袋の中まで侵していたのだった。

「あらま、子宮内にびっしり産卵してるわ。ゴキカブリども勝手してやがるなー。ま、いいか、もうゴキブリ産んだようなもんだしね、ね、千比呂ちゃん」

美形が子宮口を指で開くと中に小さな俵状の黒い物体がびっしり詰まっていた。

ゴキブリの卵鞘（らんしょう）だった。
「うーん、なんだが反応しなくなってきたなー、つまんないなー。
とりあえず最初の予定通り手足喰っちゃえ！」
残った左手、両足にたかったゴキブリたちが動き出した。
「あぎゃあああああああぁっぁっぁあぐぎゃああゲエエエぎゃあ
あああぁぁっぁぁぁぁぁぁぁぁぁははっはっはhぁぁぁっぁぁぎゃ
ややややあああややぎゃややややギャアグエエエエギャあああああぁぁ
ぁ！！！！」
千比呂がビクンビクンと跳ね、まだこんな力が残っていたのかと
いうくらいの大声で吠えた。
がちがちがち、べりべりべり、ぶぽぽぽぽぽぽ。
逆さに吊られながら、右に左に身をよじる。死の舞踏だった。
「おっ、がんばるねー千比呂ちゃん、こうじゃなきゃね。ほらほら
もうすぐ全部骨だけになるよー。踊れ踊れー。あははは！」
「ぐああああぁっぁぁああああああああああああああああああ
あああああああぁぁぁっぁっぁぁっぁぁぁあやめてゆるぢてあああ
あぁぁぁっぁっぁっぁぁぎいぎぎぎいぎぎいぎぎいぎぎいぎぎぎい
いいいぃぃぃぃあああああああああああああああああああああああ
ああぎゃああああああ！！！！！！」
口や鼻から血の混じった泡を吹き、小便を撒き散らしながら身を
よじる。脱肛した直腸からも下痢便が間欠泉のように飛び散り、自
身を汚した。

もちろんそれらの汚物はゴキブリがへばりついて嘗めていた。ご馳走だった。

股間に突き出た子宮から半透明の小さな虫がわらわらと溢れこぼれ出てきた。卵からかえったばかりのゴキブリの幼虫だった。裏返しになった膣を伝い、千比呂の股座に降りてくる。手足をかじりに行くもの、小便を舐めるもの、胸や顔まで降りてくるもの、さまざまだった。外からは見えないが、一部は卵管を通って胎内にも侵入していた。卵巣にたかる一団もあった。

黒いゴマのような糞が周囲に舞った。

しばらくしてゴキブリたちが鎖を伝って消えると、膝から先、肘から先が骨だけになった千比呂が白目をむいてぶら下がっていた。革ベルトの付いた手首、足首がそのまま食べ残されているのが生々しかった。

「熊三郎！」

待ってましたと言わんばかりにゾンビヒグマが千比呂の骨だけの左右の脛をそれぞれ片手で握った。

ばきっ！べきべきっ！

チョークを折るようにあっさり脛骨（けいこつ）と腓骨（ひこつ）がいっぺんに砕け、千比呂の体は床に落ちた。鎖にぶら下がった二つの足首が大きく揺れていた。

「乱暴だなあ熊三郎。まだ生きてんだからさ、丁寧にやろうよ。まあいいけどね。腕も」

床に落ちた千比呂の腕を取り、橈骨（とうこつ）と尺骨（しゃっこつ）を片腕ずつばきり、ぼ

きりと折った。手首は鎖につながったまま床に転がっていた。
ヒグマが膝と肘までに手足が短くなった千比呂の胴を掴んで持ち上げた。顔や胸、股間にはまだゴキブリが齧りついていた。二本の肉の筒は下を向いて体液や軟便を垂らしていた。

「だいぶ小っちゃくなったねー千比呂ちゃーん」

無防備に美形が近寄る。千比呂は美形の目をめがけて口からゴキブリを吐いた。さらに胴を掴まれたまま、短い脚で回し蹴りを放った。膝に残る脛骨の折れた先端を美形に突き立てる！

ゴキブリは確かに眼にヒットした。脛骨ものど仏を直撃した。手ごたえはあった。

が、美形は平気だった。倒れるどころか、瞬きすらしなかった。

「がんばったねー、今のが最後の抵抗だよね、だよね。でもざーんねんでした。無防備に近づいたのはわざとだよん。何やっても無駄だよー。千比呂ちゃんが万全な状態でも無理なのに、そんなスクラップな体で効くわけないじゃーん。あはははは」

千比呂の目からぼろぼろと大粒の涙が溢れた。全身の激痛よりも、絶対に勝てない相手の存在を知った心の痛みだった。それは畏怖と絶望の涙だった。

「おお、おお、やっとわかったんだね、何もかも無駄だったことに。いやー、千比呂ちゃん、理解してくれて助かるよ。えーと、これ見てる公安さんはじめ世界の公権力のみなさん、世の中には絶対に勝てないものがいるからね。勘違いして喧嘩吹っかけちゃだめだよ。せっかく千比呂ちゃんが自分を犠牲にして教えてくれたんだから、

この教訓、ちゃんと生かしてね。じゃあそろそろエンドロールも近いし、熊三郎！」

ゾンビヒグマが嗚咽を上げる千比呂の頭をパクンと一呑みにした。ぶちん！

千比呂の首から上が消えた。

ごきっ、ばきっ、ぐちゃあ。もぐもぐ、ごっくん。

千比呂の体はヒグマに握られたまま痙攣していたが、しばらくするとおさまった。

ヒグマの潰れた頭部がぼこんと引っ込んだ。代わりに肉が盛り上がり、やがて千比呂の頭になった。

表情はない。知性も感じられなかった。だがそれは、武龍千比呂の顔をしていた。

「熊三郎の脳や目がなくなっちゃたんで、代わりにもらうよ。うーんと、熊比呂（くまひろ）でいいか？　熊比呂！」

「がうっ」

合点とでもいうように熊比呂の口が吠えた。

ゴキブリに半ば喰われたヒグマのチンポと睾丸が血だまりの中からぎゅーんと戻ってきた。

熊比呂の股間に合体する。

海綿体や精巣などの柔らかい部分が食い尽くされ、ぼろ雑巾のようだった。

熊比呂は千比呂の胴を片手で持ったまま、ぼろチンポと睾丸をこよりのように捩った。胴を逆さにすると、切断された首にこよりチ

ンポをブチブチ挿した。背中を上にして奥までねじ込むと、「ぐわわわっ！」と吠えた。

股間から生えた千比呂の胴体が屹立した。

おっぱいがみるみる膨らみ、だらんと垂れて首元側へ移動した。

千比呂の白桃のようなきゅっとしまった尻は、傷ついた腰のあたりでしわが寄り、股間から突き出た2本の肉筒が合体すると、子宮と直腸がもう一度裏返って尻全体を覆った。ボロボロと落ちる黒いものは、噛り付いたゴキブリや卵鞘の残骸だった。やがて短くなった手足が胴体に吸収されるように縮んでいく。

女の胴体でありながら、それは明らかにチンポだった。

裏筋の先に、ハート形の陰毛が生えているのがアクセントだった。

「があああああ！」

熊比呂がまた叫ぶと、胴体チンポの先（元・千比呂のマンコとケツ穴が一体になったもの）から射精した。粘性の高い精液の中にまだゴキブリが混じっていた。おっぱい金玉がぶるぶる震えた。

「よしよし精通もオッケーだね。千比呂ちゃんの体はチンポに再利用しましたー。エコだよね。あはは！　これに懲りたら僕らを捕まえようだの、裁こうだのと思わないことだね。おかしなこと考えたら、熊比呂が犯すぞ。なんてねーあはははは！　ではそろそろお開き……あっ、肝心なこと言うの忘れてた！」

美形は慌てたように言うが、明らかに演技だった。

「人糞事件、皮剥ぎ事件の犯人は僕じゃないよ。ホントだよ。武龍千比呂ちゃんは、まったくの無駄足で人間終了したことになるねー。馬鹿みたいだねー。じゃ、ほんとにさよなら！」

ライブ中継は唐突に終わった。

各国サーバーに直接配信されたライブを生で見た者、最終２２５１万０８６５人。そしてこの前代未聞の処刑映像は、録画され、拡散し、数日で１０億再生を突破した。

公安がライブの発信個所を特定できたのは中継終了後２５分が経っていた。踏み込んだ特捜班が発見したものは、大量の血痕とゴキブリの糞の山。そして鎖に繋がれた人間の手首と足首だけだった。

第４話の３　武龍千比呂（★）（後書き）

他の話とリンクさせようと欲張りすぎたような気がします。熊三郎はもっと活躍（？）させるつもりだったのですが、長くなったのでいろいろカットしちゃいました。次回はもっと短くて濃度の高い、ぐっと股間に来るようなエッジのきいたエロ話にしたいです。精進します。

第5話　北山裕子（★）（前書き）

私立のお嬢様学校に通う高校1年生、北山裕子ちゃん。
ツインテールがよく似合う活発で笑顔が愛くるしいスレンダーな美少女です。クラブには所属していませんが、スポーツ万能で、特に陸上と水泳が得意。来夏のトライアスロンの大会にエントリーするよう学校からも勧められています。
同じ1年のおっとり系グラマー美少女でバイオリンが得意な川島茉奈ちゃんととても仲良し。
どこに行くのもいつも一緒でした。
通学路で、教室で、街中で、ふたりが腕を組みながら楽しそうにおしゃべりする姿がよく見かけられました。
そしてそんな二人を見る周りの人もなんだか素敵な気持ちになるのでした。
辺りには華やかで温かいオーラが満ち満ちていました。
咲き誇る美しい二輪の花。

実のところ、北山裕子は恋をしていました。
川島茉奈。なんて素敵な女の子。
他校の男の子から、茉奈と自分がよく比較されるのも知っています。
やっぱりナンバーワンは川島だよな。
そんな声を聴いたこともありますが、嫉妬はしません。
だって茉奈がサイコーなのは、当然のことじゃない。あたしの茉奈だもん！
茉奈と一緒にいるだけで、あたしはシ・ア・ワ・セ。

入学式で出会ったとたんのフォーリンラブでした。

男の子と付き合ったことがないわけではありません。実は、ややに。
早熟で奔放なところのある裕子は、中学生で既に男性経験がありました。
でも、違和感があったのです。ごつい、汚い、毛の多い、臭い男
おちんちんを入れられても、表面的な快感しか得られないことに。

裕子はすべてを理解しました。ああ、あたしは茉奈に会うために生まれてきたのだと。
男なんて、茉奈に比べれば下等動物に過ぎない。

素敵な茉奈。
きれいな茉奈。
可愛い茉奈。
優しい茉奈。

初めて茉奈の手を握った時、その細く長い指に感動したものでした。この指で優しくなでられたらと想像するだけで軽くイってしまいました。
川島家にお泊りに行った時は一緒にお風呂に入ってしまいました。茉奈は狭いからと嫌がったのですが、強引に。
更衣室で茉奈の着替えを見たことはありますが、恥ずかしがり屋の茉奈はバスタオルで絶妙に隠すのでオールヌードを見たのはこの時が初めてでした。
大きすぎず、小さすぎず、形の良いバストの先端につつましやかにピンクに染まる乳頭。
スリットがはっきり見える薄い恥毛。
裕子は幸福で鼻血が出そうでしたが、努めて平静なふりをしました。
茉奈はまったく性的には奥手で、裕子の下心にはこれっぽっちも

気が付いていません。
だがそれがいい！　なので決して下賤な気持ちで汚すわけにはいかなかったのです。
でも時折我慢できず、エッチのやり方とかを耳元で吹き込んで、真っ赤になる茉奈を楽しんだりもしましたが。

ああ、茉奈、茉奈。
私の天使。
茉奈、あなたはどうしてそんなに茉奈なの？
幸せでいささか脳が溶けてしまったような気がする裕子でした。

しかしそれも、川島茉奈が行方不明になるまでの、短い幸福でありました……。

第5話　北山裕子（★）

（あれ……　ここは……）

意識を取り戻したものの、北山裕子（きたやまゆうこ）はまだ朦朧としていた。やがて体のあちこちが痛みで悲鳴を上げだした。

痛みとともに記憶が戻ってくる。

全裸だった。腕とツインテールを天井から縛られぶら下がっていた。腕や頭だけではなく、顔も胸や腹、足も痛い。胸や股間にも鈍痛があった。

（そうだ、待ち伏せされて……）

裕子は、思い出した。

同級生にして最愛の美少女・川島茉奈（かわしままな）が行方不明になり不安で張り裂けそうだった裕子の心は、茉奈の死が確実と知った時、壊れた。

喰べられた、という話は信じられなかったが、その後髪の毛ごと剥がされた頭皮が見つかり、茉奈の死に疑問の余地はなくなった。

裕子は告別式で棺に納められた髪を見て号泣した。

それはたしかに何度もブラッシングをし、匂いをかいだ茉奈のものだった。

その後、女性捜査官の惨殺記録（スナッフビデオ）を見た。ネットで超話題（バズって）になって拡散されたものだ。茉奈が見たのはかなりマイルドに編集されたバージョンだったが、ゴキブリや熊はさすがにCG合成だろうとは思

ったものの、じわじわと美しい身体が破壊されていく過程は、茉奈もこんな運命を辿ったのではないかと思わせる不思議なリアリティがあった。

裕子の心は闇に沈んだ。

家出した。

昼夜を問わず繁華街を徘徊し、男に抱かれた。

美少女の裕子は相手に不自由しなかった。

特定の誰かではなく、いきずりに任せた。誰かと精神（こころ）の繋がりを持つのは嫌だった。見知らぬ何十人もの男と寝た。

よだれと汗と精液を体中に浸み込ませたかった。避妊はしなかった。子宮を汚（けが）してほしかった。

執拗にプライベートや連絡先を尋ねる男もいたが、相手がシャワーに入っている間に財布から金を盗んでホテルから逃げた。

裕子の内面（インナーワールド）と係わって良いのは茉奈だけだった。

同じ場所に二度は行かずに転々と男を漁った。

援交に縄張りがあることは知らなかった。

ヤバい集団（れんちゅう）のテリトリーを知らず知らずのうちに裕子は侵していた。

今日声を掛けてきた中年男は、囮だった。

裕子は男のお気に入りというホテルに向かった。

数人の男女が待ち構えていた。

「ちーっす、北山裕子ちゃん。げへへへ」

そこは鉄フレームのアングルが簡易なジャングルジムのごとくキ

ユーブ状に組まれたコンクリ仕上げのＳＭ仕様の部屋だった。
フレームを利用して天井に、床に、何台ものビデオカメラが取り付けられていた。
顔を正面のカメラに無理やり向けられ自己紹介を要求された。
笑顔が足りない、声が小さいと派手なメイクの女に顔を往復ビンタされ鼻血を垂らした。
着衣をすべてはぎとられ、鎖で手足を縛られた。
滑車を使って鎖を引き上げられ、大の字に手足を広げて立たされた。
ツインテールを吊られ、顔を上げたままにされた。
金髪の男の指でマンコを全開にされカメラで舐めまわすように接写された。
濡れてもいない膣にいきなりぶっといチンポをぶち込まれ、別の男にバックからケツ穴も犯された。
二穴を同時に蹂躙される苦痛に絶叫した。
声がうるさいと女に顔を、胸を殴られた。血と涙とよだれでまみれ、アングルにぶら下がったまま失神した。

そして今だ。

気絶しているうちにさらに犯されたのだろう。マンコとケツ穴から白濁液がどっぷり垂れている感触がある。
口に精液の味が広がっていた。
体中の痛みは、気絶している間も殴られ続けたからか。

バシャッ！

褐色の女にバケツで頭から水をぶっかけられた。

「てめ、起きたんならいつまでもボケっとしてんじゃねーよ！」

「がほっ、がっ、げほっ」

むせながら裕子は目を見開いた。意識がややはっきりしたが、周りがよく見えない。

瞼が腫れて、焦点が合いにくいのだった。

女が二人。男が三人。全員裸で部屋にいるのが分かった。

男のうちの一人はホテルまで一緒だった中年男だ。残りはみな若い。女は濃い化粧の茶髪と、ビキニの焼け跡がある褐色の二人、若い男は腕に複雑なタトゥーを彫っているのと、短い金髪の二人だった

「これからが本番っすよ。げへへへ」

デカいチンポを自慢するように腰をふりふりしながら、両腕に紋章のようなタトゥーを入れた若い男が下品に笑う。

両耳と唇にピアスをじゃらじゃら付けている。最初に乾いたマンコにねじ込んできた奴だ。

「ああ、でももったいないなあ。こいつ可愛いし、マンコの具合もいい。ほんとに解体（バラ）すのか」

「げへへへ。ビビってんすかトシ。そのために呼ばれたんっす」

「わかってるよユージ。前金もらったしな」

「まあヤリ足りなくってもったいないってのは同意するっすけど」

「だろ？　おっちゃんさっき一発だけだったけど、また俺らで使っちゃっていいか？」

「俺は連発無理だ、まかせるわ。あっちで休憩してるからバラし始める前に声かけてくれや。あ、ビデオ忘れんなよ」

「うーっす」

中年男はドアを開けて出て行った。このＳＭ部屋とは別に普通のベッドルームがあるのだ。

（そっか、こいつらの縄張り荒らしたから、ヤキ入れられちゃうのか。殺されるのかなあたし。茉奈みたいに）

裕子はぞくっとした。マンコがいつの間にかしっとり濡れていた。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おっちゃん、おっちゃん」

「ううん、うむ？　……いつの間にかぐっすり眠っていたな。そろそろか？」

起こしに来たのはタトゥーとピアスの若い男、ユージだ。

「あんだけでかい声上げてるのにさすが大物っすね。俺らそこそこヤったんで、後はおっちゃんが満足してくれれば、早速解体はじめるっす」

「ビデオはちゃんと撮れてるか？」

「さっきＰＣでプレビューしたけど、まあまあっす」

「ふん、撮れてりゃいいや。編集は組に上手いのがいるからな……」

「ぶぶっ、くっさ。ひでえな。換気して、湯で洗い流せ」

ＳＭ部屋にはプレイ用に排水設備とシャワーホースが備え付けられていた。

裕子は鎖を外して床に転がされ、精液とゲロと糞尿まみれになっていた。
言葉にならないうめき声を上げながらひくひくと震えていた。
全身が白く、血の気がない。かなり危険な状態だった。

「ケツ穴に4発ぶち込んだらウンコ漏らしやがって、コノヤローって腹パンしたら更にゲロとしょんべんまき散らしてこっちにもかかっちまって、腹立つから俺のケツ穴にキスさせたまま一本糞喰らわせてやったっす」
「……お前らよく平気だな」

中年男は若い女二人、褐色のカナと、濃い化粧のヨーコに向かってあきれて言った。

「ウンコやゲロぐらいでビビッててんじゃないよおっさん。あっし生理(メンスジェル)の血喰わしたこともあんぜ」
「だいたいこれからおっぱいもマンコもえぐり取るってのによ。かわいいもんじゃんスカトロぐらい」
「そりゃそうか」
「ほい、まあまあきれいになったっす」
「腹ン中もきれいにしたか？　ウンコ喰わしたんだろ？」
「げへへへ。無理やりごっくんさせたんだけどしばらくしたらリバースしやがったんで口にホース突っ込んで全開にしたっす。したらケツ穴から喰わしたのも自分のも全部噴射して、人間噴水って大笑いしたっす。だから腹ン中は奇麗なもんっす」
「それでこのあり様か……。　これ静脈注射(じょうちゅう)しとけ」
「こりゃ噂のアレっすか？」
「そうだ。中毒性(ヤバ)が高すぎて素人(かたぎ)には使えん。間違っても自分(てめえ)に射つなよ」
「そんなドン臭(くせ)えことしねえっす」

ユージが裕子の太ももに注射した。

湯で洗い流された裕子の肌には無数の切り傷があった。どれも浅いものだが、鋭利な刃物でつけられたものだ。トシの仕業だろう。ユージのつての元精肉屋だ。中学の同級らしい。

いくつかは、マンコだのビッチだのメスブタだの、カタカナ文字になっていた。

毛がむしられ鳥肌になった恥丘（ドテ）に正の字が3つ掘られていた。

こいつら、この短い間に15発ぶちこんだのか。

…若いっていいな。

中年男の偽らざる感想であった。

血の気が引いて白くなっていた肌に赤みが差すと、裕子があはあと舌を出して喘ぎ始めた。縮こまっていた乳首がぐぐぐと盛り上がってふるふると震えだした。腰をもぞもぞ振り始める。

「お、効いてきたな」

中年男は裕子の太腿を掴むとぐいと広げた。股間がむき出しになった。

陰唇が充血して腫れ、クリトリスが固く長く尖っていた。

マンコ全体が透明な液体で濡れそぼり、だらだらとコンクリの床に糸を引いていた。

「出来上がってるな」

中年男はチンポに手をあてがい、腰を一気に進めた。蕩けた穴にチンポがぶすうっと突き刺さり、白濁した液が隙間からどっぷり溢れた。

中だしされた精液だけではない。裕子の本気汁が大半だった。

「おげへっ！」

裕子が美少女らしからぬ悲鳴を上げた。

弓なりにのけぞって舌を突き出し白目を剥いた。見事なアヘ顔だ。

中年男は腰をガンガン裕子に打ち付けながら、ミサイルのように膨張した乳首を指で押し潰した。

「あぎゃ、はぎゃ、ぎゃわっわわわわ！！！」

「こいつ、声でかいな」

「げへへへ。だからさっきおっちゃんよく眠れるなーって」

「そうか。お、マンコがうねうねしてきた。ちんぽチュウチュウ吸いやがる。おほっやべっ」

裕子の膣肉がそれ自体独立した動物のように蠢き、チンポを波のように吸い上げる。

たまらず、中年男は射精した。

「おおおっ」

「あがっほっほっうっふうふうう、はあああああ！」

裕子も絶頂した。

「おっちゃん、早いっす。げへへへ」

「ほっといてくれ」

薬でブーストされているとはいえ、素晴らしい名器（まんこ）だった。

たしかに惜しい。が、既にかなりの金を使っている。この４人を雇うのも、ヨーコからシマ荒らしの情報を受けてから、この少女北山裕子の個人情報を調べるのにもそれなりの時間と金がかかった。

大体、例の女性捜査官ビデオ以降、裏ＳＭビデオ業界もニーズが惨殺系に極振りしちゃったのがいかん。

殺しても足がつかない人間なんてそうそういない。留学生を騙して何本かお茶を濁したが、顧客の要望は日本人。だがホントに誘拐したりすれば、裏ビデオ製作よりそれ自体が相当なリスクである。

そんなところにとびきりの美少女が向こうから飛び込んできたのだ。

お嬢様学校で知られる○○女子学園。噂の美少女の情報を調べたら本物だった。

なんでそんなお嬢様が売春しているのかは知らないが、この少女のスナッフビデオなら、高額で売りさばくことが出来そうだ。

寝かせたＸ字型の磔台に拘束された裕子の前にトシが立った。両足を広げた間だ。細い柳刃包丁を持っている。

シナリオはヨーコが書いた。情け容赦のないえぐい台本だ。女の恨みは怖い。

裕子は舌を出してえへえへと笑っていた。薬の浸食で脳から知性が奪われたようだった。

それは今から起きることを思えば幸せかもしれなかった。

「じゃ、マンコから」

包丁が裕子の鼠蹊部に深く刺し込まれた。

「うぎゃ！！！！！！　うあああぎゃぎゃぁあああ！！！」

裕子がのけぞるが、革ベルトで台に縛られた身体はびくとも動かない。

動脈を避けつつトシはマンコの周囲にぐるりと包丁を入れた。さらに左手を恥丘に添えて、クリトリスの根元を削ぐように切る。切り出されたマンコを引き出しながら、尿管や結合組織をぶつぶつと切り離す。そのたびに裕子は絶叫するが、トシはかまわずさくさく切り出していった。

「カナ、まな板」

「ほいきた」

まな板にトシが載せたピンク色の肉塊は、裕子の外性器から膣、子宮と卵巣までの一揃いだった。切り出されてもまだびくびくと板の上で蠢いていた。

「うわー、こいつのマンコやらしー」

ヨーコが笑いながらまな板を上から横から覗き込んだ。

「ヨーコ、ちゃんとビデオ撮っとけよ。中開くぜ」

膣と子宮を縦に切り、開きにした。内部のヒダヒダが露わになった。

白濁液がべっとりまとわりついている。

子宮を裏返すと、内膜に赤い斑点があった。

「襞がうねうね動いて精液を飲み込もうとしてるわ。やらし―」
「うわー妊娠してるよこいつ。この赤いの着床だわ。うわー」
「えー、さっきのっすか？」
「そんなに早く受精するわけないじゃんボケ。このサイズだと、2週間ぐらい前のじゃないかな」

中年男が横のテーブルの上でホットプレートを予熱していた。
トシは膣と子宮は短冊に、小陰唇はそぎ切りにし、クリトリスは根からえぐりだして真ん中で左右に切った。卵巣は半ばまで包丁を入れ開きにした。残った外性器はアワビの刺身のように横にスライスした。
5人が我先にと割り箸でホットプレートに運ぶ。
じゅーっと言う音とともに肉の焼ける良いにおいがあたりに満ちた。膣にへばりついた精液がブクブクと泡立ちながら固まる。
「軽く炙るぐらいでいいぜ。梅塩かポン酢が合うと思う」と元精肉屋のトシがアドバイスした。

「うまっ」
「マンコってもっとコリコリしてるのかと思ったけど、柔らかくってジューシーね」
「お前のも喰ってやろうか？」
「ふざけんな。てめえのちんこ串ぶっさしてフランクフルトにスンぞ」
「ビラは噛み応えあるな」
「まあ、皮膚っすからね」
「子宮も卵巣も、卵の味はしないわね」
「……鶏じゃないし」
「次おっぱいか。マンコえぐられて、おっぱい取られたら、この娘

もう女の子じゃないよね」
「それでいいんだよ。女性（おんな）終了刑なんだから」

トシはパンパンに尖った左の乳首を摘んでおっぱいをやや持ち上げると包丁を下乳の根元に入れた。

じゅっ、じゅっ、じゅっ。

包丁を前後に動かす小気味よい音とともに裕子のおっぱいが胸から削がれていく。

マンコ切除以来裕子の悲鳴はすでにＢＧＭと化している。トシは絶叫を気にもせず、鼻歌交じりに切り取った。

「まな板」
「ほいよ」

裕子の左乳がまな板に載せられた。平たくはならず半球状を維持している。若さだった。

「開くぜ」

ピンクの乳首からまっすぐ包丁を入れ、ザクザク二等分した。切断面を開くとオレンジ色の脂肪と紫色の線状組織が見えた。

「乳腺多いわね。ほぼ脂肪だし。カロリー高そう」
「コロみたいでうまそうじゃないか」
「コロ？」
「クジラの脂肪だ。知らんのか？」
「……知らない……」
「そうか。世代だなあ。まあいいや、これは薄く切ってだし醤油で

煮てみてくれ」

トシは半月型のシート状に薄ーくカットし、ヨーコがホットプレートに載せてだし醤油とみりんで甘辛く煮つける。

「あまり煮ると脂肪が全部融けて筋ばっかりになるぞ。軽く火が通ったぐらいでいいんじゃないか」

「ん、じゃもういいか、試食してみよう」

「う……やっぱ固い……」

「肉じゃないっすこれ。かといって脂身でもないっす」

「乳腺はプチプチして食感は海ブドウだな。でも正直言って……」

「……まずい……」

裕子の残った左乳のスライスはそのままごみ袋に放り込んだ。

トシはとりあえず右乳も切除し、カメラに向かって切断面を見せたりしたが、これもそのままごみ袋に捨てた。

「気を取り直して、今度は旨いと思うぜ」

トシは裕子の左足を持ち上げると、ひざ裏から尻にかけて包丁を入れ、腿の後ろ半分を大きく切り出した。ハムストリングスだ。

どんとまな板に載せると、皮下脂肪ごと皮膚を削ぎ、適当な大きさのブロック肉に切り分ける。

さらに1センチ厚にスライスし、ステーキ肉にカットした。わざわざ肥満体に育てる牛のように霜降りではないが、ピンク色のきれいな赤身肉だ。女子高生のモモ赤身ステーキ。

「おいしそー！　焼いて焼いて」

軽く塩胡椒しホットプレートで両面を焼く。上質な食材の香りが

部屋中にたちこめた。

「うまっ！」

「これはヤバいっす。柔らかくてジューシーっす」

「人間って雑食だから肉は臭いとか言ってなかったっけ？」

「おお、牛よりは豚寄りのようにも思うが、豚とも違うな。馬肉にも似ているが」

「右足もあるんでしょ。食べきれないわ」

「クーラーボックスがあるだろ。あれでアジトに持って帰って冷凍保存しとけば保つ」

「足だけじゃないよ。量は少ないが肩ロースもバラもハラミも取れるぜ」

「しばらく焼肉パーティ三昧ね。あははは！」

「内臓もあるっす」

「内臓（ホルモン）は感染症のリスクがあるからやめといたほうがいい」

「そんなもんなんすか？　さっきマンコ喰ったのはいいっすか？」

「ありゃビデオ演出上仕方ない。おっぱいも一応は喰ったしな」

中年男はふと、股間に違和感を感じた。チンポがいつの間にか勃起していた。

女子高生を解体して喰いながら勃起するのか。俺も鬼畜だなあ。

苦笑いした。

「この女にも自分のステーキ喰わしてやろうよ。最後のばんさんじゃん」

「おもしれーっす、そら、喰え。げへへへ」

ぎゃあぎゃあ泣きわめいている裕子の口に無理やりユージがモモステーキを突っ込んだ。

「痛てっ」

暴れる裕子に指を噛まれた。

「どんくさっ、ユージ」

「ざけんなこいつ。お仕置きっす」

ユージはトシの道具箱から骨切り用の鋏を取り出した。柄が長く、鋏がやや婉曲している。枝切り鋏と同じような形だ。

裕子の右の人差し指を掴んで持ち上げた。

ばっちん。

人差し指が根元から切断された。

「ぎゃあああああぎゅぐうぐぐぎゅあああああぎゅあああぁぁぁぁっぁぁぁぁあああああぁぁぁ！！！」

「げへへへ！　ついでだ全部切ってやるっす」

ばっちん。ばっちん。ばっちん。

裕子の１０本の指が全て切り取られるのにさほどの時間はかからなかった。

「どら〇もんできあがりっす」

「あはははは！」

若者４人は大笑いしたが、中年男は今イチ何が面白いのか笑いどころが掴めなかった。

トシもユージも勃起していた。中年男の倍くらいある長いチンコ

が天を向いてぶらぶらしていた。
こいつらも鬼畜だな。

トシは右腿をモモステーキ肉にスライスし、さらに肩甲骨付近に包丁を入れ背中の肉（ロース）を切り取った。さらに脇下の肉（三角バラ）、内臓を気付けないようにして腹筋（バラ）を切り出していく。

「さすが手際がいいな」

ステーキで腹いっぱいになり、もっぱら解体作業を見ているだけになった中年男が感想を漏らした。

「なんかその、……むらむらしてきたな」
「うふふ、おっさん、やっちゃう？」
「いいのか？　料金外だぞ」
「いいよ。あたしもなんか濡れてきちゃってさ……」
「ええっヨーコそうなの？　じゃあ俺はカナと」
「なによそれ、ついでみたいに。まあいいわ。あたいもなんかシたくなっちゃってるし」

ヨーコとカナは鉄のポールを握って尻を突き出した。中年男とトシが背後から合体した。立ちバックだ。たちまちヨーコとカナが喘ぎ声を上げる。

「ちょ、お前らなんだよ。俺だけ真面目に仕事してアホみたいじゃんよ」

そう言いながらもトシは背後から裕子の頭を持ち上げると、あごの下に包丁を入れた。そのまま、ざくざくと顔をはぎ取る。頬肉や耳、鼻の軟骨も付いたままになるよう厚めに包丁を頭頂部まで滑ら

せた。
今度はうなじに包丁を入れ、頭蓋骨に沿って髪の毛ごと皮を切る。頭頂部で前からの切りこみと繋がり、そのままマスクを脱がすように裕子の顔をはぎ取った。
その肉の面を自分で被った。
裕子の方が顔が小さいので、3分の2くらいしか頭が入らず、顎の下にトシの口があった。

「裕子ちゃんに変身〜」
「おっチラガーみたいだな。あはは！」

中年男が腰を振りながら笑う。

「ち、チラガーって、あはっ。な、なに？」

バックから突かれながらヨーコが尋ねた。

「豚の顔だ。沖縄行くと顔丸ごと市場で売ってる。旨いぞ。おっ、マンコ絞まるっ」
「あっ、だって、顔食べられるって思ったら、あっ」
「とんだ変態だなっ。気持ちいいかヨーコ。それっ、それっ」
「あっ、そこいいっ、あっ、もっと、乱暴にっ、ああっ」

トシは裕子の顔をかぶったまま、磔台の前に回った。
顔を失った裕子の頭は血まみれの骸骨だった。ぞろりと歯がむき出しになり、瞼のない眼球が血走ってぎょろぎょろしていた。舌は残っているが顎を動かす筋肉がなくなったためで口が開いたままになり、ごーっ、ごーっという呼吸音だけが悲鳴の代わりに漏れていた。

尻肉とマンコを切り取られた股間には肛門だけが元の姿で残っていた。

「ケツ穴かあ。まあいいや穴に違いないし。じゃ、裕子のケツ穴、裕子が犯しちゃいまーす」

ふざけながらトシがバキバキの勃起ちんぽを裕子のケツ穴に突き刺した。

「うーん、緩いなあ」

膣と繋がっている括約筋が切り離されたうえ、死にかけている裕子の肛門は締まりがなかった。トシはマンコがあった穴から手を突っ込んで直腸の上からチンポを握りしめた。そのまましこし前後に擦る。

「おほっ、こりゃ腸オナホール。ぬるぬるして気持ちいいっ!!!! 裕子いっちゃう!」

トシはふざけながら腸に射精した。

が、まだ物足りなかった。

顎にチンコを突っ込んだみたが頬がないので舌が当たるだけだった。

大きく開いた鼻の孔にも突っ込んでみた。脳に当たっただけだった。

眼球を引き出して眼窩に突っ込んでみた。漫画で見たことあるが、別に気持ちよくはなかった。

イライラしてきて、のどを深く切って食道を引き出した。

これに突っ込んだら、反射で嘔吐の蠕動運動が起こりチョー気持ちよかった。たまらず射精した。

「それ面白そうっすね。げへへへ」

トシが裕子を内臓姦している間にカナに5発出したユージが近寄ってきた。でかいチンポは勃起が収まる気配がない。

ユージが代わって食道を犯すと、反射でトシの精液が吐きだされた。

「あはは、ゲロ精液！　あはは！！」

裕子の顔をかぶったトシが大笑いした。ユージも笑いながら食道に射精した。

中年男はヨーコを犯し続けながら、気が付いた。

こりゃ薬のせいだ。肉を生焼けで食ったからか……。

まあいいか直接射ったわけじゃないし。

わずかでも摂取すれば性欲中枢が暴走し廃人一直線の麻薬（ヤク）であるのは男も知っていたはずだが、知性を侵食されたせいでお気楽であった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

明け方が近づいた。

5人はワンボックスカーでとある高速道路の近くに来ていた。

かなり運転が怪しかったが、酒が抜けていないせいだと中年男は思っていた。

ワンボックスには大きいクーラーボックスと、大きなごみ袋がいくつか積まれていた。
5人はごみ袋を担いで、高速を横断する歩道橋の上に来た。

この辺りはインターチェンジが近く渋滞することが多い。ただ、明け方は比較的すいているのでスピードが上げられる。この時間を狙って走る大型車が多く、事故多発エリアとしても有名だった。
今も歩道橋の下を何台ものトラックやコンテナ車、トレーラーなどが爆音を上げ走っていた。

「ヨーコ、ビデオ頼むぜ。まずは小さいのから、やっ」

ごみ袋の中身を高速道路にぶちまけた。
小さな肉片が大量に巻かれた。
何台もの大型車の太いタイヤに挽かれすりつぶされていく。

そして大きな袋から赤黒い人の形をしたものを引きずりだし、歩道橋から半身を乗り出させた。
肋骨が見えそうなまでえぐられた胸が、上下していた。

「じゃ、裕子ちゃんさよならね。せーのっ」

突き落とした。

直後、走ってきたトレーラーに激突し、ばらばらになった。
後続の車に挽かれ、引きずられ、あっという間にミンチになった。
そこまでビデオに撮ると、5人は退散した。

アジトへの帰り道、ワンボックスカーはガードレールに激突、5

人とも即死した。
警察官が積んであったクーラーボックスを開けると、中からツインテールの人の顔が出てきて腰を抜かした。

第5話　北山裕子（★）（後書き）

またまた第1話からのスピンオフなお話ですが、北山裕子の話は設定だけは作っていたので前々から書こうと思っていました。

茉奈と裕子の（ハッピーだったころの）百合百合なエピソードは、もう少し入れてもよかったんですが、この「かきしの」向きではないと思いあっさりカットしました。

今回人外は登場しませんでしたが、人体破壊を異能に頼りすぎるのもどうかなあという反省でもあります。その分描写をリアル寄りにしてみましたが、いかがでしたでしょうか？

次はがっつりＮＴＲ（真）展開の予定です。

第６話の１　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生（前書き）

一ノ瀬春雄４５歳。
彼は充実していました。
愛する家族と別れての南米赴任は確かに寂しいけれど、会社が自分を認めてくれた証左でもありました。
なんといっても現地との合弁会社の総経理です。事実上の社長でした。
この国は役人の裁量の範囲が広く、取引条件や諸手続きなどは胸先三寸でかなり厄介、非合法すれすれの事案も多くありましたが、春雄は着実にこなしていました。
やがて春雄の理解者が増え、時にホームパーティに呼ばれることもありました。
もちろん春雄は参加しました。
地元の有力者のホームパーティには、別の有力者もよく来ます。
いったんファミリーとして認められると一気に展望が開けるのも新興国ならでは。
こうして春雄の現地での人脈は広がり、成果を出していきました。

一ノ瀬春雄には美しい妻のほか、二人の子供がいました。
妻、一ノ瀬香奈枝３８歳。
長女、一ノ瀬亜由美１４歳。
長男、一ノ瀬秋生１４歳。
亜由美と秋生は二卵性双生児でした。香奈枝に似て、端正な顔立ちです。
亜由美と一緒にいると、ちょくちょく姉妹に間違われるのが秋生は気に入らないのですが。
最近では、もともと若く見える香奈枝と合わせて三姉妹のようで

もあります。
ますます秋生は「俺は男だ！」と、納得できない思いを強めるのでした。

亜由美と秋生が１１歳、小学生の時から海外赴任となり、最初の２年は盆暮れには帰国していたのです　が、今年は事業が佳境に入り全く帰国できません。
ネット経由でお正月や子供たちの誕生日をお祝いするのが精一杯でした。
時差があるのでライブとはいかず、映像データを「ギガふぁいる便」で送受信する形でした。

そして１０月。日本ではハロウィンに向けて盛り上がろうとしている時期ですが、春雄がいるこの国は治安が良いとは言えず、仮装して他人の家に勝手に乗り込んだら子どもといえど射殺されてしまいそうなこともあり、おもちゃ屋さんがそれっぽく飾り付けているくらいでした。季節もちょうど真逆で春から夏に向かう途中です。

だからというわけでもないのでしょうが、ある日届いたメールのタイトルに春雄は最初ピンときませんでした。

第6話の1　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生

一ノ瀬春雄（いちのせはるお）は、泣いた。

なぜ最初にファイルが届いたときにすぐに中身を見なかったのか。

開封が2日遅れた。

致命的だった。

ファイル通知メールは１０通に達していた。

「ギガふぁいる便」はメールで自分あてのファイルがサーバーにアップされた旨が届く。記載されたＵＲＬをクリックして、ブラウザを使ってダウンロードする仕組みだ。

だから、メールだけではファイルの中身はわからない。

また悪い点でもあるし、良い点でもあるのだが、「ギガふぁいる便」のサイト管理者はアップロードされたファイルを一切チェックしない（と公式に謳っている）。悪意があればウィルスさえも送りつけることが出来る。逆に、内容が運営を含め第三者に漏れることは決してない。

高い匿名性を保って個人間（Ｐｔｏ Ｐ）でファイル転送が出来る仕組みだった。

１通目のメールタイトルは、

「どきどき☆ハロウィン体験第一弾！即落ち☆トリック・オア・トリート！」

だった。

送信元は「ギガふぁいる便」の通知専用アドレスだ。

会員登録していると勝手にメルマガを送ってくるので（運営の収

入源だから仕方がない）、タイトルを見てその類だろうと思い込んだのだ。

家族からのビデオレターなら「××××年××月××日　お父さんお誕生日おめでとう」のようなものであるのが慣例だからだ。

上半期決算作業が佳境だったこともあった。

3年目になって多少ましになってきたが、国際会計基準に適合する財務諸表をまとめるのがただでさえ大変なうえに、在外子会社として連結手続するため時間も限られる。現地通貨ではなくドル建てのため為替換算も複雑だ。年二回、春雄にとって最も負荷の高い数日だ。

だから、読み飛ばしていたのだ。

と言うのは言い訳に過ぎない。

春雄は頭を掻き毟って涙する。

最初のメールで速やかにファイルをダウンロードしていたら、何が起きているかを早く知っていたら、家族を救えたかも知れない。

―実際にはその時点で既に手遅れであったのだが…。

メールのタイムスタンプはおよそ5時間程度の間隔（インターバル）だった。

2通目「どきどき☆ハロウィン体験第二弾！熟女もいいけどＪＣもね☆おねだりしちゃうの！」

3通目「どきどき☆ハロウィン体験第三弾！あつあつ親子丼めしあがれ☆おかわりもあるよ！」

4通目「どきどき☆ハロウィン体験第四弾！コスプレエッチも楽

しいね☆おねえちゃん！」

５通目「どきどき☆ハロウィン体験第五弾！ごめんねおとうさん☆ヤミツキになっちゃう！」

６通目「どきどき☆ハロウィン体験第六弾！オトコの娘になりました☆メスイキスイッチオン！」

７通目「どきどき☆ハロウィン体験第七弾！ふたたび親子丼☆３Ｐデスマッチ！」

８通目「どきどき☆ハロウィン体験第八弾！肉祭り！☆堕肉を屠畜します！」

９通目「どきどき☆ハロウィン体験第九弾！肉祭り！☆フランクフルトおいしいね！」

１０通目「どきどき☆ハロウィン体験第十弾！肉祭り！☆これでおしまいさようなら」

決算処理が終わり、深夜、ホテルに戻ってＰＣのメーラーを開いて、溜まった「ギガふぁいる便」からのメールに春雄は不安を感じた。

どれもアダルト業者っぽい軽薄で下ネタなファイル名だが、よく見れば、ファイルの送信人はたしかに自宅のＰＣアドレスからだ。

家族からだとしたら、これはなんの冗談だ？

即座に１０通目（さいご）のメールのリンクからダウンロードを試みた。

エラーが出た。

『送信者が×××の視聴確認を求めています。』

×××は9通目のＵＲＬだった。

9通目は同じように8通目のＵＲＬのダウンロードを求めていた。

つまり、順番通りダウンロードし再生しないとファイルをゲットできない。

春雄は1通目のファイルをダウンロードした。

ビデオファイルだった。かなり重い。

ダウンロードに３０分ほどかかった。

（これ、全部ダウンロードしたら何時間分あるんだ…？）

ようやくファイルが落ち、1本目の再生が始まった。

※※※※※※※※

「トリック・オア・トリート！」

1本目のビデオは学生服姿の少年の、明るい笑顔のアップから始まった。整った、優しく安心感のある顔だちだ。だが、春雄の知らない少年だ。

「こんにちは、いやこんばんは、かな？　一ノ瀬春雄さん。ハロウィンにはちょっと早いけど、みんなでパーティーをすることになったんだ。春雄さんだけ参加できないのはかわいそうなので、こうしてビデオを送ったのでそっちで見て楽しんでね。実はもうかなり盛

り上がっているので、さっそく会場にカメラを向けるね」

少年がフレーム外に出ると画面が揺れて動き出した。

春雄の自宅の廊下だ。玄関から奥のリビングへカメラを移動しているのだ。

春雄の見覚えのない少年が、春雄の家にいる。亜由美（あゆみ）か秋生（あきお）の友達なのかもしれない。だが、少年が着ている制服は、入学式をはじめビデオで何度も見た子供らの中学校の物ではなかった。

第一、ビデオレターの冒頭で他人が説明するってどういうことだ？

亜由美か秋生がナレーションするのが普通だろう。

までよ？　ハロウィンパーティーとか言ってたな。

ははあ、仮装してドッキリ狙いというわけか。狼男やゾンビメイクでもしているのかな。リビングのドアを開けた途端にガオーとかだろうな。

ああそれでアダルト業者みたいなファイル名にしたのか。それ込みでドッキリということか。

子供たちの知恵じゃない。きっと香奈枝（かなえ）のいたずらだな。

そんなことしなくても、浮気なんかしてないよ。ばかだな香奈枝。

そういうことなら、せっかくなのでリアクションしてやるか。

春雄は身構えた。

画面の向こうでリビングのドアが開いた。

春雄は心底驚いた。

画面いっぱいに、オレンジ色の丸いかぼちゃの化け物が口を開いてこっちを見ていた。

いや、それに驚いたのではない。それが女の尻だったからだ。

裸の尻をキャンバスにしてかぼちゃの化け物（ジャック・オ・ランタン）が描かれていた。
その尻を思い切りカメラに突きだしている。
女の上半身は尻に隠れて見えない。
が、ジャックの大きく開いた口の間、ペイントされていない肌色の縦溝の中でケツ穴とマンコが丸見えだった。
恥じらいのかけらもない姿勢だった。
やや弛みはあるが、量感のある尻肉。盛り上がった茶色いケツ穴。よじれて少し色素が沈着したぼってりしたビラビラ。その周りを覆う黒々としたマン毛。
頭隠してマンコ隠さず。

そして春雄はこの尻をよく知っていた。
バックから責めたこともある。
あまり見ないでお尻大きいからと恥ずかしがりながらあえいだ、愛する妻。
香奈枝の尻だった。

左右から手が伸びて、香奈枝の尻肉をぐいと割った。
ケツ穴とマンコが開いた。どちらの肉穴からもとろりとした液が漏れた。濡れている。

「ああんっ」

香奈枝が甘い声を上げた。

カメラが引くと、香奈枝の左右に二人の女が立っていた。
一人は黒髪の日本人形のようにスレンダーな少女。もう一人は栗毛で色白のグラマラスな少女だ。
どちらも同じセーラー服を着ている。背格好は亜由美と同じくら

いだが、制服は違うものだった。
そんな美少女二人が香奈枝の尻を左右にばっくり広げて支えていた。
恥ずかしい行為を美少女たちが屈託ない笑顔で行っていた。
なんだこれは！？
春雄は息が苦しくなった。
カメラが固定された。さっきの少年がフレームインしてくる。
ぺちぺちと尻のかぼちゃを叩いて、股倉をさすった。
「あはん」
甘い声が溢れた。香奈枝の声だった。
「さてさて、今はレベル3だからこんなものだけど、せっかくのハロウィンパーティーなので派手に行ってみようかな。その前に、もうわかっていると思うけど、ご対面いってみよー！」
少年の声に、二人の美少女が裸女をくるりと正面に向かせた。
他の誰でもない。間違いなく香奈枝だった。
上気した顔をしている。
さらに香奈枝の両腕を左右から肩に、両ひざをそれぞれ外側の肘に掛けてぐいと持ち上げた。
空中M字開脚だ。
美少女二人は見た目とは違ってかなりの筋力がある。
と冷静に観察している場合ではない。

全裸M字の香奈枝の腹にはゾンビが、やや垂れ気味のおっぱいには蝙蝠や蜘蛛が描かれていた。

「レベル１０！」

三人の傍らに立った少年がそう言ったとたん、香奈枝の背筋がびっくぅと感電したように伸びた。

マンコからの愛液がビデオ越しにもわかるくらい一気に増量、ぼたぼたぼたと床に垂れた。

左右の少女が開いている手で香奈枝の脇腹を撫でた。細い指先で。

ほんの少し、小鳥が羽ばたくように。

「うひゃはははははうひゃあああああはははははははははあああああぁぁぁぁぁぁぁ！！！！！」

香奈枝が吠えた。

股間から愛液とも小便ともつかぬ大量の液体を噴射し、たちまちリビングに水たまりができた。

空中でエビ反りになって足をじたばたさせた。

暴れる香奈枝をものともせず、二人の美少女は微笑みながら脇腹をくすぐり続けた。

「うぁぁぁぁぁぁぁぁぁひゃはははははうひゃあああああはははぁぁぁぁはははははうひゃあ！！！！！！」

ぶしゃぶしゃぶしゃぶしゃぶしゃーーーー！！！！！

獣のように吠えながらのけぞりM字に開いた股間から壊れた水道のように液体を噴射する香奈枝。

春雄の知る、慎ましく落ち着いた妻の姿とは真逆の姿だった。

（なんだこれなんだこれなんだこれ！）

「あはははは、レベル１０だとちょっとさわさわしただけでこうなっちゃうよんだねー。じゃ、三点責めだとどうなるかなー？」

美少女達は香奈枝の乳首に、少年は前に回ってクリトリスに指を伸ばした。

「おげらららっらららららっらおげらららおげげげらららららうほほーいげえええぐぎゃらららららぁぁぁ！！！！！！」

香奈枝が咆哮した。

手足を猛烈にばたばたさせねがら、空中で跳ねていた。

少年がクリをくすぐっているせいか、股間からの噴射は前後左右に振れた。辺り一面水浸しだ。

両乳首とクリをコリコリされているだけとは思えない乱れようだった。

香奈枝の姿からは人間の尊厳というべきものが根こそぎ奪われていた。

「あー、面白い。これ続けたら脳がピンク色に茹（ゆだ）っちゃうかな？まあそれでもいいんだけど、せっかくのビデオでご対面なんだし、なんでこんなことになってるのかも知りたいよね、春雄さん。レベル１０だとほんと話が進まなくて困っちゃうよ」

少年が笑顔でそう言いながら、クリをいじるのをやめた。

香奈枝の痴態と、少年少女の冷静な態度のギャップが春雄には理解できなかった。

「ということで、レベル1！」
「あー！　いやいやいや！　また私にひどい暗示を！」
途端に香奈枝が泣きながら暴れだした。
「このビデオ、春雄さんに送るので、一言どうぞ。一条香奈枝さん」
「えっ？」
「だから、撮る前に説明したと思うんだけど？　レベル3でも覚えてないの？　香奈枝さん淫乱すぎない？」
「えええっ？　春雄さんに？えええ？」
「だからなんか一言」
「あなた！　助けて！　あたしだけじゃない！　みんながっ！」
「あーそれは後のお楽しみだから。ダメだなあ。しょうがないレベル5！」
「あはーーーんっ！」
たちまち香奈枝は白目を剥いてジョーと小便を垂れ始めた。
乳首を二人の美少女にコリコリされたままだったからだ。
「すみません春雄さん。香奈枝さんに状況説明してもらうつもりだったのですが、ちょっと壊れちゃったみたいで。ので再現ドラマっぽくなりますが、僕が説明しますねー」
少年は香奈枝を降ろすように美少女たちに命じた。
床に寝かされた香奈枝は白目をむいたままチロチロと小便を漏らして痙攣している。
「じゃあ桜子、香奈枝さん役ね。弥生はそのままでいいか。昨日の状況をロールプレイングするよ。いいかい？」

美少女二人が手を上げた。

「おっし、じゃ、スタート！」

「こんにちは、亜由美さんいますか？県大会に一緒に出た石川弥生と申します」

弥生と呼ばれた黒髪の少女がいきなり喋りだした。切り替えの早さにビデオを見ている春雄もやや引いたぐらいの勢いだった。というか少女が喋ったのはビデオが始まってこれが初めてだった。異様な状況にもかかわらず、凛として澄んだ声だった。

「あらあら、県大会って陸上の？　ごめんなさいねまだ亜由美塾から帰ってないのよ。良かったら上がっていって。いつも後３０分ぐらいで帰ってくるから」

ハーフっぽいもう一人が香奈枝の役を始めた。この子が桜子なのだろう。桜子は香奈枝の声色をまねているが、苦笑してしまうくらい似ていない。弥生よりはややトーンが低いけれど、少女らしい優しい声だった。

「お母さん、女の子だからってそんなに簡単に信用しちゃダメですよ。家に上げちゃって強盗だったらどうするんですか？」

「あらあら、面白いこと言う子ね」

「一応警告しましたよ……。じゃあ、お邪魔します」

「こんばんは」

弥生とほぼ同時に少年が玄関をまたぐ動作をした。

「あら？　こちらの方はどなた？」

「わたしのおにいです。一番大事な方です。すぐにその意味が分か

りますよ」

「はじめましておばさん。トリック・オア・トリート！」

香奈枝役の桜子の正面に立ってそう言うと、自分のズボンのファスナーを開けた。

しゅばっと黒光りするチンポがまろび出た。

えぐい。２０センチ、いや３０センチはあろうかという剛棒。血管も裏筋もくっきり浮かび、傘は見事に開いていた。そしてぐっと上向きに反り返るギンギンな雄姿。

ザ・チンポ・オブ・チンポズと言っても過言ではない。

春雄はふと自分の下半身を見た。

椅子に座りながらいつの間にかズボンもブリーフもずり下げていた。

ビデオをおかずに露出したチンポをしごいていた。

自分のチンポと少年のチンポを見比べてしまった。

情けなくて泣けてきた。

栗毛美少女の桜子がチンポをガン見して瞳にハートマークが浮き出た。

「やたっ。おにいの日本刀チンポ！　いただきまーす」

腰を二つ折りする勢いで、黒光りチンポの全長をかぽんと呑み込んだ。

長さから推察して食道まで侵されているはずだが、少女は苦しむどころか笑顔だ。

「おい桜子。これ再現ドラマだよ。香奈枝さんそんなにうれしそうに頬張ってなかったろ。ちゃんとロールプレイしようよ」

「ほうぇ、ほってぇ（えー、だってー）」
「まあ最初はちょっとびっくりしてたけどレベル3にしたら自分からぱっくり咥えたのは事実なんだけどね。それでもディープスロートは無理だっただろ」
少年は香奈枝をちらりと見た。まだ床で意識のないままだらしなくアへっている。
「トリック・オア・トリート！」
再度少年が言うと、桜子が飛び退いたが、着ているセーラー服が飛び散り全裸になった。少女らしからぬ豊満なおっぱいがぽよんと揺れた。
けしからん動きをする乳に春雄の目は釘付けになった。
香奈枝も美しい。が、年齢によるカラダの衰えは否めない。
少女の弾む爆乳ときゅっと縊れた腰には若さが溢れていた。
「あーれー、わたしの服がー（棒）」
「おばさんずっと要求不満なんだってね。こないだの同窓会、ヤバかったんでしょ。聞いてるよ。だから楽しませてあげようと来たんだ。ほら、ずっと欲しかったチンポだよ」
「どーして同窓会で誘われたこと知ってるのー（棒）。えー、チンポー、そんなー、でもー（棒）」
「なんでもお見通しさー。あれっマンコから汁が垂れてきているよ」
「ああー、わたし、はしたないー、今はじめて会った男の子にー（棒）」
「マンコは正直さ。ほらほら、我慢しなくてもいいんだよ」
「はあはあー、我慢ー、しなくてもいいのー、そんなー、でもー、チンポの魅力に負けちゃうー（棒）」
「負けていいんだよ。口で咥えるのもマンコで咥えるのも同じだよ」

「それもそうね！　いただきまーす！」

最後のセリフは棒読みではなく本心のようだった。
美少女はがに股エビ反り姿勢で股間から黒光りチンポに合体した。
無毛に近い幼女のような淡いピンクの隙間にぶっといモノがずにゅうっとめり込むのがはっきり見えた。

「うっほーーーーーん！！！！」

剛棒を一気呑みした肉穴は決して見た目のような幼い性器ではない。もちろん処女ですらない。
デカいおっぱいを振り回しダブルピースでアヘ顔を晒しつつ、上半身をぐーいっと持ち上げる。
そのまま少年に抱きつき手足をからめた。完全に宙に浮いた。おっぱいが二人の胸に押しつぶされ隙間から左右にはみ出た。
少年も華奢に見えるが、グラマラスなわがままボディにみっちりと抱きつかれても全く姿勢を崩さない。それどころか、チンポ一本で少女を支えつつ腰を前後左右にグラインドさせていた。
腕をフリーにしたままの駅弁ファックだ。ものすごい筋力だった。

春雄は画面を見ながらギンギンに勃起したチンポを擦っていた。
亜由美と同年代の美少女のフェラ。そして全裸。そしてアヘ顔ダブルピースからだいしゅきホールドのコンボに生本番。

（おい、カメラもうちょい下だろ。マンコがよく見えんぞ！）

異常な世界に取り込まれ、既に正気を失いつつあった。

第６話の１　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生（後書き）

時事ネタなので、ハロウィン当日までに公開できてよかったです。
三話構成の予定です。
続きをお楽しみに！

第6話の2　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生
（前書き）

続きです。
（★）なしなのでまだ誰も死にません。ご安心を。
あー、やっぱりハロウィンに間に合いませんでした。すみません。

第6話の2　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生

「おい桜子。香奈枝さんこんな姿勢で抱きついてなかっただろ。チンポ入れても最初はイタイイタイって暴れてたし」
「うふっ、ふっ、で、でも、すぐ馴染んで喘ぎはじめ、めた、じゃない、い、うふっ、うっ」

突きあげられながら美少女が反論する。
いつの間にか少年も全裸になっていた。
しなやかな筋肉が躍っていた。

「暴れるからレベル5掛けたからだろ。だいたい、経産婦なのに香奈枝さんマンコえらく堅いんだよ。普段使ってないからかね？　いっそバージョンBで穴を掘りなおそうかなと思ったくらいさ。ま、あんまり早くそっちの展開になるのはつまらないから止めたんだけど」
「うっ、ううっ、ふふっ、おにい、ゆ、ゆっくり追い込むの、す、うふっ、好きだもの、うふっ、ねっ、うっ」
「ああ、お前たちの時もほぼ一日かけて責めたね。まあ、あんときはあの川崎（汚いおじさん）がねちこいのが好きだったってのが大きいけど」
「うふっ、川崎にく、比べれば、お、おにいや私たちに直接お、堕とされる香奈枝さんたちは、うふっ、し、シアワセね、う、うふっ」
「それはどーかなー。お前なんて皮だけのバケモノじゃん」
「うふっ、うっ、そう、わ、私たちはおにいにつ、作られたバケモノ、よっ、うううっふっ」

美少女の様子が変わった。全身がほの赤く染まる。バケモノとのしられることがスイッチになったようだった。

「うふっうふっうっうふっうっうふぅぶっぶっうふうふっうふっうふっうっうふっうっうふぅぶっぶっうっうっ！！！」
「そうだ、バケモノ、逝ってしまえ！」

少年が射精した。
そのとたん、桜子と呼ばれた少女は口からぱあんっと大量の白い液体を宙に吐き、水風船がしぼむようにペラペラになった。
そしてその布のような肌色のモノは、チンポに引っかかったまま、少年の下半身に二つ折れになって垂れた。
少年の周りの床は白いドロドロした液が溜まった。精液のようでもあるが、1回の射精分よりもはるかにはるかに多い。少女の体が精液で出来ていたというかのようだった。

「桜子、イキすぎだ。ちゃんとすすって元に戻っておけよ」

少年がそういうと、肌色の皮がぞろりと床に落ち、頭部を床の液体に突っ込んだ。もぞもぞと蠕動していたが、しばらくすると膨らみはじめ、やがて元の美少女に戻り立ち上がった。
床の白い液体はきれいになくなっていた。

「弾けすぎよ、桜子」

黒髪美少女がたしなめる声がする。声だけなのは、先ほどからカメラで撮影しているのが黒髪美少女だからだろう。

「えへへー、だって、ぱんってなるの気持ちいいんだもん」
「ほんとの意味で弾けてどうするの。ほどほどにね。皮が破れちゃったら大変よ」
「はーい」

「んー、まあこんな感じで部屋に上がって香奈枝さんを犯したんだ。わかったー？」

少年がカメラ目線で言う。

（なんだこれなんだこれなんだこれ）

春雄はこの映像がＶＦＸによるフェイクには思えなかった。

まさにバケモノ。

我が家はバケモノに襲われているのか！？

愕然とするも、チンポは勃起したままだった。

（こんなの、わかるかー！！！！）

その後、少年は床にひっくりかえっている香奈枝の両足を広げると、日本刀チンポをぶっすりとマンコに突き刺した。香奈枝は嬌声を上げ、少年に抱きついた。

その姿はさっきの美少女のだいしゅきホールドと完全に一致していた。

春雄が聞いたこともない絶叫を上げながらイキまくった。

※※※※※※※※※

いつの間にか、ビデオは2本目になっていた。

リビングはマン汁や精液が飛び散りひどい有様になっていた。

絶叫を上げ続けた香奈枝はさすがにイキ疲れたのか、また床で伸びていた。

よくご近所が警察に通報しないものだ。そんなレベルの連続アク

メだった。
ビデオを見ている春雄も、ぎちぎちチンポから擦りもしないのに先走り汁とも精液ともつかぬものをだらだら垂れ流していた。
妻の嬌態は強烈だった。頭がボーっとしていた。

ガチャリと玄関のかぎが回る音がした。

「ただいまー！　おかあさん、おなかすいたー！」

(はっ！　いかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんいかんぞー！！！！)

春雄は我に返った。
亜由美(あゆみ)が帰って来た！
このバケモノどもに亜由美が餌食になるのだけは！
それだけはやめてくれ！あの子はまだ１４才なんだ！

「うわー、すごいにおいー」

カメラフレームに亜由美が姿を現した。

(そのにおいは、その場所は、ダメだ！　早く逃げろ！　ああああ！　亜由美！！！！！！！！！！！！　……あれ？)

裸の母親（しかもハロウィン落書き入り）と見知らぬ（？）男女の姿を見たはずだが、なぜか亜由美は平然としている。

「うふふふ、もうこんなにしちゃったのね。お母さんを」
「お帰りー、亜由美」
「出会って5秒でアヘイキかな？　健太郎さんのチンポすっごいも

んね。ねーねー。お母さんのマンコどうだった？」
「それが亜由美よりカチカチでさ。まあ擦ってるうちに馴染んだけどね」
「あーやっぱり、お母さん頑固だから……」
「そ、そういうものなの？？　まあいいや、ところで約束どおりお父さん用のビデオ撮ってるけど」
「あ、そうだったそうだった。やっほー、お父さん、そっちで元気してるー？　見てのとおりあたし達も元気ですよー。ハロウィンパーティー楽しんでまーす！」

亜由美がカメラに気づいて正面向いて笑顔で手を振った。

血の気が引いた。
手遅れ。
春雄は気が付いた。
亜由美は既にこのバケモノたちの側に堕ちていた。

亜由美がいそいそと制服を脱ぎだした。
白い綿の下着と中学生らしい慎ましやかな曲線美が露わになる。

春雄は衝撃で絶句した。ビデオを見始めてこれで何度目だろうか。
亜由美の露わになった肌にあったもの。
香奈枝の肌には絵本風のハロウィンのキャラクターイラストが描かれていたが、亜由美の肩口から太ももに掛けて、鬼、般若、餓鬼、髑髏、人魂……
日本の妖怪がおどろおどろしい、リアルな筆致で描き込まれていた。

いや、描かれているというより、どう見てもこれは……

刺青……。

（まさかまさかまさかそんなばかな！　えっ、これシールだよな！？　洗えば落ちるやつだよな…！！！？？？）

亜由美は続けて下着もためらいなく脱いだ。

ピンク色の乳首……ではなく、乳輪は真っ赤な牡丹で覆われていた。よく見れば花の中心がぷっくりと盛り上がっていた。本来は可愛い乳首なのだろうが、どぎつい赤色が淫猥なものに変えていた。

股間に刺青（？）はなかった。そして恥毛もなかった。

おどろおどろしい妖怪の絵に覆われた体の中で、三角ゾーンだけが白いもとの肌色のままだ。

肉の筋がくっきりとさらされ、ここがマンコだよーとかえって主張していた。

「健太郎さん。お口直しにＪＣのほかほかマンコはい・か・が？」

「香奈枝さんの前に桜子に中出ししたけど」

「えー、ずるーい」

「ずるいって亜由美、あたしも今日はおにいのチンポまだなんだけど」

「弥生もおあずけかー。でも脱いだ者勝ちでーす」

「あっ、ひっどーい！」

亜由美が少年にダイブするように飛びついた。

腰を落とし、剛棒チンポをずにゅるとマンコで咥えこむ。

「あはー！！　健太郎チンポすごーい！！！　胃まで満たされるー！！！　あああああ！！！！」

「うーん、レベル１なのに亜由美は相変わらず感度いいね。根っからの淫乱だねー」

「こんなスケベＪＣにしたのは健太郎さんじゃない、あ、あはっ！
そんなっ！　全部めり込んでくるー！！！」

ずぼぼぼとその全長を呑み込んだ亜由美の膣は間違いなく経験を積んだマンコだった。
破瓜の血など一滴もない。
たしかにほかほかに出来上がっているマンコだった。
少年がゆっくりピストンすると、亜由美の膣穴からじゅぼんじゅぼんと泡立った汁が掻き出されていた。
女子中学生の本気汁。

「あはっあはははーっ！！！！　気持ちいいいいーーーっ！！！
健太郎チンポサイコーっ！！！」

亜由美の背中には、花魁のでかいマンコに町衆がデカいちんぽをぶち込みながら口吸いしている浮世絵が描かれていた。春画独特の誇張表現がユーモラスだが、実際にセックスしている少年少女の蠕動と相まってあたかもその江戸時代の男女も蠢いているように錯覚された。

春雄はくらくらしてきた。勃起しっぱなしのチンポからは白濁した液体がごぼごぼと溢れ続けた。

「あたしだけ服着てるのバカみたい。参加するわよ」

カメラが固定され、黒髪の少女がフレームインして制服を脱いだ。
少女らしい慎ましやかな美乳が露わになった。黒々とした陰毛の中にきらりと光るものがあった。マンコにピアスをしているようだった。
床で伸びている香奈枝の股間に口をつけた。ずずずとマンコにた

まった液体をすする。

「あはあああぁぁぁぁ！」

香奈枝がすけべ声を上げて目を覚ました。じゅぱじゅぱと香奈枝のビラビラやクリトリスが吸い上げられる。

「おほほほほぉぉおほほほほぉぉぉぉぉぉ！！」

少女に舐めあげられもない声を上げ震える熟女の姿はエロくもあり滑稽でもあった。

※※※※※※※※

ビデオは3本目になっていた。

少年は、亜由美に射精し、黒髪少女に射精し、香奈枝に射精し、栗毛少女に射精し、ぐるぐる回っていた。全部中出しだ。日本刀チンポを引き抜くたびにどぼどぼとそれぞれの膣穴から精液が垂れて落ちた。

ものすごい精力だった。

とはいえ、誰かとセックスするときは待っている三人が辛そうだった。お互いにマンコやおっぱいを舐めたりするが、お預け状態なのは否めない。

「うーん、やっぱチンポの数が足りないなー。彼連れてくるのはもう少し後にしたいし、桜子、弥生に例のヤツやってよ。弥生も頼む」

「わかったわ、おにい」

「任せといて、おにい」

栗毛少女がどこからかマーカーを持ち出して、黒髪少女の下腹部に絵を描きだした。

あっという間に出来上がったそれは、きわめてリアルな男根……。それも浮世絵のそれのように誇張され巨大化したデカマラだった。

（ああ！この娘が亜由美の刺青風のイラストも描いたんだな！　やっぱり絵だったんだ。良かった……。しかしなぜチンポの絵を？絵を相手にフェラチオごっことかセックスごっこでもする気なのか？）

ほっとしつつ彼女らの行為をいぶかる春雄であったが、すぐにまたも驚愕することになった。

黒髪少女の下腹部のデカマラが、ぐぐぐと隆起した。そしてぼん！　と三次元化した。

少女のマンコの上に屹立する凶悪にぶっといチンポ。

美少女は両性具有（アンドロギュノス）、いや巨根ふたなりと化した。

「でかっ！　ちょっと大きすぎない？　桜子」

「ハロウィンなのでいつもより増量してみましたー」

「どういう意味かよくわかんないけど、まあいいわ。さてじゃあ亜由美ちゃんでこのデカマラ試してみようかしら」

「あはー！　弥生の怪物チンポで犯されちゃうのねあたし。あははー！！」

「怪物ゆーなし。バケモノだし」

ぐにゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅりゅーーーーずりゅりゅりゅりゅーーーぐにゅっ！

「きついきついきついーーーー！！！　あはーっ！！！　あああああーーーきついーーーーーーー！！！」

股間が外れそうなぐらい開脚して亜由美が巨根を呑み込んだ。ぼこんとおなかがマラの形に飛び出した。

「し、子宮がつぶれるううーーーーー！！！　あははーーーーー！！！　うげっ！！」

亜由美が吐いた。デカマラで胃や腸まで押し上げられたのだ。ゲロが大した量じゃないのはそもそも食事をしていないからだろう。

「よーし親子丼だー」

少年が栗毛少女と乳繰り合っている香奈枝をひょいと持ち上げると背後からチンコで串刺しにした。

けん玉の先に玉の穴を刺すような挿入だった。

香奈枝は両足が宙に浮いたまま少年に胴体を支えられていた。

成人女性を軽々扱う、恐るべき怪力だった。

「おげらららっらっらららららっおげららららげえええぐぎゃらららぁぁぁ！！！！！」

香奈枝が羞恥のかけらもない恥声を上げながら自由な手足をバタバタする。快感で我を忘れているのか、壊れたおもちゃのような動きだ。少年が香奈枝ごと歩いて、デカマラをぶち込まれている亜由美に近寄った。

「ほら、亜由美ちゃんをきれいにしてやれよ」

「おげらっらららあああ、あああああ、は、ああ、はい、おげらら

らあっ」

香奈枝が亜由美の唇を吸った。ゲロごと。
ベロンベロンと亜由美の口周りや顔を舌で舐める。
やがてデカチンポで挿入されている二人は抱き合い、乳をぎゅーっと密着させながらべろべろと互いを舐めあいはじめた。

「うーん？　これって親子丼っていうのかしら？」
「同時に母と娘をハメてるんだから親子丼でいいんじゃいの？」
「ま、いいかー、このビデオのタイトルは親子丼にするわねー。あっ、なんだか亜由美の膣がうねってきた」
「香奈枝さんもびくびくしてる。やっぱ母娘で乳繰り合うのって禁断の快楽なのかな？」
「おにい、あたしイっていい？」
「イイよ。タイミング合わせようか。……3、2、1」

どっぽーーーん！

抱き合ったままの香奈枝と亜由美が天井近くまで射ち出された。
ダブル精液ロケットだ。
そのまま落ちてくるが、少年と少女に抱きかかえられて着地した。
二人は上半身で抱き合い舐めあいながら、下半身がへなへなと崩れ床にへたり込む。
ずびゅ、ずびゅとマンコから余った精液が漏れていた。

後半、カメラは固定ではなくなっていた。
栗毛少女が画面にいなかったから、彼女がカメラマンになっていたのだろう。

※※※※※※※※

ビデオ４本目。

「そろそろ彼にもご登場願おうかな。弥生、箱持ってきて」

しばらくしてデカマラを生やしたままの黒髪少女が、リボンで包まれた大きな箱をどこからかリビングに持ってきた。

しゅるしゅるとほどく。リボンがなくなると、箱にジャック・オ・ランタンやゴーストなどのイラストが描かれているのが分かった。

香奈枝の体にあるものと似たタッチだ。

おそらく栗毛少女の作だろう。

「トリック・オア・トリート！」

少女がそういうと、箱の側板が外れて、ぱたんと四方に倒れた。

現れたのは制服姿の亜由美だった。

なぜだ？

亜由美は只今画面の奥で少年のチンポしゃぶってるじゃないか。

あ、亜由美じゃない！　秋生（あきお）だ！

春雄は気が付いた。

ウィッグと制服でごまかされたが、それは長男の秋生だ。

女性っぽい顔立ちに小柄な体は以前からだったが、こうしてみると亜由美にそっくりだ。

眠っているのか、目を閉じているせいもあるのかもしれないが、一瞬親である春雄にもわからなかった。

「あ、あれ……？」

秋生が目を覚ました。

「なっ、なにこれ！　なんで亜由美（あゆ）の制服を僕が？？？　はっ？　なにこれ？　なんでみんな裸で？　弥生ちゃん、なにやってんの？　亜由美（あゆ）！　おおおお前健太郎さんと何してんだよ！！！！？？？？」

周りを見渡してパニクっていた。そうだろうそうだろうと春雄はうなずいた。これが当たり前の反応だよなあ。ようやくまともなやつが現れた。

秋生！　お前が香奈枝と亜由美を救うのだ！　任せたぞ！

もはや思考回路がショートしまくって知能が退化している春雄であった。

「おまんこ」

黒髪少女が秋生に迫った。
デカマラを勃起させたまま。

「ひっ！　弥生ちゃん、なにそれなんか生えてるよぉ！！！？？？」
「チンポ」

にたあと笑いながら黒髪少女が秋生に抱きついた。そしてスカートの中に手を入れて下半身を嬲り始める。

「あああ！　弥生ちゃん、やめてくれ！　今の君はおかしいぞ！？　これは悪魔の仕業か！？」

「…？　何で知ってるの？　まあいいや。いっただきまーす！」

黒髪少女はスカートをまくるとパンティをずり下した。そう、秋生はいつものブリーフではなく女物のパンティを穿いていた。べろんと白い尻があらわになる。

「やめてくれ！　弥生ちゃん！　君は何を！！」

「ケツ穴はっけーん。いただきます」

ぶっすーーーーー！！！

黒髪少女はなんのためらいもなくデカマラを秋生の肛門に突き刺した。そのまま全長をねじ込みにかかる。

「いってええーーーー！！！　いいいいいいいいてててててててーーーーーー！！！！！」

秋生が絶叫した。黒髪少女から逃げようとするが、完全に押さえつけられていた。

ずにゅにゅにゅにゅにゅにゅ。

デカマラがじわじわと秋生の腸にめり込んでいた。

と、秋生の包茎チンポが勃起していた。すかさず黒髪少女がその短いチンポを握って擦り始めた。

「あ、あああああ、いいいいてってあああああいいいいあああいいいあああいいいあああ」

「だんだんこなれてきたでしょ、秋生クン。本気で動くわよ」

「え、いや、いや、やめて弥生ちゃん、あああいいいあああいいいあああああ」

黒髪少女は秋生のお子様チンポをごしごしこすりながら、デカマラで肛門を本格的に犯し始めた。

ずにゅ、じゅるっ、ずにゅ、じゅるっ。

デカマラの全長を飲み込むのは無理のようだったが、ピストンされるうちに秋生の悲鳴に甘いものが混じり始めた。

「いいっ、いたっ、あ、ああっ、いい、いいいいいい、ははっ、あああっあああああああああ」
「オトコの子がイきそうね。イっていいわよあたしの手の中で」
「ああいいああいいああいいいいああああぃぃぃあああいいぃいいいいいいあいいい！！！」

びちゅ。

秋生が射精した。
今まで人間離れした射精量をさんざん見てきたためか、ほほえましいくらいのちょろさ加減だった。

「は、はあ、はあ、あっがっそんな、今イったとこなのに、やめ、やめて、ああああああ」
「許さないわよー、あたしの手を汚してさー、そんな悪いオトコの子には、お・し・お・き」

黒髪少女はだらんとした秋生のチンポを休まず擦りながら、肛門へのピストンを加速した。
「ああああああああいいああああいいあああああいいあああああいいあああああああ」

「秋生クンはケツ穴で感じる変態だったのねー。ほらまた包茎チンポが屹立してきたわよー。おらおらおらおら！」
「あああああははははああーーーーんあああああーーーーんあああああああああああああ」
「痛みも快感でしょ。そおれそおれ、またイけ！　ケツ穴でイけ！」
「おおおおおほほほほほーーーーほほほほーーーーー！！！！！」

ちょろん。

追い込まれた感じにしては、やっぱり射精量は大したことはなかった。黒髪少女の手に少しへばりついて終わった。

「なにこれこれで男なの？　あははは！、あたしが射精の見本を見せてあげるわ！　脳天まで精液に犯されなさい！」

ぶっぼばあああぁぁぁぁぁぁーーーんんん！！！！！

秋生のお腹からバズーカの炸薬のような音がした次の瞬間、秋生は数メートル先に飛ばされていた。

ロケット射精だ。

そしてケツ穴から、口から、鼻から、白濁液を噴き出した。

ぼちゃんと床に落ちて、目や耳からもじわーーーと精液が垂れてきた。

秋生の腸にどれだけの精液を射精したのかわからないが、胃も食道も越えて繋がっている穴から噴き出したのだった。

秋生は精液だまりに顔を埋め、失神し痙攣していた。

第6話の2　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生（後書き）

第2話をお読みの方は思い出していただければ。
ピアスとマーカーは健太郎（故人）からのクリスマスのプレゼントでした。
皮だけのバケモノになってもおにいの贈り物は大事にしている弥生と桜子ということで。

ところで2話のクリスマスからハロウィン話なので1年近く現実世界では経っていると思われますが、バケモノは歳を取りません。
永遠の中学生。
この間に人間社会に溶け込んでいったのか、本来の健太郎たちのコミュニティーを利用したのかは不明です。
多分その両方なのでしょう。

あるいは、もしかしたら時間軸も制御できるのかも。過去に戻るなんて悪魔にとっては簡単なことなのかも知れません。
人間のスケールでは計り知れない世界に彼らは存在しています。
あまり時系列にこだわらないように（今後の展開にも若干そういう部分があるかも）。

次回でこのお話は完結予定です。
お楽しみに（何を？）。

第6話の3　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生（★）（前書き）

続きです。今回でこのお話は完結です。例によって惨殺シーンがあるので、苦手な方はお逃げください。

第6話の3　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生（★）

ビデオ5本目。

少年が剛棒チンポでセーラー服姿の秋生の肛門を背後から犯し、その秋生が仮性包茎気味のちんこで黒髪少女を犯し、黒髪少女のふたなりデカマラが亜由美を犯していた。

連結列車というか、ムカデ競争というか、変態な構図だった。

カメラは全体を映したのち、下から舐めるように結合部を中心にズームアップし、ゆっくり後ろから前に移動を始めた。

「あはあはあはははあはははははあはっはっはっはっ」

秋生はすっかり肛門性交に馴染んでしまったようだった。少年の長く太いちんぽにからみつく白い液体が次第に濃度を高めていた。ぐいと引き抜かれた時は富士山のように肛門が伸び、ぎゅうと押し込まれると漏斗のようにへこみキンタマがぎゅと縮む。リズムを合わせるように、ちんこを呑み込んだ黒髪少女のマンコが妖しく蠢き、締め上げる。きらりと光る陰唇のピアス。犯され犯す快感に翻弄されていた。

「あああああああああぁぁぁぁぁぁや、弥生き、気持ちいいよーあああああああぁぁっぁぁ！！！」

その先では刺青まがいに彩られた亜由美が黒髪少女の春画風デカマラでバックから犯されあえいでいる。隠微というか怪異というか幻想というか、表現に困る絵面だ。セックスしている二人が十代前半なのが困惑に輪をかけていた。

まあ、ビデオを見ている春雄のチンポは相変わらずギチギチで精液垂れ流し状態なので、エロとして認識しているのは間違いないのだろう。だが、春雄の表情はだらりと弛緩しており、理性を感じられなかった。あまりに強烈な刺激に脳を焼かれたのかも知れなかった。

ムカデセックスが一段落すると、床で伸びている秋生を少年が引きずり起こした。

「亜由美は知ってたけど、秋生クンもレベル1でケツ穴とちんこのダブルセックスでイケるとは、なかなか根っからの淫乱少年だねえ。じゃあ次は親子の絆を深めてもらおうかな？」

カメラが一瞬ぶれて、香奈枝がフレームインしてきた。今まで香奈枝が撮影していたのだろう。画面にいない栗毛少女に渡したようだ。

子供たちの痴態を余すところなく撮っていた母、おそるべし。

そのままの勢いで膝をすとんと落とし、スカートを捲るのももどかしく秋生の仮性包茎ちんこをかぽっと呑み込んだ。

いや、瞬時に頭を高速ピストンし始めた。

撮影の間、じれていたのだろう。

ずりゅりゅりゅーーーっと卑猥な音を上げながらちんこをすすり、舐めたおす。

「ああっ、かあさん、かあさん、そんなっ、き、気持ちいいよ――――！！」

ずりゅりゅりゅりゅうううう。

「うっ！」

秋生が母親の口に精を放った。しばらく唇で亀頭を優しく吸うと、香奈枝がかぱっと口を開いた。舌の上に溜まった精液を晒す。

そして、ごっくんと呑み込んで、また口を開く。空になったことを見せる。

あはあと隠微に笑うと、床に寝そべり息子に向け股を大きく開いた。

くちゃあと粘る音がした。

濡れた陰毛の中で鮮紅色のひだの重なりがびらんと咲いた。

秋生が香奈枝に抱きつき、勃起したままの仮性包茎ちんこを母親のマンコに挿入した。

「おおおおぉぉぉ！　秋生、秋生ー、おほほおおおおおぉぉぉ！」

「かあさん、かあさん、かあさんー！！」

ハロウィンのボディペイントをされた母親にへこへこと腰を振る女子高生コスプレの息子。

これもまた倒錯というか、隠微な変態セックスの構図だった。

香奈枝に中出しした秋生は亜由美ともセックスを始めた。同一人物が刺青全裸姿と女子高生姿で性交しているような奇妙な構図になった。

「亜由美（あゆ）、亜由美（あゆ）っ！！！」

「秋生、秋生っ！！！　あああああぁぁあぁぁぁぁ！！！」

亜由美にも中出ししたのち、香奈枝も交じって三角形に寝そべり性器を舐めはじめた。亜由美が秋生のちんこを、秋生が香奈枝のビ

ラマンを、香奈枝が亜由美の筋マンをべろべろちゅぱちゅぱする。
秋生は自分の精液交じりの母親のマン汁をすすっているが、気にしていないようだ。
そもそも少年や黒髪少女の精液まみれになっていたから今更かも知れないが。

「あああ、家族セックス、やみつきになっちゃう！ごめんねおとうさん！」

悦楽の淫語に交じって誰かがそうつぶやいた。

※※※※※※※※

ビデオ6本目。

秋生がセーラー服を脱がされ、栗毛少女にボディペイントされた。
胸に陰影を描くと、ぼんっ！と巨乳になった。

「秋生あたしよりデカ乳ーー！」
「おおおお、こりゃすげー」

自分の胸を揉む秋生。

「ちんこも、女の子にしてあげるね」

栗毛少女がそうつぶやきながら秋生の亀頭に縦筋を描いた。

「大きさがちょっと足りないから手伝うよ」

少年がそう言うと、秋生のちんこがジョバッと伸びて反り返った。
そして亀頭の傘が開き、いや、比喩じゃなくホントに雨傘のように開いて、栗毛少女の描いた筋が左右にくぱあと開いた。

それは、チンポの先に咲いたマンコだった。
鈴口はぐっと針の穴のように縮まり、尿道とは別に濡れた膣やクリトリスが揃ったピンク色のフレッシュな女性器になった。

「秋生の処女マンコ、いったっだきまーす！」

黒髪少女がぎんぎんの浮世絵ちんぽを秋生の新造マンコにぶち込んだ。

「いってええーーーー！！！」

極太な浮世絵ちんぽは処女膜をブチブチと突き破り（あったようだ）、陰茎膣を蹂躙した。浮世絵ちんぽの形に秋生のチンポがめりめり膨らむ。

「イタイイタイイタイ……いいい、い、いいいいいいいいあああああああいいいあああああいいいあああああいいいあああああいいいあああああ」
「秋生のマンコ、もう馴染んできてるわ。さすがね」

立位で抱き合う秋生と少女。スレンダーな黒髪少女との間から秋生の巨大なおっぱいがはみ出る。揺れる。
陰茎膣を無理やり犯される感覚が海綿体を限界まで充血させ黒髪少女の浮世絵ちんぽを締め付ける。一方がちがちのチンポの中を掘削される秋生は激痛に襲われるが、その痛みすらもはや絶頂快楽であった。

痛い気持ちいいギンギン痛い気持ちいいギンギン。

秋生は被虐の快楽ループに嵌まっていた。

レベル1なのに。

「あああーーーあああーーーんあああああああああああああああああああああ」

「もう女の子の声ね、いや、オトコの娘か」

「んあああああぁぁぁぁぁぁぁーーーーあああぁぁ！　ヴおっ！！」

秋生が浮世絵ちんぽに蹂躙されるマンコのすぐ上、小さくすぼまった尿道口からぷちゅっと射精した。

秋生が逝った瞬間陰茎膣の海綿体がぎゅううううっと硬化し、浮世絵ちんぽを絞り上げた。

黒髪少女も搾り上げられるまま射精をした。そのカチカチになった陰茎膣の中に。無慈悲に。大量に。

どこにも出口のない大量の精液はどういうしくみか秋生の陰嚢をぶおんっと膨らませた。

たちまちデカいなすびのようにぶらさがる秋生のキンタマ袋。

この間、約0．5秒。

「ヴぉおおおおおお、お」

秋生の絶叫は突如とだえ、白目を剥いて気を失った。抱き合った腕がほどけ、上半身が力を失いのけぞる。

デカい胸とデカいキンタマ袋が相似形のように体の左右にだらりと垂れた。

それでもがちがちに勃起したちんぽとチンポの結合は解けなかった。

※※※※※※※※※

ビデオ7本目。

秋生はマンコの花付きロングチンポで香奈枝と亜由美を犯し、大量のザーメンを中出しした。なすびのように膨らんだキンタマが二人への射精でようやく正常サイズに戻った。

チンポの先のマンコ部分はセックスには邪魔と思われたが、開閉が可能で、挿入時には閉じ、掻き出す時に開くことで膣壁をゴリゴリ刺激するようだった。香奈枝と亜由美が新機能によがり狂った。

その後秋生が傘マンコを香奈枝にクンニされ、ロングチンポを横から亜由美にフェラされ、巨乳を黒髪と栗毛の両少女に吸われて悶えた。

さらに剛棒チンポ少年、浮世絵ちんぽ少女、ふたなり（というのか？）チンポの秋生が亜由美、香奈枝、栗毛少女を犯し、また秋生が肛門と傘マンコを同時に犯され、黒髪少女がマンコを犯されながら浮世絵ちんぽで犯し……。

果てしなく続くと思われたが、やがてビデオが8本目に切り替わった。

「んー、3Pデスマッチってタイトル付けたけど、これって6Pよね」

といったのは誰であったか…。

※※※※※※※※※※

ビデオ8本目。

「さて、そろそろ飽きてきたので締めに入りたいと思います！」

と剛棒チンポ少年が右手を上げて宣言した。

そして黒髪少女を指差した。

「トリック・オア・トリート！」

ぽこんと浮世絵ちんぽが外れて、床に落ちた。いや、立った。単独の生物のように。

そしてぴょこぴょこ飛び跳ねて秋生の足もとに移動し、足首にすりすりする。愛玩動物のように。

黒髪少女の恥丘に穴が開いて、白い液体がビューとこぼれだしていた。

「おっといけない」

少年が撫でると、穴が消えた。こぼれた液体は黒髪少女が這ってすすった。

「ちんぽに持って行かれた分だけ減っちゃった。おにい、補充して」

「ほいきた」

間髪入れず剛棒チンポを黒髪少女のマンコにぶっ刺した。

「あああああぁぁぁぁっあああああああぁぁぁぁあああああああっ
ぁぁぁぁぁあああああああああああ」

黒髪少女が一瞬で絶頂した。

……いや、さっきから何度も見ている光景だが。

どくんとおなかの中から音が聞こえた。補充したのだろう。やっぱりこの少女たちは精液で出来たバケモノなのだ。

「トリック・オア・トリート！」

少年が今度は四つん這いでアへっている香奈枝の尻を指差して言った。

「あ？　あああ？　ああ？？？」

香奈枝の豊満な尻肉がぬぬぬと伸びた。描かれたかぼちゃの化け物（ジャック・オ・ランタン）の形に膨らむ。やがて2倍くらいの大きさになると、かぼちゃ（ジャック・）の化け物（オ・ランタン）は香奈枝にくっついたままがしがしと口を噛み合わせた。

それだけではない。

香奈枝の胸で蝙蝠が羽ばたきだし、蜘蛛が足を伸ばした。腹からゾンビが腐った汁を垂れながら起きあがる。

「あああああああああぁぁぁぁぁぁっぁぁああああああぁぁぁっ
ぁっぁあああああああ」

怪物たちが動き出すのが香奈枝にとっては快感なのだろう。股間に残っているマンコからじゅるると汁を垂らす。

「このぐらいかな？」

少年が怪物たちがそれなりの大きさになったのを確認するように言い、指を鳴らした。

めりめりめりっ

ぶちぶちぶちっ

怪物たちが香奈枝の体から分離した。

「あああがあああああぁあぁぁぁあああがががあああああがががあああぁっ」

香奈枝は肉をごっそり持っていかれ穴だらけの無残な姿になった。垂れた胸には蝙蝠や蜘蛛の形の赤い穴。腹はゾンビの人型に。そして尻の肉はほとんどが失われ、リンゴのヘタのようにえぐれた赤い物体にケツ穴とマンコだけが残っていた。

「トリック・オア・トリート」

再度少年が言うと、蝙蝠が香奈枝の顔をついばみ、ゾンビが腐ったチンポで香奈枝を犯しながら胸を齧り、かぼちゃの化け物（ジャック・オ・ランタン）が足に噛みついた。

「あぎゃ、あぎゃ、あぎゃ、あぎゃっ！」

齧られ喰われることすら快感に感じるのか、香奈枝は嬌声を上げながら肉を失っていく。

ばきん、ごきん、ばきん、ごくん。

骨が砕かれる音が何度もして、やがて香奈枝の姿は消えた。

（喰われた……　香奈枝が喰われた……　喰われた！？……　あはは……　喰われた……）

春雄はビデオの中で起きていることをもうまともに認識できなくなっていた。

浮世絵ちんぽが、秋生の傘マンコを犯していた。

母親が死んだにもかかわらず、秋生は盛大にイキ狂っていた。

※※※※※※※※

ビデオ９本目。

「トリック・オア・トリート！」

少年は今度は亜由美に向かって言った。

「ぐげっ、やべっ、ぎえええっ！」

さすがにレベル１は苦痛を快楽には変えない。ぼこん、めぎょっと皮膚がめくれ亜由美の体から押し出されていく鬼や般若、餓鬼、髑髏、人魂たち。背中からは花魁と繋がったままの町衆がへこへこと巨根を抽送しはじめる。いや、もしかしたら錯覚ではなく、亜由美の背中にあった時も動いていたのかもしれない。

香奈枝よりも濃密に描かれた妖怪たちは亜由美の胴体部分をほと

んどえぐり取りながら実体化していった。乳首から大輪の花が咲き、乳房はその枝と化した。

「そろそろいいかな？」

香奈枝の時と同じようにパチンと指を鳴らすと、鬼や般若や髑髏や花魁が亜由美から分離した。

リビングに牡丹の木が生えた。

亜由美は無残な姿になっていた。胴や肩、太ももなどがごっそり失われ、三角形のマンコ部分から頭と手足が直接生えた、クモヒトデのようなありさまだった。

「あげっ、あげっあげっげげげ」

亜由美は床を無様に掻きながら、逃げ出そうとした。しかしヒトデ型になった体が思うように動かない。

鬼が、般若が、餓鬼が、髑髏が、亜由美を見下ろしていた。少し離れて花魁と町衆はセックスに興じていた。

食べられる！

亜由美はそう思った。

その時。

「あああああああいいいあああああいいいあああああいいいあああああいいいあああああ」

秋生が絶頂した。そして傘マンコが浮世絵ちんぽを咥えたまま、分離した。

ぽーんっ。

合体したままの浮世絵ちんぽと傘マンコは、射精の勢いで放物線を描いてリビングの端に飛んだ。

亀頭部分を失った秋生のロングチンポは、栓の抜けたホースのように精液を垂れ流した。

「おおおおおほほほほーーーほほほーーーーー！！！！！」

壊れたように絶叫する秋生を妖怪たちがロックオンした。ずんずんと近寄る。

「おおおおおほほほほーーー、へ？なに？なになに？」

秋生の顔、おっぱい、股間に妖怪たちがとりついた。香奈枝を食べた蝙蝠やゾンビ、かぼちゃの化け物（ジャック・オ・ランタン）も寄る。

ばきばきばきばきむしゃむしゃばきばきばきばきごっくんばきばきばき！

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁ1！！！！！」

秋生が喰われた。

喰われながらも、ホースチンポは精液を撒き散らした。

秋生はレベル1でも痛みを快感に感じられたようだった。

喰われて姿を失っていく秋生を尻目に、浮世絵ちんぽと傘マンコは合体ピストンを続けていた。

※※※※※※※※※※

ビデオ１０本目。

「健太郎さん！　弥生！　桜子！　助けてよ！　あたし協力したじゃない！　あなた達のために！　なんでよ！　こんなのおかしい！　なんでこんなことするのよ！」

「悪魔だからさ」

少年と二人の少女が心底見下した目で亜由美を見る。

亜由美は床を掻きながら逃げようとするが、卍の字のような体のコントロールが利かず同じところをぐるぐる回転しているだけだった。

化け物や妖怪たちが亜由美の回りに集まり、見下ろした。

「じゃ、お疲れさまでした、亜由美ちゃん」

「ちょっと待って、健太郎さん！　え、ちょっと、ぐえっ！」

鬼が亜由美の太腿を踏み潰した。

「がはっ、ぐえええっ！　ぎゃあああ！」

かぼちゃの化け物（ジャック・オ・ランタン）が腕を喰った。

化け物たちが亜由美ヒトデを蹂躙した。

しばらく悲鳴が聞こえていたが、それもやがて消え、そしてなにもなくなった。

「さて、春雄さん、ハロウィンパーティーはいかがでしたか？」

何を言ってるんだこいつは。俺の家族を殺しておいて。殺人犯。

証拠ビデオまである。

俺の家族。

殺された……

こいつに……

殺された！

あああああああいいいあああああいいいあああああいいいあああああいいいあああああ！！！！！！

「あああああああああああああああああああああ！！！！！！」

春雄は絶叫した。

「いいですね。現実逃避から戻ってきたようですね。うん、これで地球の裏側まで僕の能力が届くことが確認できました。ありがとうございます」

「貴様貴様貴様、健太郎と言ったな！　絶対逃さんぞ！　俺の家族の仇は俺が討つ！」

「いいですね～！　その狂いよう。いろいろ仕込んだ甲斐がありました。お礼に贈り物を差し上げます」

「何を言ってるんだ貴様―！！！」

逆上した春雄は、ビデオと会話していることに気が付かなかった。

「トリック・オア・トリート！」

少年が言うと、画面がプツンと消えた。

「あ？……」

しばらくして、背後に息遣いを感じた。

……まさか？……

ゆっくりと振り返るとそこには、

かぼちゃの化け物（ジャック・オ・ランタン）、鬼、髑髏、蝙蝠、ゾンビ、蝙蝠、花魁、町衆らが。

「うぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！」

第6話の3　一ノ瀬香奈枝・一ノ瀬亜由美・おまけで一ノ瀬秋生（★）（後書き）

ハロウィンから丸一月遅れです。遅筆で申し訳ありません。自分でも嫌になりますトホホ。

趣味全開で書いているのに、おかしいなあ……。

そんなわけで、次の第7話で「かきしの」は閉幕としたいと思います。

次回作はフツーのエロ小説にしたいなあ無理だろうなあ……（＾―＾；）

最終話その１（前書き）

今回はサブタイトルに名前がありませんが、その理由はお読みいただければわかります。

最終話その３で完結予定です。

最終話その1

「あ、あ、あ、あ、あっ」

ダメだ気持ち良すぎて何も考えられなくなってきたもうどうでもいいやそんな諦めが私を覆い潰していく多肉植物のように膨れて分裂した私のクリトリスがブルブルと震える戦士の巨大なちんこを突っ込こまれている膣がどぶどぶと白濁した体液を溢れさせているああ気持ちいいイクイクいっちゃうさすが戦士私の一番気持ちいいところよく知ってるもうダメびらびらが勝手に痙攣しているのがわかる息すら出来ないああ脳が黒く記憶が曖昧にな。

どうしてこうなった?

私は異世界の勇者。他の3人とともに、この世界に転生した。
悪魔を見つけ出し、殲滅する。
それが使命だった。

16歳の誕生日、私はそのことを思い出した。

それまではどこにでもいる女の子、いやどちらかといえば目立たない、メガネの女子高校生だった。

私は田中香(かおり)。

お菓子を食べるのが好き。

勉強は嫌い。特に数学。
体育は苦手。だけど、嫌いじゃない。保健はためになるし。
家庭科だけは時々褒められる。
お裁縫は得意な方かな。

友達もそれなりに。
真季子とか、みちるとか、佐和子とか。
まあ、それなりにではある。たまにお昼一緒に食べるぐらい。

好きな男の子は……、いるよ。

日向公造（ひなたこうぞう）くん。危うく光造って付けられそうになったんだって。
明るすぎるよねって。そう、本当に明るい男の子。
中学校から一緒だけど、私の気持ちには気付いてない。私も言えないし。恥ずかしいよ。
日向くん、人気者だしね。生徒会の副会長も引き受けてる。二学期からは会長になるみたい。

美人で評判の会計の田村茉莉（まり）さん。
二人で一緒にいるところは、美男美女。ためいきがでちゃう。

きっと田村さんも日向くんのことが……。

だから余計に何も言えない。
はっきりするのって、怖いじゃない？
それなら、今のままがいい。誰も傷つかないし。

主に私が、だけど。

明日が私の誕生日。１５歳最後の夜。

誕生日だからといって誰かが遊びにくるわけでもない。
友だちを呼ぶ歳じゃないし。

プレゼントは、多分明日学校で貰うだろう。
私も真季子とかにそうしてる。

両親は祝ってくれるけどね。それだけ。兄弟もいないし。
毎年そんな誕生日なんだ。だから、それが特別な日だなんて、深夜１２時を回るまで、全くわからなかった。

テストが近いから、その日も勉強していた。赤点追試は嫌だもん。

カチ。

日付が変わるとともに、私は、切り替わった。

『女子高生、田中香』は消えてなくなった。

悪魔を討伐するために、１６年前に転生の儀を果たした異世界の勇者。
それが私。

探知で、状況はすぐにわかった。

かつて魔王を倒した際、分裂した肉片は三体の悪魔となってこの世界へと逃げた。
転移だ。
私たちは、残念ながら異世界への転移術は持っていなかった。
精霊の姫の御加護で、私たち４人は魂に還元され悪魔を追った。

そしてこの世界の赤子に憑依し、時が満るのを待った。
それが転生の儀だ。

もともとの赤子の意識は、私が覚醒した瞬間に消えた。
転生とはそういうものだ。
田中香には悪いが、悪魔討伐のためだ。やむを得ない。

そしてすでに悪魔はこの世界を侵食していた。
多くの犠牲が出ている。

16年分、出遅れた。だが、まだ間に合う。

悪魔は必ず倒す。その力を私たちは持っている。
まず、仲間を見つけなければ。

戦士、魔法使い、賢者。

三人も、同時に復活しているはずだ。

すぐに家を出た。出るとき、田中香の両親に引き留められたので、振り払ったら気絶した。
頭蓋骨がへこんだような気がした。この世界の人類はかなり脆いのかもしれない。
悪魔討伐のためだ。やむを得ない。

空に飛んだ。星があまり見えない。
夜だというのにやけに明るい。都会だからか。田中香の記憶がそんな情報を伝えてくる。

探知にかかった。

魔法使いだ。
ここから２００キロメートル南西。

ふむ、飛ばすか。

私は超音速で夜空を駆けた。衝撃波で着ていたパジャマが燃えて無くなったので、勇者の装備にアーマーチェンジした。

見つけた。

「勇者！」
「魔術師。お前も覚醒したな」

魔術師も、魔術師の装備にアーマーチェンジして道端に立っていた。

警官が足元で寝ていた。

「どうした？」
「職質された。交番に連れていかれそうになったので殴ったら寝てしまった」

似たような状況だった。

「お前も女子高生だったのか？」
「前園由紀（まえぞのゆき）。昨日までそう呼ばれていた。かなりかわいいらしい。そういう評判だった」
「こっちの美醜の基準はよくわからない。私は目立たないと言われていた」

そういえば、メガネも融けて無くなったな。まあ勇者に覚醒した今は要らない。

「状況は確認しているな」
「ああ、悪魔ども、この世界で既に暗躍しているようだな」
「眷属を増やしている。時間が経つほどこちらが不利だ」
「戦士と賢者を見つけないと」
「まだ感じないところをみると、この国ではないのかもしれない。他の国だと時差がある」
「そういうものか。とりあえず二人でやってみるか？」
「悪魔は今は隠れているようだ。探知にかからない」
「そうか、ならどうする？　勇者」
「ひとまず、休もう。戦いには備えが必要だ。お前の家はあるのか？」
「ある。親兄弟が一緒だが、今は寝ている」

魔法使いの家では、親兄弟が物理的に寝ていた。
殴ったな。

「魔法使い、能力は確認したか？」
「いや、まだだ」
「そうか。試すのにちょうどいいのが来た」
「ああ、そのようだな」

家の床に黒いもやが生じ、巨大な物体がせり上がってきた。

女の顔を持つ熊だ。でかくて白いちんこを振り回していた。
なぜかカリの付け根にハート型の毛が生えていた。

「栗色（ブラウン）の眷属か。お互い小手調べというところか」

「さっさと片付けよう、勇者」
「わかった」

数十分後、前園由紀の家だった場所は瓦礫と化した。

由紀の親兄弟は戦闘中、いつの間にか熊に引き裂かれていた。
こちらも無視していたから、それは仕方がない。
私たちは、悪魔を討伐するために転生したのであって、この世界の人間を助ける義理はない。

熊は、バラバラになった。

女の顔を引き抜いたら、なぜかありがとうと言われた。
すぐに肉が腐って落ち、白い頭蓋骨と化したが。
体内から大量の虫が出てきたが、魔法使いが地獄の業火で焼いた。
ちんこをずぼんと抜いたら、女の胴体に変化し、これもすぐに腐ってどろどろの液体になった。
女の顔の持ち主の体だったのかもしれない。

熊の手も足もちぎり取って、更に肉も骨も細かく切断した。
ちぎったくらいではずるずると再合体しそうになったからだ。
小さな肉片もまだプルプルと蠢いている。
なかなかしぶとい。賢者がいれば精霊の祝福で浄化出来るのだが。

仕方がないので魔法使いの永久凍土で肉片ごとに凍らせ、四方に蹴とばし大気圏外へばら蒔いた。
これでそう簡単には再生出来まい。
賢者と合流できたら、完全に浄化しよう。

なんだか周りがやかましい。

田中香の知識によると、警察とか消防だな。
面倒になる前に逃げよう。

私たちは、飛んだ。
特に当てはなかったが、川べりに派手なネオンが目立っていたので、そこにした。
探知で、風呂が広くてきれいだったのがわかったからだ。なるほど、これがラブホテルか。
田中香はセックスの経験はなかったが、エロ方面の知識は豊富だった。
隠れ助平だった。

最上階の非常扉をねじ開け、近くの部屋のドアを開ける。
鍵がかかっていたようだが、紙同然だった。

女一人と男三人がベッドにいた。探知で満室なのはわかっていた。
面倒だが、仕方がない。

「なんじゃお前らは！」
「コスプレ女子高生？　なんでここに？」
「ああ、ちょうど三対三か。たぶんオヤジが気を利かせてくれたんじゃないか。げへへへ」

背中に落書きのある男たちだった。
女は、意識レベルが低い。探知によれば、薬物中毒のようだ。
胸や下腹部にひどい怪我をしていた。

「ひとりは結構かわいいじゃないすか。ひとりは……ぱっとしませんが」
「いや、こんな素朴な女子高生を堕とせとは、オヤジもいい趣味だ

な。クスリまだあるだろ」

ぱっとしない。素朴。これは私のことだろう。なぜだか腹が立った。

「勇者。これはちょうどいい」

「そうだな、魔法使い。吸収するのに悩まなくて済む」

成り行きで仕方ないことはともかく、善人の犠牲は避けたいところだ。

男の一人がげへへと言いつつ私の胸を揉んできた。

「堅(か)てっ！　なんじゃこの服！」

そりゃそうだ。勇者アーマーだからな。私はアーマー解除した。

「うおっ、いきなり裸に！」

「ちょっと飲みすぎたか？　俺にも服が消えたように見えた……」

「まあ、細かいことは気にしない。げへへ、ねえちゃんたち、とってもキモチいいことしたげるぜ……。ちょっとチクっとするけど、我慢してや。これを射てば天国だぜ……」

私も魔法使いも腕に注射された。魔法使いもアーマー解除している。

「肌触りが年増と違って吸い付くようだな。膨らみは足らんが」

裸の胸を揉まれる。痛い。この田中香の体は未成熟だった。

「なんだ、しっかり濡れてるじゃないか。でも、お前、もしかして」

指をまんこに入れられたが、強い抵抗感がある。

「初物かよ！　うっひょー、いただきー！」

男の指に鮮血がついていた。

「お前、そんな地味女の処女奪って嬉しいか？　俺らはこのおっぱいちゃんとやるぜ」

魔法使いの胸は確かに大きい。やっぱりむっとする。

まあいい。多少は楽しませてあげるとしよう。

環境は大切だ。食物は丁寧に育てないと美味しくならない。

魔法使いも、同じ気持ちなんだろう。何の抵抗もしていないし。

むしろ誘っている感じだ。

よし、来たまえ。私の、いや田中香の処女まんこを存分に味わうがよい。

男が私に覆い被さってきた。

長いちんこを私のまんこに差し込む。

ぐちゅる。

ぶちっ、ぶちぶちぶちっ。

ぐちゅるるるる。

処女膜をあっさり貫通したちんこは最奥まで届いたが、まだ三分の一が外に出たままだった。

男は体重をかけて更に腰を進めた。

ぐうと子宮が押し込まれ膣が破れそうな激痛が走る。

「うひゃひゃひゃ～～～～！！　マジバージンだぜこの地味子！
しかもトロトロだ！　コレ血だけじゃないぞ！！　マン汁ぶしゃぶ
しゃじゃねーか！！！　あははは！！　ＪＫサイコー！！！！！！」

そう言いながら男は私の小さな乳首に噛みついた。

「ひゃひゃひゃひゃ！！！　乳首も針みたいに尖ってやがる！！！
この女、どスケベだぜ！！　地味な顔してよ！」

乳首からも血がにじんだ。
地味地味言うな。むかむかしてきた。

隣では、魔法使いが二人にのしかかられていた。
膝を持ち上げられ、上向きになったまんこに垂直にちんこをぶち込まれている。
もう一人は胸の間でちんこを擦っていた。乱暴に乳房を両手で握り、前後に擦っている。

もともといた女は床に放り出されている。
意識レベルがさらに落ちている。このままだと死んでしまうかもしれないな。

「こっちの美人ちゃんは慣れてるぜ！！　処女じゃないとは思ったが、なかなか絞まるぞ！！」
「おっぱいも柔らかいのにハリがあって、ただでかいだけじゃなく、まんこみたいに包み込んでくる！！」

「あっ、あっ、あっ、あっ」

魔法使いが喘いでいる。
と思ったら、私も声が出ていた。

「あーっ！　あーっ！　あーっ！」

まあ仕方がない。所詮この体は女子高生だ。
それに田中香はセックスにもともとかなり興味があったからな。
日向公造を思いながら、オナニーもよくしていた。
ルックスに自信がないため、本番には踏み出せなかったが。

「うおおお！！　ＪＫ無責任生中出しキモチイイーーー！！！
孕めっ！！　孕めっ！！」

男は私のまんこの最奥に射精した。

「おっほーーー！　お前のまんこ気持ちいいな！　地味顔のくせに！　おらケツ向けろ！！」

私はうつ伏せに返され、腰を持ち上げられた。

「ばっくりまんこから赤いのと白いのとが垂れとるわ！　ぎゃはは！　きったねー！　きたねーついでにケツの処女もいただき！」

男は肛門に長ちんこを捻じ込んだ。愛液まみれとはいえ、さすがに痛い。

「ほれほれ地味女！　一晩で前と後ろの処女喪失嬉しいだろ！　ありがたく思え！」

ガンガンケツの穴を掘られる。ウンコがちんこにこびりついてる。汚いな。

ってきたねーついでってこういうことか。

「あぎゃあああああああぁっぁっぁあぐぎゃあああがががああああぁぁぁぁぁ！！！」

私は絶叫していた。薬のせいなのか、田中香の未熟な体のせいなのか。

両方か。

魔法使いを見ると、まんことパイズリでいったん精液を放出した男二人は、今はまんこに二本差しをしていた。

ああ、死にそうな女もこれをやられたんだな。まんこ二本差しに加えケツの穴同時の三本差しとみた。

きつかっただろうなあ。

魔法使いが絶叫している。

「おらっ！　いけっ！　いけっ！」

「あああああああーーーーあああーーーあーーあーーーあーーあああああーーーー！！！！！！！」

「俺らのパイルバンカー、思い知れっ！　ぐはははははは！！！！！」

「バンカーバスターだろ！！　うひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃひゃ！！！！」

そろそろお互いに絶頂を迎えるな。いい頃合いだ。

私と魔法使いは目くばせした。

「うぎゃあああぁぁぁあああああぁぁぁぁぁぁ！！！！！」
「うふっふぅううううぅぅぅふふふうううぅぅぅああああああ！！！」

私たちは、男たちの命を吸った。

「……何が……、どうなった……」

風呂から出ると、白髪のじじい三人が、体を起こす力もなく床で蠢いていた。

「生命エネルギーを、貰った」
「なかなかの量だった」

たしかにこいつらの生命エネルギーのポテンシャルは大きかった。まともな職についていれば、ひとかどの人物になれたくらいには。

「うん、かなり充填出来たな、勇者」
「そうだな、魔法使い。あの熊ぐらいなら、2、３０匹ぐらい一度に来られても撃退できる」
「覚醒して４時間か。戦士と賢者が探知出来ないのは、なぜなんだろう」
「日本は世界の中では早く日付が変わる国だ。最大２０時間遅れの地域がある。まだ昨日のままの場所の方が多いのだ」
「そうか。面倒な世界だ」

私たちの世界は平面だった。
魔法使いは日付変更線を知らないようだ。前園由紀は地理が苦手だったのかもしれないな。

「男たちはこのままとして、女はどうする？　勇者」
「未来予測したが、蘇生させると男たちを老人にした犯人として組織に家族や恋人もろとも殺されてしまうようだ」
「では、組織を壊滅させたらどうか」
「我々がか？　なぜ？」
「この世界には、袖すりあうも他生の縁という言葉がある」
「……ふむ、なるほど、縁か。記憶にあるな。しかし、それ以前の問題として、この女は善人か？　魔法使い」
「過去探知。この女は高校教師。生徒に慕われる先生だ。組織とかかわりを持った生徒を更生させようとして、この男たちの罠にはまった」

魔法使いは過去探知。私は未来予測が使える。通常の探知は私たち４人の共通スキルだ。

「わかった。エネルギーは十分だ。もう少し体を慣らすとしよう」

それから一時間ほどで、私たちは日本最大といわれた反社会組織を壊滅させた。
女教師の肉体を修復し、記憶を消して自宅に送り届けたのはいうまでもない。

最終話その１（後書き）

ＵＴＣ－１２がＵＴＣ＋９の日本から見て最大時差のある（最も時刻が遅れている）地域ですが、無人島しかないので省きました。念のため。

最終話その2（★）

16年前、この産婦人科病院で小さな奇跡が起きた。

4人の妊婦が、ほぼ同時に陣痛を訴えはじめ、そしてまったく同時刻に4人の子供を産んだのだ。

秒まで同じだった。

すべて女の子。週数はまちまちだったので、大きな子も小さな子もいた。

その後の母子検診でも4人はよく顔を合わせた。まあ、それはそうだ。同じタイミングになるからだ。

だが、ひとり、またひとりと転居していき、やがて一人を除いて当院に来ることはなくなった。

母親の名は、里中　真琴（まこと）。

娘の名は、里中　悠理（ゆうり）。

「ふむ、なるほど」

女医の耳の穴に舌を差し入れ、長く伸ばした先で脳を舐めとっていた亜麻色（フラックス）の髪の青年は一人ごちた。

「やはり勇者案件だな。やつら、転生術を使ったわけか。精霊の姫の仕業か。面倒なことを」

青年は既に当時のカルテを見つけていた。

4人の名前。田中香、前園由紀、柴田キャサリン、そして里中悠理。

里中悠理以外の3人の居場所はここではわからなかった。
だが、一人わかっていれば、どうということはない。なぜなら、奴らは覚醒すればパーティーを組むからだ。
俺たち悪魔とは行動原理が根本的に違う。
仲間など理解しがたい。が、この習性は利用できる。
勇者の情報は銀色（シルバー）、栗色（ブラウン）に流すとしよう。
奴らが先に動いてくれれば、助かる。
潰しあってくれれば、さらに良し。

青年は女医の体を放り投げた。もはや知るべきことは得た。ばあさんの体に興味はない。というか臭い。
それに、この産院には、青年好みの女がほかにたくさんいた。夜は長い。

翌日、出勤してきた看護師が蒼白になり、器用にも吐きながら警察に通報した。

産院は人糞まみれになっていた。そして妊婦や褥婦（じょくふ）の姿が消え、新生児は死んでいた。
その日当直だった病院長は院長室でバラバラ死体で見つかった。
新生児たちは、のどにウンコを詰まらせて窒息死していた。
例の事件があったため、ただちに科捜研でＤＮＡ検査したところ、すべてその新生児の母親のＤＮＡが検出された。
妊婦がいたベッドには一本糞が残され、妊婦自身と胎児のＤＮＡがそれぞれと一致した。

夜勤の看護師たちのうち、年配の女性と男性はバラバラ死体で残され、若い女性はナースセンターでウンコと化していた。

その夜、殺された人数は胎児込みで４２人。うち喰われた人数は３２人だった。

◇◇◇

明け方近くになって、賢者が探知できた。
しかし、反応が弱い。
不審に思いながらも、私と魔法使いは反応のあった場所へ飛んだ。
西へ９千キロメートル。

昇りはじめた太陽がまた沈み、夜空になる。
やがて爆発音が聞こえる地域の上を超えた。
賢者の反応はこのあたりだ。

「勇者、戦争地域のようだな」
「内紛だ。この国は元首が暗殺されたり、宗教対立があったり、軍が南北に割れたりと不安定だ。隣国が例の国なのもあって、火薬庫中の火薬庫と言われている」
「よく知っているな」
「高２なら、現代社会でつい最近習っただろう……」

魔法使いが顔を赤らめた。前園由紀は現代社会を選択していないのか。それとも勉強が苦手なのか。
反応からすると、後者だな。

「魔法使い、お前の責任じゃない」
「この世界の知識がないのは不利だ。残念だ。過去の私を叱ってやりたい」

「気にするな。ここですべきことは賢者と合流することだ」

私の前身だった田中香も決して成績は良くなかった。勉強は真面目にしていたのに。

地頭が足りなかったのだ。

賢者が近くにいるのは間違いないが、反応が薄いのが気になる。

まさかと思うが、死に瀕している？　賢者が？

考えられる可能性があるとすれば、覚醒前の体を傷つけられた場合だ。

ただ、仮にそうだとしても、覚醒すれば完全治癒するはずだが。

私たちは反応のある場所へ急いだ。

軍事施設内にある建物の一つだった。

反撃があった。トラップもあった。待ち伏せだ。

日本の反社会組織を潰した時より抵抗の数は多かった。

数が多かっただけで、私たちのアーマーを破る威力はなかったが。

敵対するものは躊躇なく無害化した。敵にかける情けは持ち合わせない。

死体の山を築きながら、私たちは進んだ。

いた。

なるほど、これでは治癒魔法を展開できない。納得した。

鉄のベッドに括り付けられている賢者には、魔法を詠唱する口がなかった。下あごを舌ごと毟(むし)り取られていた。

瞳も太い鉄槍で刺され潰されていた。賢者固有スキル、聖眼によ

る無詠唱魔法も塞がれていた。槍は後頭部まで抜けていた。
四肢は付け根で切断されてなくなっていた。指での立体術式も描けない。
両乳房と性器をえぐり取られていた。女の象徴を利用した母性魔法の発動も出来ない。
脊髄と骨盤を割られていた。末梢神経を経由した自律防御魔法も潰されていた。
破壊個所は剥き出しの骨髄や末梢神経に電極を付けられていた。再生阻害のためだ。
そしてなにより、頭蓋骨を割られ、脳を破壊されていた。ピンク色の脳細胞に靴跡がいくつもあった。
鉄のベッドの上で踏み荒らしたのだ。もしかすると、頭蓋骨も踏み抜いたのかもしれない。
その上で、頭蓋骨底部に電極を6本刺されていた。
目の鉄槍と交差し脳幹を延髄まで貫いていた。

徹底していた。
賢者の能力を熟知したうえでの手口だった。

ということは、ここにいた奴らは悪魔に使役されていたのだ。
ただ、当の悪魔や、眷属の反応はなかった。
ただの精神汚染だ。

「魔法使い、どいつのでもいい。下あごをくれ」
「承知した」

勇者である私は、賢者ほどではないが治癒魔法が使える。
というより、賢者、戦士、魔法使いの能力をそれぞれ7割以上備えた者が勇者だ。
もちろん勇者固有のスキルもある。

賢者なら、無から有を生み出せるが、私にはそれは出来ない。

兵士の死体からむしりとった血が滴る下あごを魔法使いから貫い、賢者の上あごにくっつけた。血だらけなので、接着は容易だった。

「■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■！！！！」

賢者の口が動き、まぶしい光が辺りを覆った。

「ふう、一時はどうなるかと思いました。勇者、魔法使い、ありがとうございます」

金髪の、五体満足な少女が立っていた。

アーマーを身にまとっていた。

「賢者だな」

「はい、前身は柴田キャサリンでした。キャサリンの時には、なぜ拘束されたのかわからずただ泣き叫んでいましたが、ここの連中は私を賢者だと知っていたのですね」

「そうだな。悪魔に精神を乗っ取られていたようだ」

「キャサリンが絶望のなかで苦しみぬいて死んだ記憶があります。この国、全滅させてもいいですか？」

「国全体が悪魔に堕ちたわけではないようだ。が、私たちは判断する立場にない。お前が決めろ」

「分かりました。キャサリンの父、母、姉もこやつらにキャサリンの目の前で惨殺されました。すべてを消し去りたいところですが、キャサリンの肉親は善人と呼べる者でした。まだそんな民も残っている可能性があります。軍だけを破壊します」

この後、戦力を喪失したこの国は、隣国の侵攻によりわずかな期間で地図から消えたが、それは私たちの関知するところではない。

それよりも。

「勇者、お前のいた学校が襲われている」

「ああ、探知している、魔法使い。揺さぶりをかけるつもりなんだろう。悪魔め」

日本ではもう午前10時を回っている。高校では2時間目が始まったタイミングだった。

◇◇◇

体育で運動場にいた生徒が最初に異変に気付いた。

「なんだありゃ!?」

「妖怪映画?」

「おいおいおいおい、こっち来るぞ！　やばいやばいやばい！」

晴れていたはずの空が暗くなり、いなびかりと共に無数の魑魅魍魎が空中に現れた。

鬼、夜叉、般若、餓鬼、人面蜘蛛、牛頭（ごず）、馬頭（めず）、人魂……。

それらは、半透明に揺らぐ蜃気楼のように、学校に降りてきた。

「こ、校舎に逃げ込め！」

「助けてー！！！」

「おかーさーーん！！！！！」

逃げ惑う生徒の上に、蜃気楼が覆いかぶさっていく。

「あああ！！」

「ひとみちゃん！」

「たすけて！」

「ああ、うげえええええ！！！、先生ーーー！」

蜃気楼に取り込まれた生徒は、そのまま変化した。鬼の影が被さった女生徒は、筋骨隆々の巨大な鬼へと化した。

受肉だ。

運動場にいた生徒は次々と巨大な怪物、妖怪へと変身する。

「こりゃ、いったい、なにが、どうなって！」

「先生、助けてくだ、うぎゃごっ！」

体育教師が振り向くと、背後で庇っていたはずの女生徒が巨大な蜘蛛へと変身していた。

「山崎！」

節足動物特有の左右に開く巨大な顎が、体育教師が見た最後の景色だった。

校舎内でも阿鼻叫喚が始まっていた。

運動場のみならず、窓から教室に入ってきた怪異な影が生徒に取りつき、怪物へと変えていく。

怪物、妖怪と化した生徒は、手近な級友や教師を襲い、齧り付き、手足をもぎ取り、殺し始める。

「非常口だ！　階段で外に逃げろ！」

そう叫んだ教師は、校舎外の階段の上で絶望を知る。

逃げるべき運動場は、怪物の巣と化し、体操着の生徒たちを喰い荒らしていた。

「だめだ！　だめだだめだ！！」

外階段に殺到する生徒を押しとどめるが、何十人もの圧力にはかなわない。階段を転げ降りる先には、涎を垂らした餓鬼が何人も待ち構えていた。

「ひぃぃぃ！」

ばこん！　がきん！　ぐしゃ！　むしゃ！

教師も生徒も噛み砕かれ、咀嚼されていった。

ぶっと餓鬼が吐きだしたのは、制服などの切れ端。血だらけのスカートやブラウスだった。

「田村さん！　無事か！？」

「日向くん！　生きてるわ！」

生徒会室に立て籠もった田村茉莉は、日向公造と再会した。この部屋は準備室の奥になるため、窓がない。日向は入り口の扉にしっかりと鍵をかけた。

「とりあえずは籠城だね。しかし、まさかこんなアニメみたいなことが現実に起こるなんてね」
「日向くん、案外のんびりしてるのね」
「取り乱しても仕方がないさ。ここには食料もあるし。こんな騒ぎになってるんだ。それに自衛隊ぐらいじゃないと対処できないだろ。あんな怪物たちには」
「来てくれるのかな？　世界中でパニックになってるってことは？」
「スマホ使えるよ。ワンセグでテレビつけてみたけど、普通に生バラエティをやってた。世界中に怪物が出たってことじゃないみたいだよ。警察にも通報できたし。信用してくれてなかったけど、来てくれさえすれば」
「そう、なら、救援を待つのがベストよね」
「そうだ。運動場は怪物だらけだし。下手に外に出るより、待とう」
「わかったわ」

だが、日向たちは知らなかった。右往左往する生徒たちの中に、異質な二人がいることを。
黒髪のスレンダーな少女と、薄い栗色の髪を持つグラマーな少女。タイプは違うが、どちらも驚くほどの美少女だった。
ほかの生徒とは異なる制服を来て、怪物から逃げ惑う生徒とすれ違いながら、なにか手を動かしている。

すれ違った生徒は「ぎゃ！」と叫んで怪物に変化した。
蜃気楼に取りつかれたわけではなかった。
動体視力の優れたものであれば、すれ違いざまに栗色の髪の少女が指に持ったクレパスで生徒の額に小さな怪物の絵を描き、黒髪の少女が耳に付けたピアスを引っ張ったのが分かっただろう。
ピアス穴から白い液体が水鉄砲のように1滴飛び出し、額の絵にかかったとたん、その絵の怪物に変身したのだ。

二人の美少女は微笑みを浮かべながら、生徒を次々に妖怪へと変えていった。

美術室でデッサンの授業を受けていたクラスが、窓を破って入ってきた牛頭と馬頭に襲われた。

芸術科の女教師宮崎明日葉が、ペインティングナイフや彫刻刀で勇敢にも立ち向かおうとしたが、腕を齧られ気絶した。

悲鳴を上げる生徒たち。デッサンクラスは三分の二が女子だった。パニックになって美術室を出ようとすると、扉の前に二人の美少女がいた。

「どいて！」

「あぶない！　宮崎先生が！」

「え？　どこの生徒？」

「逃げて！」

二人の美少女はそれらには答えず、何人かの女生徒を怪物に変えた。

指がクレパスになった小鬼だった。

小鬼になった少女たちはうなづくと、周りの生徒に落書きを始めた。小鬼に描かれた生徒は、夜叉や餓鬼や人面蜘蛛に変化し、他の生徒を齧り始めた。

クレパス小鬼は別の場所に向かった。あちこちで生徒を怪物に変えていく。

サイレンの音が近づいてきた。

半信半疑ながら、通報が相次ぎ、現場確認に来たパトカーだった。

離れた場所からも悲鳴が聞こえる。よく見れば、運動場に巨大な人影があった。

あれはどうみても、鬼だ。
おいおいおいおい。マジかよ。パトカー1台では手におえないと、警官が応援を要請した。
報告内容を聞き、警察本部は公安9課の出動を決めた。
それに、一般警察は、日本各地の○○組事務所がなぜか壊滅している事件に朝から手を取られていた。

9課は、かつてエース刑事を『やつら』に惨殺された特殊組織だ。汚名返上の機会であった。

◇◇◇

私は魔法使いと賢者を残し、最大速度で日本へと戻った。このスピードに付いてこれるのは戦士だけだ。

さて、学校が見えてきた。憑依され怪異生物と化した者多数。悪魔の眷属もいる。
悪魔本体は……。やはりいないな。
隠れてこそこそするのが奴らの性分だ。
人間もけっこう生き残っているな。超攻撃魔法で悪魔の手下など一撃で全滅させられるが、田中香の見知った者がまだいる。救出優先でやるか。

「聖なる矢（ホーリーアロー）」

私は空中で指先から光弾を撃った。校庭でむしゃむしゃ生徒を食べている怪異生物を貫く。
怪異生物はボンと弾け、生徒に戻った。バラバラ死体だが。

聖なる矢で校庭の怪異生物をあらかた片付け、そのまま窓から校舎に入る。血と肉片が廊下を汚し、悲鳴が溢れていた。
腰が抜けたのか、泣き崩れたまま動けない者、叫びながらおろおろしている者、教室で固まっている集団、友人だろうか、誰かの腕だけを持って走っている者。
そんな生き残りに怪異生物が襲いかかろうとしていた。

「聖なる矢（ホーリーアロー）」

狭い通路では曲射が出来、貫くだけの聖なる矢の使い勝手が良い。
私は怪異生物を次々に弾き飛ばしていた。
変異が解けると、生徒たちのバラバラ死体に戻るのが痛ましい。
が、いったん変異した者を元に戻すことは出来ない。

「香！　あんた何その格好！　んでなにやってんのそれ！？」

ボンボン破裂させていると、記憶にある人物が駆け寄ってきた。
佐和子だ。

「敵を殲滅している」
「は？　なんかすごい能力っぽいけど、なんで殺しちゃうのよ！　今あんたが破裂させたの、みちるだよ！　助けてあげられなかったの！！」

二つに割れた顔面は、たしかに田中香の友達だったみちるのものだった。

「仕方がない。怪物になったものは治せない。お前は生き残った。私は生きているものを救う」
「なに言ってるの？　香、おかしいよ！　その格好も！　なに？

正義のヒーローってわけ？　悪に染まったものは許さない的な？
ヒーローならみんなを救ってよ！！！」

私は佐和子を突き飛ばした。ギャッと言って転ぶ。腕が折れたかもしれないが、佐和子が立っていたところに下から巨大な蜘蛛の足が床を割って突き上がった。

「死にたくなければ隠れていろ」

どかーんと大きく床を崩し、人面蜘蛛が出現した。

「光の剣（クラウソラス）」

右腕を横に広げ、それが延長するかのように光の剣が出現する。横薙ぎにすると、ほとんど抵抗なく蜘蛛は上下に分断され、そして上半身と下半身に分かれた女生徒に戻った。

「真季子！」

佐和子が叫ぶが、他にも脅威が残っている。

「あんた！　香！　あんた人間じゃない！　これじゃ化け物と同じよ！」

そうかもしれない。私は勇者。ある意味、悪魔と同じ存在だ。
だが、私は、私たちは悪魔を倒す。それが使命だからだ。

私はその場に佐和子を残し、聖なる矢、聖なる剣を振るい怪異生物を壊滅させていく。数が多いだけで、フロアを一掃するのにさほどの時間もかからなかった。次は下だ。

指がクレパスになった小鬼が、生徒たちを怪異生物に変えているところに遭遇した。

なるほど、憑依された者を利用して数を増やしているのか。害虫め。

小鬼になった者を光の矢ですべて駆逐した。生徒のバラバラ死体の山となった。

美術室から這い出てきた片腕のない女教師が、その山を見て絶叫していた。

「護れなかった……！！！　先生を許して……！！！」

それだけ言うと女教師は気を失った。失血のせいだろう。

真面目な先生なのだろう。

私は適当な生徒の死体から片腕を拾うと、治癒魔法でくっつけた。ちょっとサイズが違うが、ないよりはましだ。

その後、この惨劇から生き延びて、意識を取りもどした宮崎明日葉教師が、生徒の腕が自分に付いていることに気づき発狂するのだが、それは私の関知しない話だ。

ある程度怪異生物を片付けると、眷属と出会った。二人の女だ。

銀色（シルバー）の臭いがする。精液の臭いだ。

二人の女は多数の怪異生物を引き連れていた。一斉に襲い掛かってくる。

光の剣（クラウソラス）がきらめき、すべてをバラバラ死体に変えた。二人がいない？

逃げたか。怪異生物はまだ多い。先に始末しよう。

このフロアもあらかた掃除が終わった。教室の奥に人間の反応がある。誰か生き残っているようだ。
生徒会室だな。

鍵のかかった扉を引きはがすと男女が性行為していた。
いや、一方的に男が女を犯していた。よく見れば、男は下半身が怪異生物、というかちんこが無数に生えたタコのようになっていた。泣きながら女を犯している。人間の意識がまだあるようだ。

私は男の首をはねた。コロンと転がって落ちた顔は知っていた。女は放心状態で半裸で床に寝ていた。まんこと肛門にデカいちんこが4本ずつ捻じ込まれていた。
二つの穴は裂け、もはや使い物にはならなそうだった。とり急ぎ治癒魔法をかける。
痛みが引いたのか、そのまま女は気を失った。同時に首のない男の死体ももとの少年に戻った。
1本になったちんこは、まんこに入ったままだった。

1階に降りた。
警官が多数いた。その背後に眷属が二人。

「悪魔！　おとなしく投降しろ！」

一斉に拳銃が私に狙いをつけた。
探知で銀の弾だとわかった。神式か。私は悪魔ではないから、効かないんだが。
二人にそそのかされたのだな。

「わかった。撃つな」

私は聖なる剣、聖なる矢を消して両手を挙げた。その直後、上から無数の怪異生物が降ってきた。

図体のでかい芋虫が私を一呑みにした。

ぱん、ぱんという銃声が聞こえる。怪異生物相手なら、あの銀の弾でも効くかもな。

そう思っていたが、芋虫がやられる気配はない。仕方がないので聖なる盾（イージス）を全方位に膨張させ、弾き飛ばして脱出した。

周りの怪異生物ごと、私も拳銃に撃たれた。銀の弾は勇者アーマーに傷一つつけることはないが、面倒だ。それに背後の二人が本当の敵だ。

「やめろ、悪魔の手先は後ろの女二人だ」

といいながら、周りの怪異生物を倒していく。死骸がバラバラになった生徒に変化していく。

それを見て、警官たちも事情を悟ったようだ。

「そんな、われわれは守るべき市民を撃っていたのか！！」

「ああ、残念ながら。生徒を怪異生物に変えたのがその二人だ。気をつけろ」

注意したのに、無防備に後ろを振り向いた警官や刑事が、怪異生物に変えられていく。

「あああああ！」

「警部！　武龍（ぶりゅう）部長！」

ドラゴンやガーゴイル、ハーピー、マーマンなど西洋風の怪物だ。生徒とは体力が違うので、変化する怪物もランクアップしたのだろ

う。特にドラゴンと化した部長刑事は強そうだった。

私の敵ではないが。

聖なる剣（クラウソラス）で次々と斬り倒していく。ドラゴンを八つ裂きにし、二人の女に切っ先を向けた。

ぱん、ぱん、ぱん。

後頭部を銀の弾で撃たれた。パニックになって敵味方の区別がつかないのか、それとも私も人外と認識したのか。まあ、その認識は間違ってはいない。私は勇者だからな。

アーマーがないと思って頭を撃ったのだろうが、シールド自体は全身に張られている。たとえ口の中や目を狙っても弾き返すだけだ。

二人の女が何かしようとしたが、動く前に斬り捨てた。ピンクの皮が裂け、白濁した液体がバシャッと周りに巻かれた。

今回はこれで終わりか。

ふと気が付くと、９千キロ先で感じていた魔法使いと賢者の反応が消えていた。

まさか？

最終話その2（★）（後書き）

最終話のサブタイトルに名前がないのは、犠牲者が多くて書ききれないのと、名前のないモブが多いからです。主役自体、田中香じゃなくて勇者（名前はない）ですし。

以下覚書です。

病院での犠牲者数（かっこ内は喰われた数）

中年女性院長　1
男の助産師　1
中年看護師　1
若い女性看護師　3（3）
妊婦　11（11）
妊婦内の胎児　11（11）　多胎なし
褥婦　7（7）
新生児　7　多胎なし
合計　42（32）

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

書き忘れてました。

次回最終回です。

こんな作品がどうだったのか反応知りたいので、感想よろしくお願いします。

活動報告にも書きましたが、評価ポイントもガンガン入れていた

だけるとありがたいです。いやほんと。

最終話その3（前書き）

これにて完結ですが、サブタイトルに★はありません。
ハッピーエンドです！

最終話その３

するとこっちが陽動か。

賢者と魔法使いの二人の方が狙われるとは思わなかった。
狙うなら、単独行動している私の方だろうに。
しかし、二人もいて悪魔に遅れをとるのか？
やつらとの１６年の差はそこまで開いたのか？

しかし、今倒した眷属は大して強くはなかった。何かがおかしい。
未だに探知にかからない戦士のことも気になる。

が、まずは二人の救出を優先すべきだ。
完全治癒を持つ賢者がいるから、死んでしまうことはないはずだが、反応がないということは、それに近い状態ということだ。
おそらく悪魔の結界内に囚われ、生命の危機にある。

未来予測には何のイメージも浮かんでこなかった。
猶予はない。

探知のログを巻き戻す。
あの国の軍隊を殲滅した直後から、反応が消失している。

私は、再度西に飛んだ。

この世界で最も高い山脈を越えるとき、敵に襲われた。

大きく重い何かが、急に現れ体当たりをしてきた。

現れた瞬間に探知と未来予測で軌道が算出できたので、難なく躱した。

だが、なんだこいつは？

空中に浮かんでいるそれは、全体としては翼を持つ大型の獣のような生物だったが、ディテールに人間のパーツが貼り付いていた。

たてがみは黒と白とブルネットが混ざった髪。胸には鈴生りの無数の巨大な乳房とピンク色の乳首。

顔らしき場所には何本ものちんぽがいそぎんちゃくのように生え、長いしっぽは陰部から延びる膨張したクリトリス。

ばさばさと羽ばたく翼は、体の三倍以上の長さに引き伸ばされた小陰唇。

その付け根は体毛、いや陰毛に覆われ、背中でぱっくりと開いた大きなピンク色の割れ目がだらだらと液体をにじませていた。

四本の脚は、人間の手足が増殖し融合したモノだった。いくつもの手のひらや足首がバラバラに蠢いて生えていた。

だが、私を困惑させたのは、その獣から悪魔の臭いがしなかったことだ。

獣は、空を駆けて私に突進してきた。

「聖なる盾（イージス）！」

光の障壁に獣が轟音をたてぶつかる。弾き飛ばされたのは私の方だった。

盾のおかげで無傷だが、なんというパワーだ。

向こうもさしてダメージがないようだ。再度突進してくる。

「聖なる矢連続撃ち（マルチプルアロー）！」

私は両手両足から千本に及ぶ光の矢を速射した。
獣は頭部のちんぽとクリトリス尻尾で矢を薙ぎ払いながらスピードを上げる。
この程度では止められないのか。

「聖なる剣・二刀（クラウソラス　ツイン）！」

盾を消して両手に光剣を出現させた。二刀流での連撃、絶対の剣劇（アブソリュートダンス）、その8！

獣が私と位置を入れ替える間に、ちんぽを切り裂き、四肢を削ぎ、翼をもいだ。
切り裂かれた肉が宙にばらまかれる。

その瞬間、私は戦士の気配を探知した。
まさか？

千切れた肉が、細い腕に変化するのを見た。

その腕が戦士のものだった。

この獣は！

「いやー、気が付いたねー、そう、そのグリフォンは戦士。正確には戦士に覚醒する直前の『里中悠理（ゆうり）』ちゃんだよー。あ、悠理ちゃんだけじゃなくて、おかあさんと、おとうさんと、弟くんと、彼氏くんも混ぜてるけどねー」

「悪魔！　その声は栗色（ブラウン）だな」
「悠理ちゃんの細胞のテロメアをいじって、１５歳と３６４日２３時間５９分５９秒で成長を止めたのさ。だから悠理ちゃんは永遠に１６歳になれない。あはははは！」
「死んだ肉は元に戻る。それで１秒後に１６歳になって戦士の反応が現れたのか。ならば」
「だめだよ、元に戻るのは死んだ方だからね。本体側は元には戻らないよ。それとも仲間を殺すのかい？」
「ああ、殺す」
「おお、怖（こわ）。一度殺して蘇生させるつもりなんだろうけど、死んだ瞬間はただの人間だよ。賢者と違って戦士は自己復活出来なかったよね？　おっと、そろそろグリフォンが再生するよ。まあ、せいぜい頑張ってね～～～」

獣の翼や四肢が元に戻りつつあった。
グリフォンだと？
こいつがそんな可愛いものか。戦士の強さを取り込んだ最悪の魔獣だ。
戦士として覚醒直前とはいえ、力では私を上回る。
単純な攻撃力では私は戦士の７割程度しかないからな。

だが。

「絶対の剣劇（アブソリュートダンス）、その１６！」

出し惜しみはしない。
勇者の攻撃系固有スキル、その最高技だ。
十文字の剣閃が１６連続で輝く。グリフォンは４の１６乗、４２億９４９６万７２９６の肉片に変わり、バラバラと落ちていく。

「聖なる盾・光の牢獄（イージス・ソルプリズン）」

肉片を光の格子に閉じ込め、時間を止めた。
これで戦士は死なない。
賢者と合流すれば戦士の蘇生は可能だ。

どがががががっ！

突如、全身に衝撃を受け、数百メートル吹き飛ばされた。
山脈の絶壁に叩き付けられ、雪崩が起きる。巻き込まれる前に飛びあがった。
脇腹がえぐれ、左足の膝から下が千切れてなくなっていた。
出血がひどい。
勇者アーマーの一部も消滅していた。

流星雨！？

空から燃える弾が次々に降り注いできた。

聖なる盾（イージス）は戦士の肉片を捕縛するのに使用中だ。
私は聖なる剣（クラウソラス）をローターのように回転させ、流星雨を防ぐ。

だが、さっきのダメージからまだ回復出来ていない。バランスを崩し、また全身を燃える弾に焼かれた。

「くっ！」

わかった。

これは、夕べ倒した熊の欠片（かけら）だ。

熊も栗色（ブラウン）の眷属だった。宇宙から呼び寄せたのだ。
やつめ、私が戦士に聖なる（イージス）盾を使うことまで読んでいたのか。
油断した。

空一面から燃える流星が迫る。逃げ場はない。

「勇者魔法・相転移（フェーズチェンジ）！」

躊躇している余裕はなかった。
私の周囲の空間の基底状態が不確定となり、空間曲率が反転し、核子が崩壊した。
光を完全に吸収する黒体幅射の球が広がり、数キロに及ぶ範囲のありとあらゆるものを呑み込んだ。
山肌が真球にえぐれた。

流星雨は全て消滅した。

私は、光の格子と共に雪原に降りた。
傷はまだ治らない。
連戦で、力を使い過ぎた。相転移（フェーズチェンジ）は勇者固有スキルであり、私の切り札の一つだが、燃費が悪い。

まあ、真の切り札よりはマシだが。

『絶対死（サドンデス）』。
周囲全てを巻き込み同時に私自身も死に至る、自爆魔法。

賢者がパーティーにいることが前提の最強にして最悪の魔法。
出来れば使いたくない技の一つだ。

にしても、今の私はボロボロだ。
賢者がいれば即復活出来るが、今は魔法力が回復するか、自然治癒で傷が治るのか、どちらが早いか、というところだ。
私は雪の中に寝転んだ。火傷が冷やされて気持ちがいい。

光の格子は私のそばで半ば雪に埋もれていた。
格子の中は時間が進まない。
戦士よ、もう少し待っていてくれ。
私にも休息が必要だ。

雪布団にくるまってうとうとしていたら、突然雪の中から出てきた腕に体を掴まれた。
そのまま地面の中へ引きずり込まれる。

学校にいた黒髪と栗色の二人組の女。

違っているのは、顔が斜めに裂け、太い糸で雑に縫われていることだ。

……銀色（シルバー）、裁縫苦手なのか。

「うるさいな。ほっといてくれ」

そんな声が聞こえた。
しかし、しつこいな。学校では手ごたえがないと感じたが、倒すのはやはり簡単ではないか。

沈下しながら、女たちが顔を寄せてくる。脇、膝の傷を舐られ、長い舌を差しこまれた。
そして、白濁した液体を傷口から体内に流し込まれた。

銀色（シルバー）の精液だ。

異常な増殖が始まり、傷口からピンク色の肉の塊が生えてきた。さらに表面がブドウ状に分裂し、多数の嚢胞と化して爆発的に膨張する。

両生類の卵のような半透明の腫瘍が、ぶち、ぶちっと破裂して膿を噴く。

猛烈な痛みと痒みに襲われる。

「あがあああぁぁぁ！！」

たまらず私は悲鳴を上げた。その間にも脇と脚からは次から次へと肉芽が膨らみ、嚢腫が分裂して増えていく。

ごんっと強い衝撃があって、私の体がバウンドした。地面の下の地面に叩きつけられたのだ。

私は落下の衝撃よりも、異形の細胞が増殖する苦痛でのたうった。女二人が笑いながら私を見下ろす。戦士を閉じ込めた光の格子は傍らに転がっていた。

ここは地下の洞窟のような場所だった。周囲は暗い。

ややあって、魔法使いと賢者の反応を感じた。

私はやや戻ってきた魔法力を自身の内面に集中した。

口とケツ穴から増殖した嚢胞を吐き出した。

同時に足と脇を再生し、勇者アーマーを閉じる。
魔法力が心もとないが、体は復活した。
悪魔どもめ、油断したな。

反撃だ！

勇者、戦士、魔法使い、賢者が揃えば悪魔など取るに足りん。魔王ですら倒したのだから。

笑うサンマ傷の女二人を蹴飛ばしながら飛びあがった。

「愚かだな！　悪魔ども！　私たちを集めたのが貴様らの敗因だ！」
「ほう、そう思うのか」

闇から出現したのは、亜麻色（フラックス）の悪魔だった。
おかしなオブジェを引き連れていた。

よく見れば、それは人間の女だった。

股を大きく開き、右足を高く天に伸ばしている。その右足に胴体がぐるぐると巻きついている。
胴がアメのように長く伸び、巻かれているのだ。
足首付近におっぱいが左右に伸びているが、このおっぱいも長く引き伸ばされ、胴の上からかぶせるように上から下へ2，3回巻きつき、さらに紐のように細く長いピンク色の乳首がぐるっと一周してちょうちょ結びに縛ってリボンのように固定されていた。

足裏に乗っかっている顔面は、唇から裏返って顔全体を覆っていた。そのため赤い粘膜をかぶったようになった中心に歯茎がむき出しの口があった。

顎は大きく開いているので、見た目は肉で出来たチューリップの花のようだ。
その真ん中から舌が長く上に伸びていた。
さらに裏返った唇と顔の隙間から長い肉の茎が生え、二つの目、耳、鼻がその先に付いていた。
それらは長い舌の真ん中あたりでひとつに結ばれ、チューリップの上でぶらぶらしていた。

大きく開いた股の間のまんことケツ穴には、自分の腕を肘までめり込ませていた。肩の位置ははるか上だが、二の腕が長く伸びているから可能になっていた。
まんこからもケツ穴からも肉汁がだらだらと溢れ、淫臭を放っていた。

そんな物体が、唐傘お化けのようにスキップしながら、亜麻色（フラックス）に並ぶ。

「魔法使い！」

そう、そのオブジェは魔法使いだった。

「あー、こいつは魔法はもう使えねーぜ。この口じゃ詠唱できないし、マンコとケツ穴から手首が抜けねえから魔法陣描けないからな。お嬢が生かしてるが、ざっくり言ってイキ狂いの廃人だぜ」
「賢者はどこだ、悪魔」

知性を消され支配されていようが、賢者がいればどうということはない。
探知では確かに賢者がこの洞窟内にいる。
賢者はどうしたんだ？

いや、賢者に何が起きたんだ？

「賢者だって？　そんな奴は初めからいねーよ」
「なに」
「お嬢、種明かしを頼んだぜ」

魔法使いの背後の闇から溶け出すように、賢者が現れた。

薄く微笑んでいる。

「賢者、どういうつもりだ。なぜ仲間を助けない」
「うふふ、勇者。私は賢者ではないわ」

賢者はそういうと、賢者アーマーを解いた。
きらりと光って、薄絹の衣をまとった美少女に変化した。

美少女。

そうだ、この世界の美醜の基準に疎い私にもわかる。
圧倒的な美。
精霊の姫もかくや、という絶対至高の美の化身が目の前に顕現し、
私は感動に包まれた。

この御方は、いったい何者？

「彼女はお嬢。もともとは悪魔と人間のハーフで、俺の娘みてーなもんだったが、賢者を捕食して進化した。賢者・悪魔・人間の鼎（かなえ）。全能の神と対になる全知の象徴だ。今や俺たち悪魔もすっかりお嬢の下僕だ。わかるだろ？　この気持ち」

わかるぞ、亜麻色（フラックス）。
この御方こそ、我らが仕えるべき主だ。

しかし、なるほど。
賢者は勇者パーティーの中でも特別な存在だった。もっとも精霊王に近い。
悪魔と人間と賢者が融合すると、このような素晴らしい御方になるのか。

「しかし、だとしたら、捕まっていたあの娘は？」
「あれは賢者になるはずだった柴田キャサリンのコピーだ。お嬢が捕食した後、ダミーとして作ったものだ。賢者が復活したように見せかけて、お嬢と入れ替えた」
「そうか、よかった。この御方があのような姿にされていたのなら、世界を滅ぼさねば気が済まないところだった」

こうして私は『お嬢（レディ）』の配下となった。

クリトリスや乳首を大量に増殖して性感を極限まで高めたちんぽの化け物戦士や唐傘魔法使いとのセックスを堪能しながら、時々は銀色（シルバー）や栗色（ブラウン）と組んで人間相手に遊んでいる。

この世界の全てを、お嬢（レディ）に捧げるために。

―完―

最終話その3（後書き）

このようないろいろひどい小説を、最後までお読みいただき本当にありがとうございました。

ポイントやご感想などを頂けると大変嬉しいです。この下にリンクがありますのでご利用ください←

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n9084er/

かきしの！　～かわいい女の子やきれいなお姉さんが見る影もなく破壊しつくされて殺されるだけの話～

2024年6月9日23時27分発行